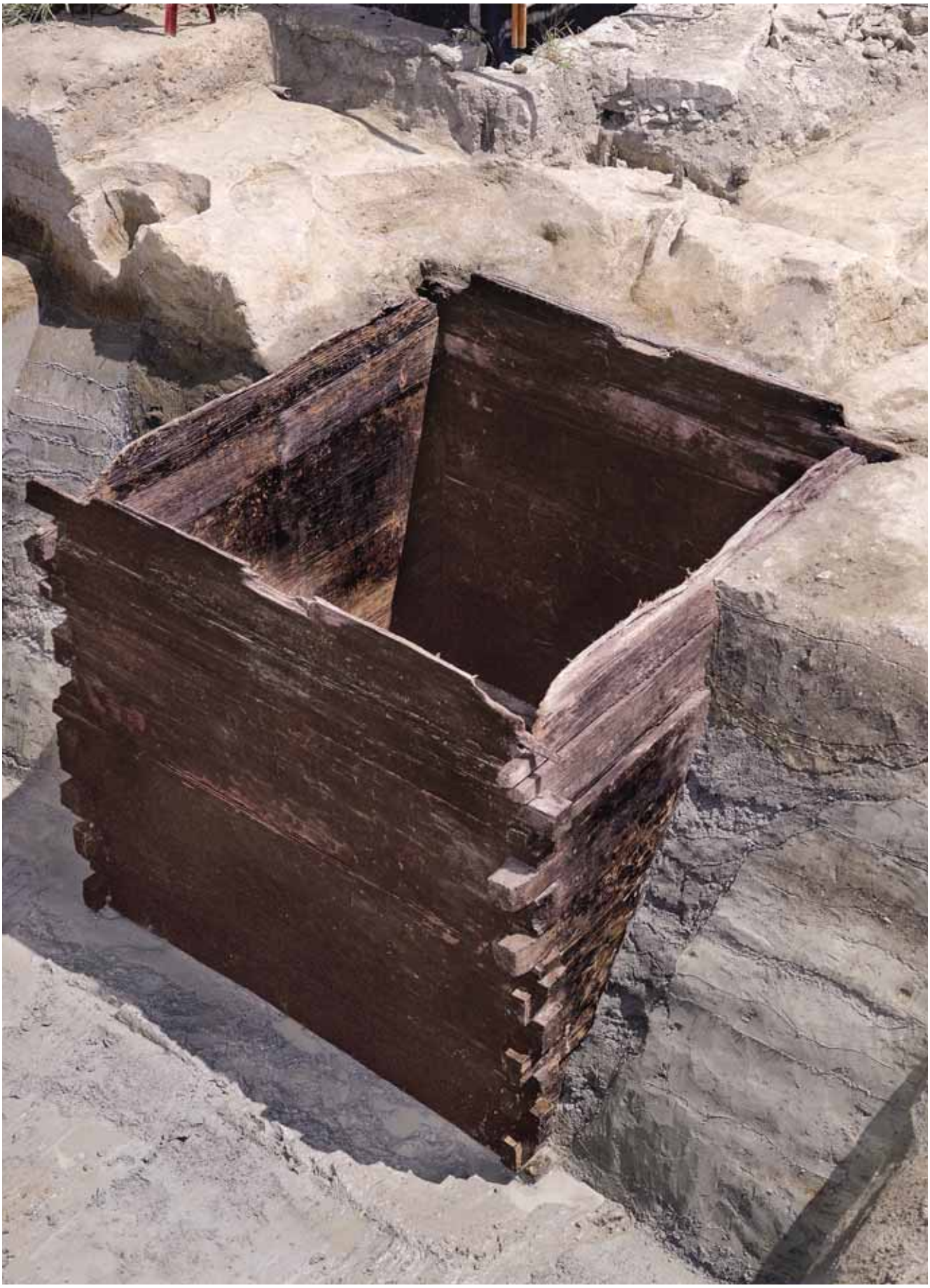
西大寺食堂院・右京北辺
発掘調査報告

2007

独立行政法人
文化財研究所
奈良文化財研究所



SE950検出状況（南西から）

SE950出土木簡

SE950出土奈良三彩・緑釉

SE950出土製塩土器

緑釉磚・褐釉磚・二彩垂木先

包含層出土奈良二彩・白釉

序

現在、大和西大寺駅の西南に伽藍を構える西大寺は、奈良時代後半に造営された寺院で、造営当初は平城京右京一条三・四坊に31町という広大な寺域をもっていたと伝えられています。また、その北側には、右京北辺と呼ばれる地域が存在していました。いずれも、現在は商業地や住宅地となっており、近年も大型マンションの建設など、開発が相次いでいる地域です。

本書は、西大寺食堂院跡と比定される右京一条三坊八坪、および右京北辺三坊三坪の発掘調査の概要報告書です。調査では、西大寺食堂院の主要堂舎や、両坪の中間を通る大路などの遺構を検出し、これまでまとまった資料が存在しなかった西大寺食堂院や北辺坊について、多くの重要な成果を得ることができました。また、遺構のみならず、木簡をはじめとする数多くの遺物が出土し、これらは古代史研究をすすめるための貴重な資料となることでしょう。

なお、今回の発掘調査および報告書作成にあたってご協力とご援助を賜りました、東京建物株式会社、東急不動産株式会社、近鉄不動産株式会社、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、㈶元興寺文化財研究所、近隣の自治会をはじめとする関係諸機関の方々に対しまして、厚く御礼申し上げます。

2007年3月

独立行政法人文化財研究所

奈良文化財研究所

所長　田　辺　征　夫

目　　次

序

Ⅰ　調査の概要
　1　調査に至る経緯　1
　2　調査経過　1
　3　調査地周辺の既往の成果　2
Ⅱ　遺　　構
　1　右京一条三坊八坪の遺構　6
　2　一条北大路の遺構　15
　3　北辺三坊三坪の遺構　15
Ⅲ　遺　　物
　1　木　　簡　16
　2　瓦 磚 類　22
　3　土器・土製品　24
　4　金属製品・木製品　34
Ⅳ　自然科学による分析
　1　年輪年代測定　42
　2　環境考古学分析　44
Ⅴ　調査の成果　47
〔付章〕　西大寺食堂院の配置計画と建物の復元　49

図　　版
報告書抄録

挿　　図

図１　平城京条坊と今回の発掘調査地
図２　「西大寺資財流記帳」（部分）西大寺蔵
図３　調査区周辺の調査　1:12,000
図４　調査区の名称と位置
図５　SB960の番付および柱間寸法
図６　SB960礎石据付穴（ハ１）壺掘り地業
図７　遺構平面図　1:400
図８　各遺構柱穴断面図　1:40
図９　SD931～934　断面図（X＝－144,668）　1:40
図10　SD985　断面図（Y＝－20,102）　1:40
図11　北門SB975礎盤石検出状況（北西から）
図12　井戸SE950完掘状況（東から）
図13　SX930埋甕検出状況（北西から）
図14　SE950・SB951　遺構平面図　1:100
図15　SE950　断面図　1:40
図16　凝灰岩列SX935（南から）
図17　南区東部・南東区・東区　遺構平面図　1:200
図18　SE945検出状況（南西から）

図19　「延暦」紀年銘のある越前関係の荷札（赤外線デジタル写真）
図20　SE950出土墨書戯画磚
図21　出土瓦（１～20は1:4　21・22は1:8）
図22　SE950から出土した土師器・黒色土器　1:4
図23　SE950から出土した須恵器　1:4
図24　SE950から出土した施釉陶器・陶硯　1:4
図25　SE950から出土した須恵器甕　1:6
図26　SE950から出土した製塩土器　1:4
図27　SK947から出土した土器類　1:4
図28　施釉陶器・瓦磚の出土分布
図29　SX930甕の口縁部形態と配列
図30　SX930から出土した須恵器甕・黒色土器・土師器（131～133は1:6　134～136は1:4）
図31　SD941・SD942・SE950・SB951出土金属製品　1:3
図32　SE950出土木製品　1:3
図33　井戸枠実測図　1:20
図34　外面の打刻印
図35　井戸枠実測図　1:20
図36　井戸枠実測図　1:20
図37　SE950井籠組模式図
図38　SE950井戸枠の年輪年代測定結果
図39　１段目東の樹皮残存状況
図40　１段目東の木口切片
図41　４段目西の柾目切片
図42　井戸SE950における花粉ダイアグラム
図43　井戸SE950における種子ダイアグラム
図44　井戸SE950における主要珪藻ダイアグラム
図45　既往の復元案
図46　西大寺食堂院　配置図　1:600
図47　甲双倉の検出遺構と「資財帳」の記載規模の対照

表

表１　SB960礎石据付穴寸法および地業
表２　地区・層位別木簡出土点数（2007年１月末現在）
表３　SE950から出土した墨書土器一覧
表４　外面の線刻および打刻印の数
表５　井戸SE950の遺体群集の対比と環境

図　　版

巻頭カラー図版
SE950検出状況　南西から
SE950出土木簡
SE950出土奈良三彩・緑釉
SE950出土製塩土器
緑釉磚・褐釉磚・二彩垂木先
包含層出土奈良二彩・白釉

巻末図版
PL.１　遺構１　北区･中区全景　北から（第410次調査）
PL.２　遺構２　中区･南区北部全景　北から（第410次調査）
SD985検出状況　北東から（第410次調査）
PL.３　遺構３　南区北部全景　北西から（第410次調査）
SB970検出状況　北西から（第410次調査）
PL.４　遺構４　南区西南部全景　北西から（第404次調査）
PL.５　遺構５　南区西南部　北から（第404次調査）
SE950・SB951検出状況　北西から（第404調査）
PL.６　遺構６　南区南部　東から（第404次調査）
SX930検出状況　西から（第404次調査）
PL.７　遺構７　南東区　北から（第415次調査）
東区　東から（第415次調査）
PL.８　木簡１
PL.９　木簡２
PL.10　木簡３
PL.11　木簡４
PL.12　土器１　SE950出土土師器・黒色土器
PL.13　土器２　SE950出土須恵器
PL.14　土器３　SE950出土墨書土器
PL.15　土器４　SE950出土製塩土器
PL.16　金属製品・木製品
SD941･SD942･SE950･SB951出土金属製品
SE950出土木製品
PL.17　SE950井戸枠１　５段目北・東・南・西
PL.18　SE950井戸枠２　４段目北・東・２段目西
PL.19　SE950井戸枠３　２段目北・東・南
PL.20　SE950井戸枠４　１：表面加工痕跡（２段目西）
２：桟穴（１段目北）
３：太枘と枘穴（２段目西）
４：木口面の心墨（１段目東）
５：全体（２段目西）
PL.21　西大寺古図　西大寺伽藍絵図（部分）西大寺蔵
西大寺敷地之図（部分）東京大学文学部蔵

例　　言

1．本書は、東京建物株式会社・東急不動産株式会社・近鉄不動産株式会社を原因者とする、平城京跡右京一条三坊八坪（西大寺旧境内食堂院跡推定地）および右京北辺三坊三坪において実施した、マンション建設にともなう発掘調査の概要報告である。

2．調査は、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所（以下奈文研とする）都城発掘調査部（平城地区）が、2006年５月24日から10月31日にかけて実施した。

3．本調査は、都城発掘調査部（平城地区）の平城第404・410・415次調査として実施したもので、各遺構には西大寺旧境内における一連の遺構番号を付した。また、遺構図の座標値は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海抜高であらわす。

4．各発掘調査の担当者および現場調査員は以下のとおりである。

第404次　大林潤（担当者）　浅野啓介　石村智　今井晃樹　神野恵　高田貫太　渡辺晃宏

第410次　馬場基（担当者）　金井健　小池伸彦　林正憲

第415次　山本崇（担当者）　島田敏男　深澤芳樹　森川実　和田一之輔

このほか、谷﨑仁美（龍谷大学）、海野聡（東京大学）、橋本那富（京都大学）が参加した。

また、年輪年代測定は、埋蔵文化財センター年代学研究室の光谷拓実、大河内隆之があたり、環境考古学分析は、株式会社古環境研究所に委託し、同研究所金原正子氏より玉稿を賜った。

5．調査ならびに本書の編集に際しては、以下の機関および個人の協力を得た。

㈶元興寺文化財研究所、西大寺、東京大学文学部、東京建物株式会社、東急不動産株式会社、近鉄不動産株式会社、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、秋山成人、岡本広義、狭川真一、久世康博、佐伯俊源、佐藤亜聖、佐藤全敏、高橋照彦、武田和哉、田代弘、藤井章徳、三好孝一、三好美穂（敬称略）

6．本書の作成は、都城発掘調査部長川越俊一の指導のもと、部員全員があたった。各項の執筆者は以下のとおりである。

Ⅰ－１・２ 大林潤、Ⅰ－３ 山本崇、Ⅱ 大林・馬場基・山本、Ⅲ－１ 渡辺晃宏、Ⅲ－２ 今井晃樹・林正憲、Ⅲ－３ 神野恵、Ⅲ－４ 小池伸彦・大林、Ⅳ－１ 大河内隆之、Ⅳ－２ 金原正子、Ⅴ 大林・渡辺、〔付章〕金井健

7．本書で使用した写真は、牛嶋茂、中村一郎、杉本和樹、大林潤が撮影した。

8．本書の編集は大林潤がおこなった。また、表紙のデザインは神野恵・中村一郎が担当した。

Ⅰ　調査の概要

１　調査に至る経緯

調査地は、近鉄大和西大寺駅の西北、奈良市西大寺本町に所在する。調査地の東側を県道谷田奈良線、西側を近鉄京都線が通る。現在、調査地周辺は商業地で、近年も商業ビルやマンション等が建設されている。調査地はこれまで主に木材加工場や住宅として利用されていたが、マンション建設が計画されたため、建設にともなう事前調査として発掘調査をおこなった。

調査地は、平城京右京一条三坪八坪、右京北辺三坊三坪にあたり、調査地のほぼ中央に一条北大路、調査地東側の現県道付近に西三坊坊間東小路が推定されている。右京一条三坊八坪は、奈良時代後半の西大寺造営以後は、同寺食堂院に推定されている。これまで周辺でおこなわれた調査では、食堂院に関連するとみられる遺構や、条坊、北辺坊に関わる遺構を検出しており、今回の調査においても、これらに関連する遺構の検出が期待された。

２　調査経過

2006年４月、関係者との現地協議をおこない、南北約107m、東西約59mのＬ字型の調査区を設定した。調査は、既存建物の撤去との関係で南北２回に分け、同年５月、南半部分から調査を開始した（第404次調査）。第404次調査では、奈良市教育委員会による西大寺第15次調査（以下、市15次調査とする。他の次数も同様）で検出した遺構の南延長部分や、西大寺食堂院の中心堂舎とみられる建物などを検出した。６月30日には周辺住民を対象とした説明会と、現地の一般公開をおこなった。その後、調査区外に続く大規模な井戸（SE950）を検出したため、調査区中央部分を拡張した。井戸の埋土には多量の遺物が含まれており、土ごと整理用コンテナに入れて研究所へ持ち帰り、水洗・整理作業をおこなうこととなった。引き続き７月より、調査区の北半部分の調査を開始した（第410次調査）。第410次調査では、西大寺食堂院の北限と一条北大路を検出し、さらに北側の北辺坊域で奈良時代前半とみられる遺構を確認した。また、検出した遺構の範囲を確認するために調査区の東西辺を一部拡張した。10月７日には現地説明会を開催し、約950名が訪れた。調査終了後、建設予定マンションの設計変更にともない、調査区の南東に小規模のトレンチを２カ所設定し、調査をおこなった（第415次調査）。

調査期間は、第404次調査が2006年５月24日から8月30日まで、第410次調査が７月31日から10月16日まで、第415次調査が10月24日から10月31日まで、調査面積は合計で1,900㎡である。

なお、井戸SE950より持ち帰った埋土は、整理用コンテナで合計約1,200箱に及ぶ。遺物の水洗・整理作業は2007年３月現在も継続中であり、本書では、既に整理作業の終了した遺物に限って報告する。

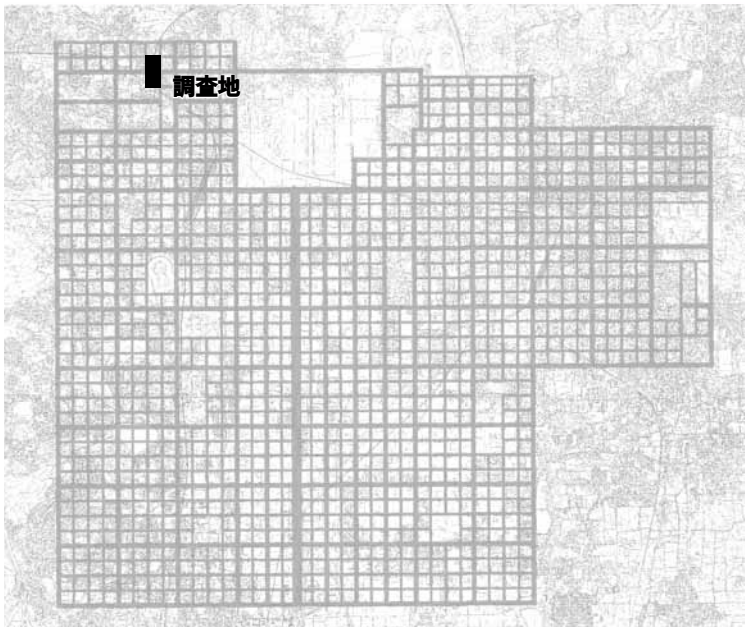


図１　平城京条坊と今回の発掘調査地

3　調査地周辺の既往の成果

ここでは、西大寺食堂院および平城京右京北辺の学説史と発掘調査成果を概観する。

（1）西大寺食堂院

西大寺の創建と食堂院　西大寺の伽藍配置は、鎌倉時代に作成された西大寺敷地之図（PL.21）・西大寺敷地図・西大寺往古敷地図（いずれも東京大学文学部蔵）などにより推定が可能である。これらをもとにいくつかの復元案が提示されており（後述。図45参照）、食堂院は寺中の東北部、右京一条三坊八坪に比定されている。宝亀11年（780）成立の「西大寺資財流記帳」（西大寺文書。以下「資財帳」と略称）によると、食堂院は次のような舎屋から構成されていた。

食堂院
- 瓦葺食堂一宇　長十一丈、広六丈
- 檜皮殿　長十丈、広四丈
- 檜皮双軒廊三宇　各長三丈。中広一丈六尺、東西二宇、各広一丈四尺
- 瓦葺大炊殿　長九丈、広五丈
- 東檜皮厨　長十一丈、広四丈
- 瓦葺倉代　長五丈、広二丈
- 西檜皮厨　長十一丈、広四丈
- 瓦葺倉代　長五丈、広二丈
- 瓦葺甲双倉　各長二丈三尺五寸、広一丈八尺四寸　中間　長二丈二尺八寸

著作権の関係で公開出来ません

図２　「西大寺資財流記帳」（部分）西大寺蔵

西大寺は、天平宝字８年（764）の藤原仲麻呂の乱の際、孝謙太上天皇が発願した四天王像に由来する寺院で、称徳天皇が行幸した天平神護２年（766）には、造営が進んでいたと推測される。講堂や総寺僧房の存在は確認できないが、国家公認の財産目録に記された食堂院の堂舎は、宝亀末年に実際に建ち並んでいたのであろう。

西大寺伽藍の沿革　平安時代に入り、西大寺は次第に寺勢を衰えさせていく[1)]。そのためか、平安時代前期の関連史料は、建物の顛倒を記すものが多く、承和13年（846）にはすでに「講堂」（薬師金堂か）の罹災記事がみえる（続日本後紀）。次いで延長年間（923～31）には、相次いで塔の火災記事がみえ（日本紀略・扶桑略記）、応和２年（962）には「食堂一宇」が大風雨により顛倒したという（日本紀略）。さらに永祚２年（990）にも「西大寺」の焼亡記事がみえる（扶桑略記。西寺の可能性もある）。

平安時代中期以降になると、伽藍の修造記事が散見する。遥かに時代の降る鎌倉時代の記録には、かつて露仏となっていた四王堂の四天王像に、僧威精が「形ノゴトク堂ヲ立テ」、その後「次第ニ繁昌」したと伝える（興正菩薩御教誡聴聞集）[2)]。寛弘８年（1011）には西大寺塔実検文が奏聞されており、この頃、塔が再建されたらしい。万寿４年（1028）には、別当憐因が諸寺司定において「十二所修造」を記した解文を奏聞するが、「諸司大衆解文」がなく「成功」を知り難いため、重任を認められなかった（以上、小右記）。その後の修造はやや低調で、永承３年（1048）には、鐘楼倒壊後放置されていた鐘が興福寺に運ばれ（造興福寺記）、元永元年（1118）には、別当実覚が、まったく本寺を修理せず大破におよんだことを嘆かれている（中右記）。

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、再び修造の記録が残る。仁平３年（1153）には前別当覚珍が塔修造の功などで、建永元年（1206）には覚芸が忠恵の東大門造営功の譲により、それぞれ権律師に任じられた。また、建保６年（1218）には塔供養もおこなわれている（法隆寺別当次第）。この時期の修理・造営は、叡

尊による西大寺復興の前史として評価できるが、こうして次第に復興されてきた寺観は、鎌倉時代末期に秋篠寺が作成した堺相論図（東京大学文学部蔵）に見事に描かれているのである。

食堂の再生と終焉　応和２年（962）に顛倒した食堂は、平安時代後期までに再建されていたらしい。嘉承元年（1106）には、弥勒金堂倒壊の後、その仏像は食堂に安置されていると伝え（七大寺日記）、保延６年（1140）の記録によると、食堂と四王堂および塔１基のみが確認される（七大寺巡礼私記）。これらの史料によると、食堂の再建が12世紀初頭以前にさかのぼることは確実であり、比較的修造の盛んな11世紀前半頃までに再建され、弥勒金堂顛倒を機に仏堂に転用されたと推測される[3)]。降って建長３年（1251）には、食堂（弥勒金堂）仏事の用途は、「弥勒堂免」「正月十二日行僧（壇）供田」「毎月五日念仏御仏供田」「蓮華会」「念仏田」「燈油田」「不断香田」などの寺本所領の料田から調達されていた（西大寺寺本検注弁目録取帳案。西大寺文書）。

徳治２年（1307）、食堂が焼失する（一代要記）。この後、弥勒金堂の再建はなかったが、以上の史料によるならば、西大寺食堂は機能を変えつつも鎌倉時代末まで存続していたことが確認される。

古代寺院と食堂　古代寺院の食堂は、僧の日常的活動の拠点と位置付けられるが、史料に乏しく、その実態は未解明な部分が多い。わずかに、法会における食堂の史料が注目される。

やや時代の降る寛和２年（986）の記録は、円融太上天皇の菩薩戒受戒に際して、戒壇院食堂でおこなわれた饗応の様を克明に伝えている（太上天皇御受戒記）。このとき東大寺の大炊屋では、15石入りの甑で米が炊かれ、数十人が轆轤を用いて甑に下ろし、20人許が鍬をもって飯を頽（くず）し、樋に水を引いて飯を洗っており、法会の後には1,000名の僧に熟食を供した。法会と食事の関係がみてとれる史料として注目されよう。

他方で、早くも９世紀後半に食堂の機能低下がうかがわれる史料も存在する（貞観10年（868）禅林寺式。宮内庁書陵部所蔵文書）。その第４条によると、真紹は、施主が寺院に来り法事のすべてを寺に任せる場合には、僧はすべて食堂に集まり、平等に受食し所作に従い場を移さずに喫食することを要請した、とみえる。この史料は、僧伽集団の平等原則を具現する食堂での共食原理が崩壊しはじめていることを示すものと解され[4)]、同じ頃に確認される食堂仏堂化の進展とあいまって[5)]、古代食堂の機能が思いのほか早く低下していた可能性も否定できないであろう。

（２）右京北辺

右京北辺の学説史　平城京右京には、二坊から四坊にかけて、一条北大路に北接する２坪分の張り出し部が存在したとされ（以下、張り出し部を便宜的に北坪、南坪と称する）、その範囲は、北浦定政の「平城宮大内裏跡坪割之図」にも図示されている。ところが、「一条北辺」は奈良時代の史料にはみえず、大和国当寺敷地図帳案（西大寺文書）にみられる長承３年（1134）注文以後の史料に散見すること、北辺の遺存地割は秋篠寺へ至る西三坊大路延長部分によく遺り、京北条里と重なる北坪では乱れが生じていることから、その存在を疑問とする意見が出されてきた。

北辺否定説にたつ喜田貞吉は、北辺を、奈良時代終わりに北へ２町拡大したもので、京域とは認められないと述べた。その後、関野貞もこの理解に与し、大井重二郎は、西大寺の寺領区画に用いた便宜的な呼称と理解している。一方、田村吉永、大岡實らは北辺を平城京の京域と認めるが、北辺肯定説にも、南北２坪とみる通説のほか、南坪１坪分のみとみる説、南北幅の長い１坪とみる説があり、その存否と範囲とをめぐる理解は一定しない[6)]。北辺の存否をめぐる理解の相違は、西大寺寺域の北を限る「京極路」や西大寺寺域そのものの比定と密接に関わるものでもあった。

西大寺造営と右京北辺　混迷していた北辺をめぐる議論は、発掘調査の知見を契機に再び活発になる。西隆寺の発掘調査成果により、修理司と造西大寺司・造西隆寺司の密接な関係が指摘された[7)]。近年井上和人は、北辺を西大寺造営に際して不足した宅地を補う意図で設定された京の拡大部分ととらえ、修理司を北辺坊造営官司と理解するとともに、遺存地割の精査にもとづく独自の西大寺寺域論を展開している[8)]。

北辺の存否と「資財帳」が示す創建期の西大寺寺域に関する諸説は、なお鉄案をみない。北辺北坪の地形は、西に入り組む小谷にあたり、南北２坪説の推定北限付近には埋没河川の痕跡も認められるため、現地表面の遺存地割を古代の地割を踏襲したものと速断することはつつしまなければならないが、多方面からのさらなる検討が期待される。ともあれ、北辺の北坪における大路クラスの条坊側溝や奈良時代に属する明確な遺構の検出が、100年におよぶ論争に終止符を打つものと思われる。

（３）調査地周辺の発掘調査

西大寺食堂院推定地の発掘調査　西大寺食堂院推定地にあたる平城京右京一条三坊八坪でこれまでにおこなわれた発掘調査の成果を確認しておく[9]。

市８次調査では、本調査区東南の西大寺東面築地推定地が調査されたが、奈良時代の明確な遺構は検出していない。次いで、市12次調査では、今回の調査区に南接する道路南側で１辺2.1m程度の大型柱穴７基を検出しており、食堂に関わるものと推定された。また市15次調査では、今回の調査区に東接する部分で、南北方向に延びる凝灰岩列と、合計28基の埋甕が並ぶ埋甕列を検出しており、食堂院内の施設に関わるものと推測されているほか、検出された２条の南北溝は、食堂院東限築地塀の西雨落溝および西三坊坊間東小路西側溝と推測されている。

奈文研第242－19次調査は八坪の西端部を調査対象とするもので、掘込地業をともなう基壇建物を検出した。また、㈶元興寺文化財研究所の調査（以下、元興寺03年調査と略称）において、東接する一坪から出土した「同法」と記した墨書土器は、西大寺寺域を考えるうえで見過ごせない遺物である[10]。

推定北辺坊の発掘調査　条坊側溝、および建物遺構を検出した調査を概観する[11]。

一条北大路について。奈文研103－16次調査、同131－27次、同112次－７次のほか、西三坊大路との交差点付近（市430次調査）で、北側溝の可能性のある東西溝を検出したが、いずれも若干の振れをもつことから不確定な要素をはらんでいた。近年、元興寺03年調査で南北両側溝を検出し、その位置がほぼ特定された。一方、右京北辺の道路痕跡は、奈文研103－16次調査において検出した南北溝が北辺二坊二・三坪の坪境小路に相当する可能性があるのみで[12]、奈文研151－26次調査・市322次調査では、推定位置に坪境小路は検出され

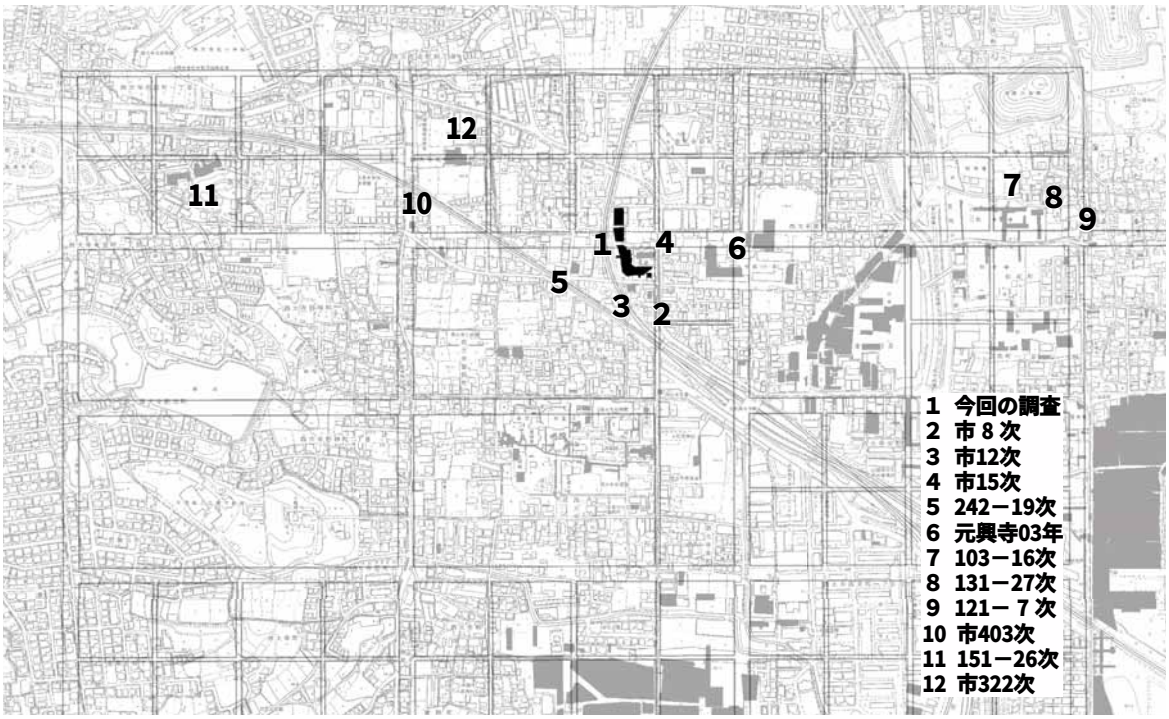


図３　調査区周辺の調査　1:12,000

ていない。

建物遺構について。奈文研103－16次調査・同151－26次調査において奈良時代前半にさかのぼる掘立柱建物を確認している。ただ、いずれも条坊遺構との関連は明確でなく、京域に属するか否かの判断は保留せざるをえない。これに対して、市322次調査では、奈良時代（後半か）および平安時代の遺構を確認しており、北辺に関わる遺構として注目される。

右京北辺の関連遺構は、北坪の条坊遺構の検出事例に恵まれず、建物遺構の時期比定など課題も残されている。その造営時期と範囲の検証は、なお今後の調査成果に俟たねばならない。

１）太田博太郎1979「西大寺」（『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店。初出1973年）を参照。

２）田中久夫氏は、威精を長保６年（1006）から長和元年（1012）まで西大寺別当に任じた輔静の誤りとする（日本思想大系『鎌倉旧仏教』岩波書店）。

３）保延４年、西大寺別当済円は「良堂」修造の功、あるいは「四王堂」造立の功により律師に任じられた（西大寺別当次第、東寺文書甲号外30号。三会定一記大治５年（1130）条）。この「良堂」は金堂ないし食堂の誤とみる理解もあるが、嘉承元年に食堂が存在することからやや不審である。その点で、保延４年頃の造営は、嘉承元年にみえず保延６年には確認される四王堂のこととみる方が時期的に矛盾しない。「良堂」は文字通り「良き堂」と理解できるのではないか。

４）赤松俊秀1969「食堂と学頭」（『古事類苑月報26』宗教部三、吉川弘文館）。

５）山岸常人2004「中世寺院の僧房と僧団」（『中世寺院の僧団・法会・文書』東京大学出版会。初出1989年）、同2004「中世仏堂の空間と儀礼」（国立歴史民俗博物館編『中世寺院の姿とくらし』山川出版社）は僧房の仏堂化を論じる。なお、中世西大寺の僧堂は、古代食堂の理念が再現されたものともとらえられよう（藤井恵介2004「律宗における僧食と僧堂」、『中世寺院の姿とくらし』前掲、参照）。

６）北辺の存否をめぐる主な研究は、否定説として、喜田貞吉1906「平城京の四至を論ず（一）～（七）」（『歴史地理』8－２～５・７～９）、関野貞1999「平城京および大内裏考」（『日本の建築と芸術』下、岩波書店。初出1907年）、大井重二郎1953「京北條里の起点と西大寺占地の関係並に北辺坊の存在について」（上）（下）（『史迹と美術』242・243）、同1966「京北條里の起点と大和国添下郡京北班田図について」（『平城京と条坊制度の研究』初音書房）、肯定説として、大岡實1966「西大寺」（大岡實先生退官記念事業会編『南都七大寺の研究』中央公論美術出版。初出1933年）、田村吉永1933「西大寺の四至及その居地並に平城京の北辺坊について」（『史蹟名勝天然紀念物』８－９）、松本修自1990「西大寺伽藍の変遷」（奈良県教育委員会・奈文研『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』）、奈良県立橿原考古学研究所1994『平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪』などをあげる。なお、関野は当初北辺坊の存在を認めていた（関野1905「平城京及大内裏に就て」『建築雑誌』227）。また、大岡には、後の北辺坊南北１坪説、西大寺造営による拡大説の原型ともいうべき指摘が認められる。

７）西隆寺跡調査委員会1976『西隆寺発掘調査報告』、奈文研1993『西隆寺発掘調査報告書』。

８）井上和人2004「平城京右京北辺坊考」（『古代都城制条里制の実証的研究』学生社）。

９）奈良市教育委員会1994『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成５年度』、同2000『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成９年度（第２分冊）』、同2006『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成15年度』、奈文研1994『1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』。

10）㈶元興寺文化財研究所2005『平城京右京北辺』。

11）奈文研1978『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、同1984『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』、奈良県立橿原考古学研究所1986『奈良県遺跡調査概報1985年度（第１分冊）』、奈良市教育委員会1996『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成７年度』、同1998『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成９年度（第２分冊）』、同2001『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成11年度』。

12）奈文研1978（前掲注11）。同2003『平城京条坊総合地図』参照。

Ⅱ　遺　構

調査区は大小５つのトレンチに分かれ、全体でL字型に並ぶ。北から南東に向かって、それぞれ北区・中区・南区・南東区・東区と称する（図４）。

調査地は、北西から南東に向かう緩斜面に立地する。基本層序は、上から既存建物撤去にともなう土砂層、暗灰褐色土（旧耕作土）、茶褐色粘質砂（床土）となり、X＝－144,650以北は、床土直下に橙褐色粘質土（遺構検出面）、青灰色粘土・明橙色粘土（地山）と続き、以南は、瓦器を含む茶褐色粘質土、10世紀の遺物を含む暗灰色土、奈良時代後半の整地層である褐灰色粘質土、奈良時代前半の遺構を検出した黄灰色粘質土（整地土）、灰色砂質土（奈良時代以前の自然堆積土）となる（暗灰色土はSB960東南付近およびSD942周辺にのみ分布する）。東区は、浄化槽による撹乱土を取り除いた下の、橙褐色粘質土（奈良時代以前の自然堆積土）上面で遺構を検出した。

以下、検出した遺構を、右京一条三坊八坪の遺構、一条北大路の遺構、右京北辺三坊三坪の遺構に大別して述べる。

１　右京一条三坊八坪の遺構

検出した遺構は、概ね、奈良時代前半以前、奈良時代後半、平安時代以降の３期に時期区分される。奈良時代後半の遺構は、西大寺創建段階の食堂院に関わるものと推定される。

（１）奈良時代前半以前の遺構

南区南部および南東区・東区で検出した。いずれの遺構も、座標方位に対して北で東、東で南に振れる。奈良時代前半またはそれより前の遺構とみられるが、年代を特定する遺物は確認していない。

SB959　南区南辺と南東区で検出した桁行４間以上、梁行２間の掘立柱の南北棟建物。南妻柱が確認されないことより、建物はさらに南に続くと考えられる。柱間は、桁行約2.4m（８尺）、梁行約2.7m（９尺）。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺は約90㎝。柱はすべて抜き取られている。

SX961・962　南区中央で検出した掘立柱列。SX961は東西方向の柱列で、柱穴４基を検出した。SX962は南北方向の柱列で、SX961東端の柱穴より北へ１間分を検出した。両者とも柱間は約2.1m（７尺）。柱穴は隅丸方形もしくは円形で、直径は約90㎝。両者合わせて東西棟建物の南東隅部分となる可能性もある。

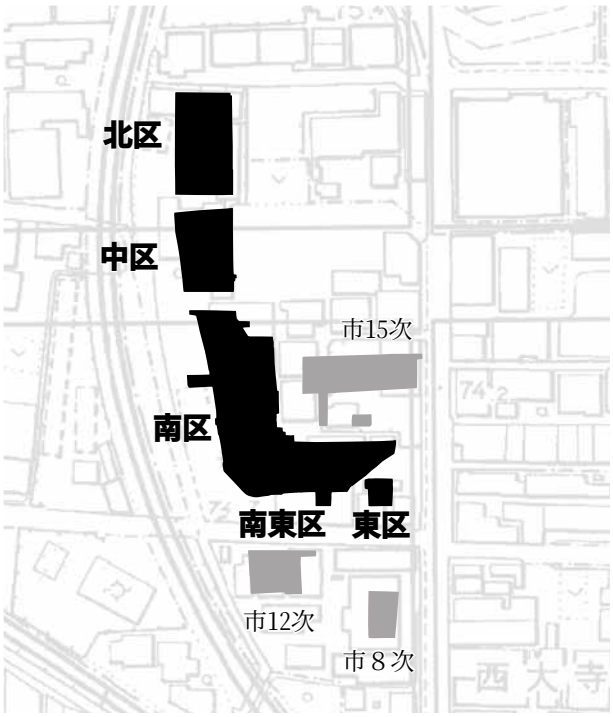


図４　調査区の名称と位置

SD963　SX961の約3.3m南を並行する東西溝。幅約1.1m、深さ約20㎝。西は調査区の外に続く。

SB953　桁行１間以上、梁行１間の掘立柱の南北棟建物。北は調査区の外に続く。柱間は梁行約2.4m（８尺）、桁行約1.8m（６尺）。柱穴の２基は礎盤石や根石を残す。柱穴の平面はほぼ円形を呈し、直径は1.0～1.2m。北柱筋はSX961と、東柱筋はSB959の西柱筋とそろえる。

SX990　東区西辺で検出した南北掘立柱列。柱穴２基（１間分）を検出した。柱間は約2.4m（８尺）。柱穴は隅丸方形で一辺は約80㎝。北側の柱穴はSB959の北妻柱筋の延長上に位置する。

（２）奈良時代後半（西大寺創建段階）の遺構

SB955　南区西南隅で検出した礎石建ちの東西棟建物。桁行３間分、梁行１間分、礎石の据付穴６基を確認した。建物の北東部分とみられ、柱間は桁行梁行ともに約3.0m（10尺）。全体の規模は、SB960（次項）より推定される中軸で折り返すと桁行方向は約30m（100尺）となり、柱間寸法より梁行方向は約12m（40尺）に復元される。この寸法は「資財帳」にみえる「殿」に等しい。

柱穴は方形で、一辺は約2.1m。東妻柱筋の柱穴のみ、東西方向の一辺が約1.5mと小さい。上面の削平が著しく、柱穴の深さは最大でも約30㎝を残す程度であるが、礎石の根石と思われる丸石が残る柱穴があることから、礎石建ちの建物と考えられる。

SB960・SD971・SD972　SB960は、南区北半で検出した礎石建ちの東西棟建物。基壇土、基壇南北縁、礎石の据付・抜取穴22基を確認した。桁行５間、梁行２間の身舎の四面に庇が付く、桁行７間、梁行４間の建物と考えられる（図５）。全体は桁行方向約27m（90尺）、梁行方向約15m（50尺）と推定され、「資財帳」の「大炊殿」に比定される。

基壇土は掘り込み地業を施さず、地山上に直接積む。残存する積土は約30㎝。明瞭な版築は認められない。基壇南縁部には東西溝SD971が、基壇北縁部東半には東西溝SD972が通る。基壇外装抜取溝もしくは雨落溝を踏襲して掘られた溝か。SD972は、基壇中軸付近までは伸びない。北面階段の位置と関係する可能性もあるが、北面階段そのものは確認できなかった。南面階段の痕跡も未確認。基壇規模は、東西約30m（柱位置からの推定）、南北約18m。なお、基壇東縁部の位置は、隣地境界の現水路に踏襲されている可能性が高い。

表１　SB960礎石据付穴寸法および地業

番付	寸法（㎝）		埋土の状況	瓦の状況
	東西	南北		
ロ１	150	130	○	×
ロ２	180	180	△	○
ロ３	165	―	○	○
ロ４	160	140	△	○
ロ５	150	130	×	△
ハ１	150	150	○	○
ハ２	150	200	×	○
ハ４	150	―	○	×
ハ５	150	160	△	△
ニ１	180	180	×	○
ニ２	210	180	△	×
ニ４	180	180	△	×
ニ５	200（推定）	180	△	×
ホ１	150	150	×	○
ホ２	150	150	△	○
ホ４	150	150	△	×
ホ５	150	160	×	○
へ５	―	150	×	○

（表１凡例）

埋土の状況
- ○：埋土が厚さ５～10㎝程度の層状を呈する
- △：埋土が厚さ５～10㎝程度の層状を呈する部分とそれ以外からなるか、または10㎝～15㎝程度の層状を呈する
- ×：埋土が層状を呈さない

瓦の状況
- ○：瓦が面的に敷き込まれる
- △：埋土中に瓦を含むが面的にならない
- ×：埋土中に瓦を含まない

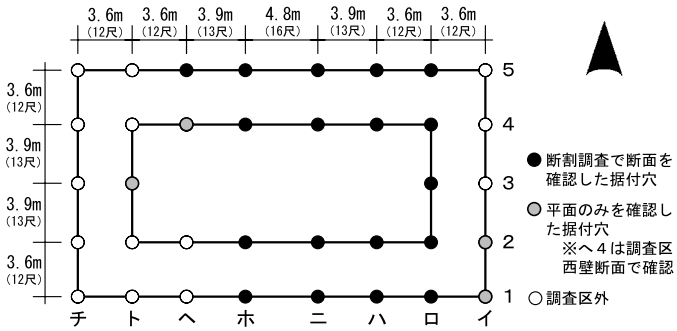


図５　SB960の番付および柱間寸法

図６　SB960礎石据付穴（ハ１）壺掘り地業

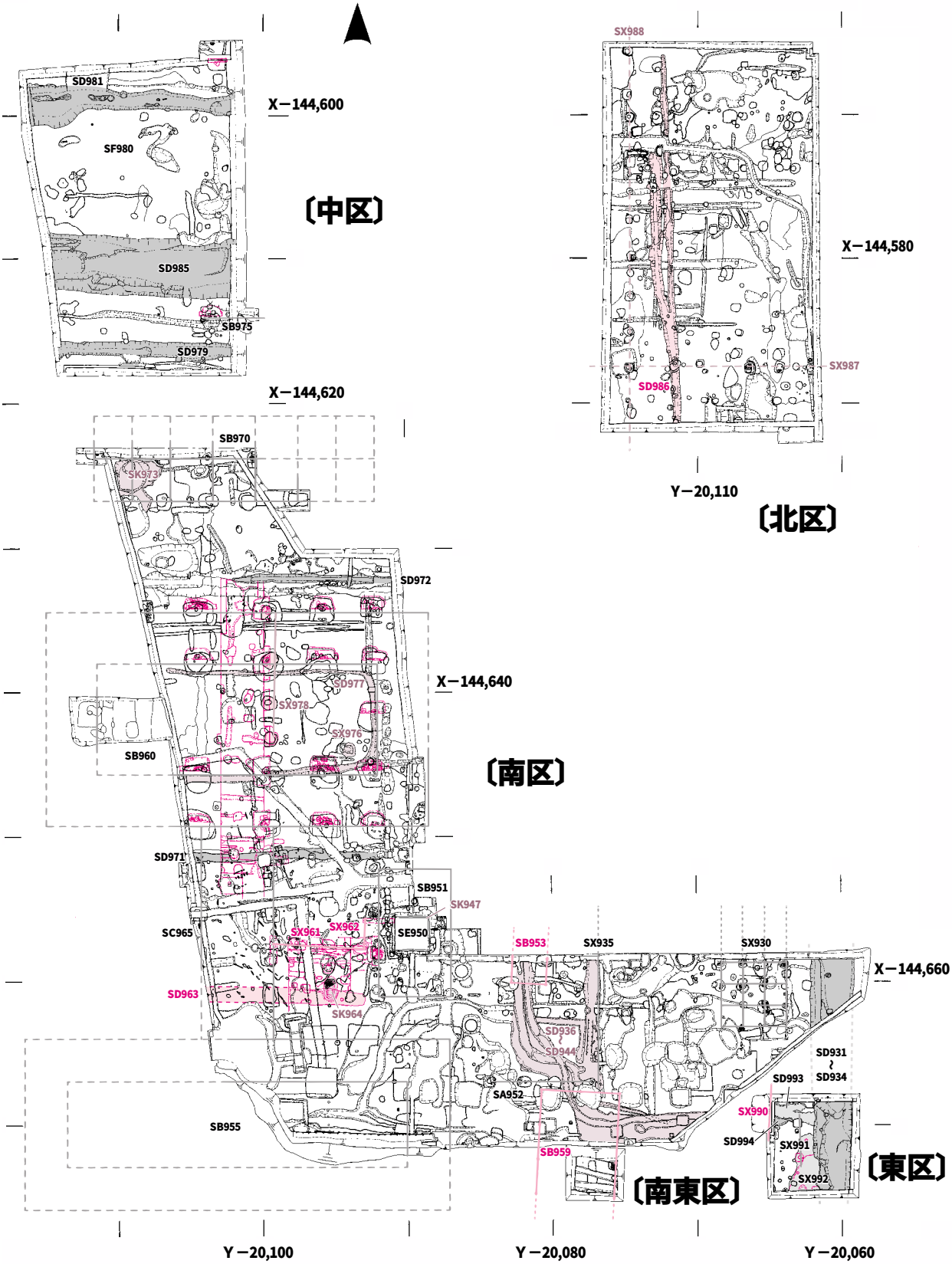


図７　遺構平面図　1:400

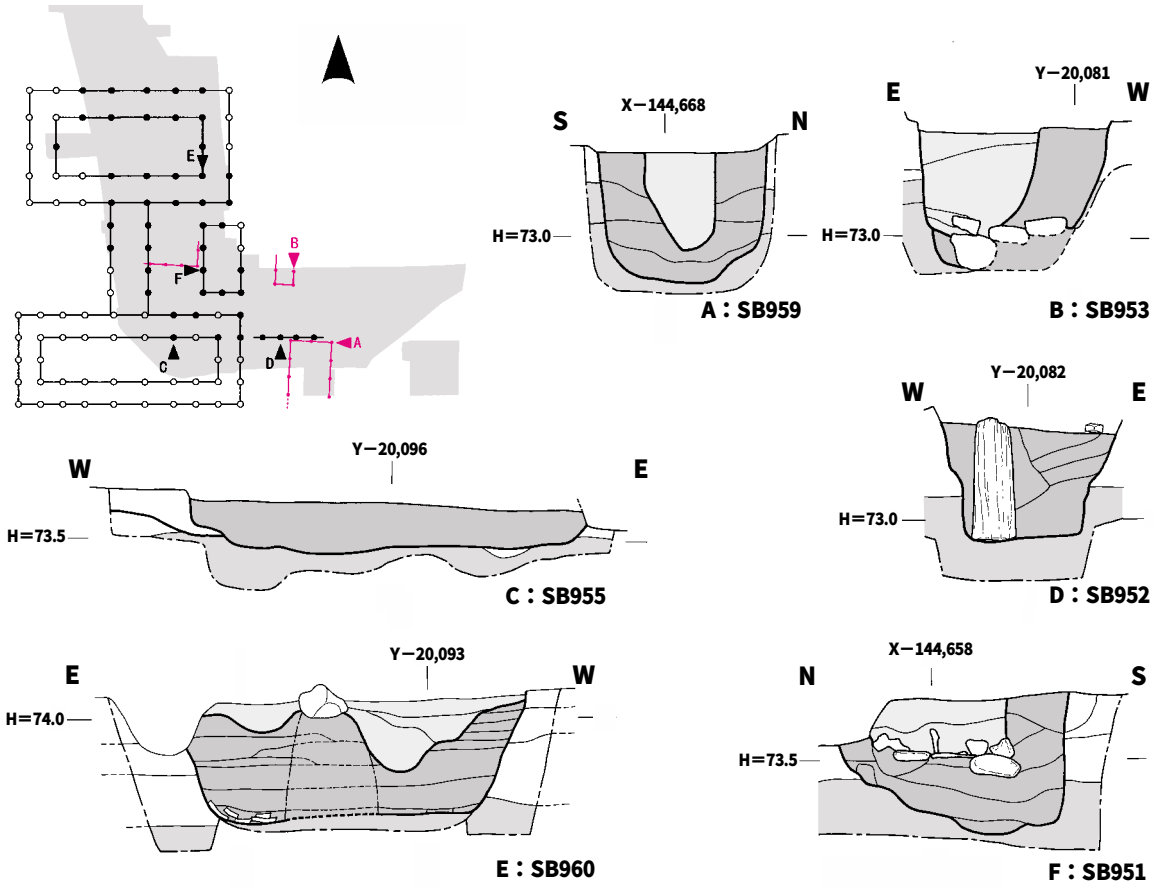


図８　各遺構柱穴断面図　1:40

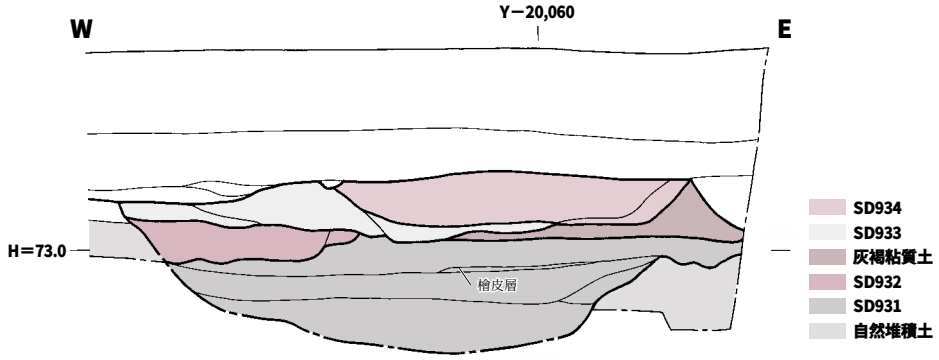


図９　SD931～934　断面図（X＝－144,668）　1:40

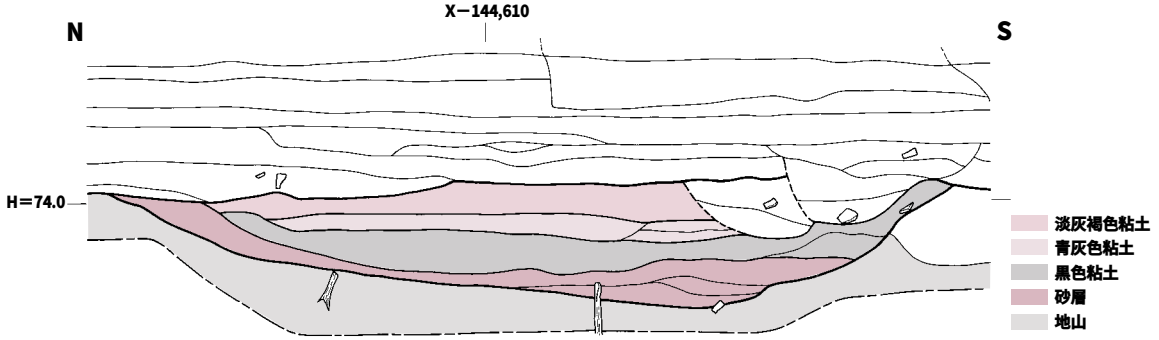


図10　SD985　断面図（Y＝－20,102）　1:40

礎石据付穴は壺掘り地業を施す。据付穴は、一辺1.5～２mの隅丸方形で、遺構検出面からの深さは0.5～0.7m。埋土は、精粗の差はあるがいずれも突き固め、層状を呈するものもある。据付穴の一部には瓦を面的に敷き込むものもある。敷き込む瓦は、いずれも奈良時代のものであった。また、地業の中心部分には、人頭大の石を埋め込む。据付穴の底面が73.4mでほぼそろう点や、中央に石を入れるなど、一定の共通性が認められる一方、瓦の敷き込み具合や、土の積み方などは据付穴ごとに異なる（表１）。なお、こうした工法は西隆寺回廊でも確認されている（奈文研2001『奈良文化財研究所紀要2001』）。

礎石はいずれも抜き取られ、根石も原位置をとどめるものはない。礎石抜取穴から出土する遺物は、９世紀半ば以前のものである。SD972・SK973（後述）出土の遺物も同様であることから、SB960は９世紀の半ば頃までには廃絶した可能性が高い。

なお、下層遺構確認のため、SB960中央付近の南北21m、東西３mの範囲で基壇土を掘り下げたが、顕著な遺構は確認できなかった。また、据付・抜取穴の断割調査でも下層遺構は確認されなかった。

SC965　SB955とSB960の中央間をつなぐ南北方向の軒廊。桁行３間、梁行１間の礎石建ちで、柱間は桁行約３m（10尺）、梁行約5.1m（17尺）。SB951（後述）と規模が等しく、柱筋をそろえる。

SB970　SB960の北で検出した掘立柱の東西棟建物。桁行５間分、梁行１間分、柱穴10基を確認した。北および東は調査区の外に続くとみられる。

柱穴は一辺約１mの不整形な方形で、深さは約60㎝。一部の柱穴には直径約30㎝の柱根が残存するが、礎盤などの根固めは認められない。遺物は奈良時代の土師器が主体で（掘形・抜取穴とも）、製塩土器を含む。

建物位置から「資財帳」の「甲双倉」南西部分と推定されるが、いくつかの問題点が残る（51頁参照）。

SB975　中区南部で掘立柱の柱穴（２基）を確認。柱間は約2.7m（９尺）。食堂院の北を限る築地に開く穴門とみられる。柱穴は一辺約1.2mの方形で、遺構検出面からの深さは約80㎝。柱は抜き取られる。

西側の柱穴では、掘形底部中央付近に丸太を半裁した木片を置き、土を積む。底部から40㎝程度積んだ上に凝灰岩（一辺約40㎝の方形で厚さ約10㎝）を据える。抜取痕跡は、この凝灰岩の両端から上方に認められることから、この凝灰岩を礎盤とし、柱を建てたとみられる。凝灰岩礎盤は掘形の西側に偏る。西側の柱穴の掘形からは奈良時代の土器が、抜取穴からは９世紀半ばから10世紀前半にかけての土器が出土した。

図11　北門SB975礎盤石検出状況（北西から）

SD979　築地本体の痕跡は確認できなかったが、SB975の南で東西溝SD979を確認した。SD979は、SB975の前面で幅が狭くなり、西大寺食堂院北面築地の南雨落溝と考えられる。なお、北面築地の北雨落溝は、一条北大路南側溝SD985（後述）が兼ねていたのであろう。

SE950　南区中央で検出した井籠組の井戸。井戸の平面は方形で、内法は一辺約2.3m。遺構検出面からの深さは約2.8m。井戸枠は横板材５段分（高さ約2.3m）が残存し、上部構造は抜き取られていたが、井戸の内部から井戸枠とみられる木材が出土しており、最低６段以上存在したとみられる。井戸底に、浄水用として直径３㎝前後の円礫を敷き詰め、その上に木炭を敷く（図12）。

掘形は東西に長い楕円形で、大きさは南北約5.4m、東西約6.6mである。井戸本体は掘形の西寄

りに設置されており、底部は井戸枠がおさまるほどの幅しかない。掘形の埋土は粘質土で、最上部は黄色土を層状に固め、丁寧に埋められている。また、黄色土上面には凝灰岩が残存し、他にも石の抜取痕跡とみられる穴を確認していることから、井戸の周囲には石が据えられていた可能性がある。

井戸内の遺物は、上からaからeまでの５層に分けて取り上げた。e層は灰色の粘質土で、瓦を含むが比較的遺物が少ない。d層は多量の遺物を含み、木屑層と共に互層をなす。木簡の大半はこの層から出土した。ｃ、ｂ、a層と、徐々に埋土のしまりが良くなり、木質遺物の量が減り、土器の割合が増える。以上より、井戸は、廃絶後食堂院で不要となったゴミを投棄することで、上部まで埋まったとみられる。なお、a層の上面には焼けた痕跡が認められた。また、e層の上面に井戸枠とみられる部材が落ち込んでいることから、不要物の投棄が本格的に始まる頃には上部の井戸枠は抜き取られていたと考えられる。投棄の開始から終了までの期間は、ｂからｄ層で珪藻類が検出されているため、数週間程度要したとみられる（44頁参照）。埋土の遺物は奈良時代末を下限し、井戸は木簡の最新の年紀である延暦11年（792）からほどなく、８世紀末に廃絶したと考えられる。

SB951　SE950の周囲で掘立柱の柱穴８基を検出した。SE950の覆屋と考えられる。桁行３間、梁行２間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行約３ｍ（10尺）、梁行約2.6m（8.5尺）。SC965の梁行方向と柱筋をそろえ、全体の規模も等しい。また、東柱筋はSB955の東妻柱筋にそろえる。柱穴の一部には、礎盤を残すものや、礎盤の下をさらに根石によって根固めしたものもある。SE950の掘形との重複関係より、井戸を設置した後に建てられたことがわかる。

SX930　調査区東端で検出した埋甕列。各埋甕間は約1.5m（５尺）で、東西４基の列を、南北方向に４列検出した。埋甕は据付痕跡のみが残るものを含めて合計12基を確認したが、他４基は、撹乱により確認できなかった。市15次調査でも同様の遺構を検出しており、今回検出した埋甕列は、その南延長部分であろう。未発掘部分にも遺構が連続していたとすると、埋甕列は市15次調査と合わせて南北約28.5mとなり、甕は少なくとも20列、総数80基が並んでいたと推定される。

甕はほとんど原形をとどめておらず、底部のみが残存する。残存する掘形の直径は最大で80㎝。甕の下には、水平に据えるために２～３㎝大の小石や埴輪片をかませる。残存する甕の体部外面には、埋設を示すよ

図12　井戸SE950完掘状況（東から）
底部に円礫と木炭が敷かれる

図13　SX930埋甕検出状況
（北西から）

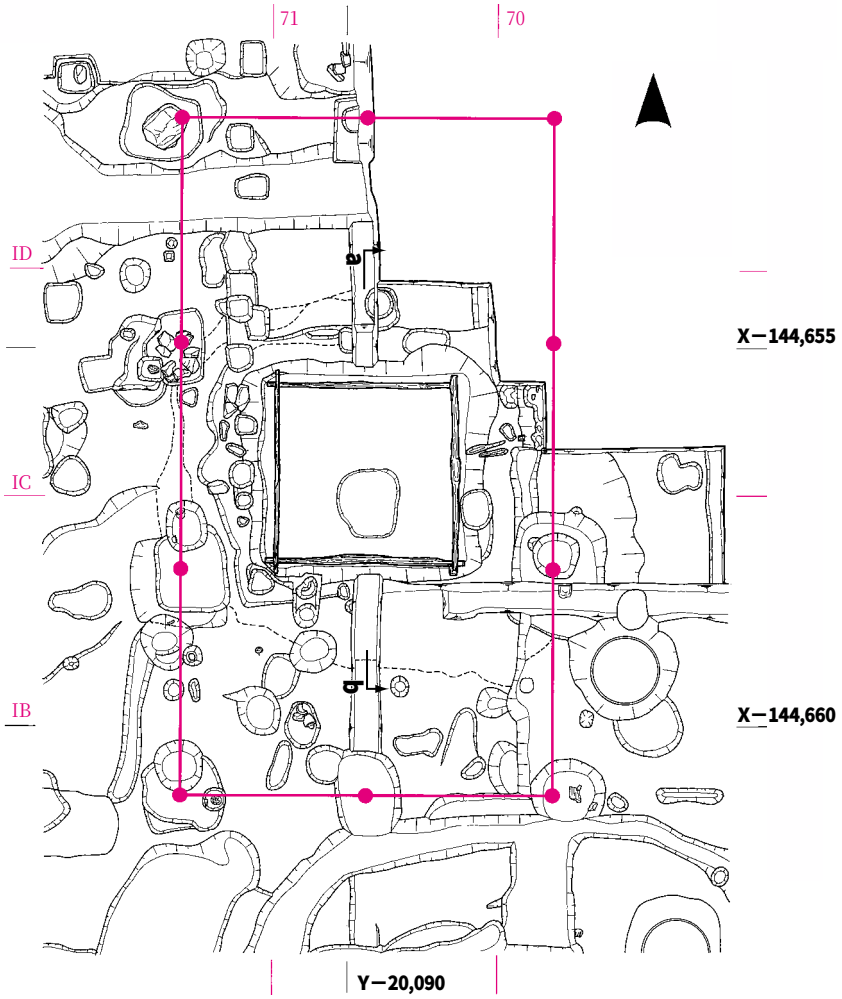


図14　SE950・SB951　遺構平面図　1:100

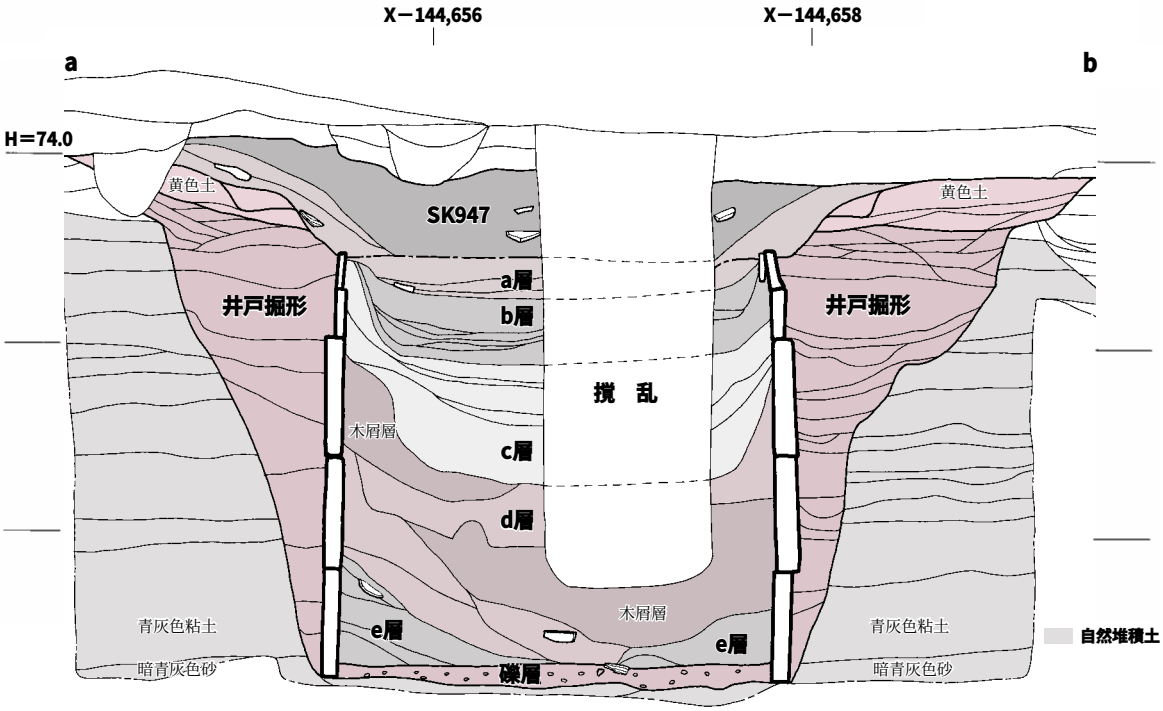


図15　SE950　断面図　1:40

うな変色などは確認できなかった。甕の内部からは、10世紀頃の土器が底部に貼り付いた状態で出土した。甕の最終的廃絶時期を示すものとして注目される。

なお、X＝－144,665より南では、埋甕もしくは甕の断片などは確認されなかった。

SX935　SX930から約８m西で検出した、南北方向に断片的に並ぶ凝灰岩列(図16)。凝灰岩は風化が進んでいる。据え付けた形跡があるが、配列に乱れがみられることから、SD941（後述）の影響で原位置をとどめていないものと思われる。なお、X＝－144,668より南では凝灰岩片が包含層においても確認されないため、南限はこの付近であろう。また、この凝灰岩列より東は遺構面が若干高く、基壇状に整地された部分の西側外装とも考えられる。

図16　凝灰岩列SX935（南から）

SA952　SB955の身舎北柱筋より東にのびる掘立柱塀。柱穴４基分を検出した。柱間は、東２間が約2.5m（8.5尺）、西１間が約2.1m（７尺）。東から１・３基目の穴には柱根が残存する。柱根の径は約20㎝。最も西の柱穴は、瓦や拳大の丸石を敷いた上に凝灰岩の礎盤石を据えている。柱間や、柱穴の様相の違いより、西の１基は別の遺構の可能性を残すが、他の３基と共にSB955の柱筋とそろうことから、一連の遺構と解釈した。

SD931～934・SX992　南区および東区の東辺で検出した南北溝。途中未発掘部分を含め南北約17m分を検出し、調査区外の南北へ続く。市15次調査で検出された南北溝の南延長部分にあたる。

SD931は、調査区の東辺を通る南北溝。溝幅は約３m、深さは最大で60㎝が残存する。埋土は灰色粘質土で、埋土中に檜皮、瓦を多量に含む。SD932は、SD931の上面を灰褐色粘質土によって一旦整地した後、溝心を約１m西に移して掘削した南北溝で、溝幅約1.2m、深さ約25㎝、埋土は灰色砂混茶褐色粘質土。その後さらに溝心を約30㎝東に移動し、SD933を造り、最後にSD934を造る。SD933は幅2.6m、深さ約40㎝、埋土は灰茶色砂質土。SD934は最大で幅2.5m、深さ約30㎝が残存し、埋土は暗灰色砂質土で、土器・瓦片を多く含む。SX992はSD931に先行する溝のあふれ状遺構で、南で西に広がる。

なお、SD931と、SX930を検出した遺構面との関係は撹乱のため不詳。これらの南北溝は、SX935を西辺とする基壇状の部分の東辺に対応する溝か、あるいは食堂院東辺区画施設の西雨落溝を踏襲したものであろう。いずれも埋土中に凝灰岩片は含まれていない。

SD993・994　東区で検出した東西溝。SD993はSD931に先行する。埋土は灰色砂質土で、調査区の東壁でも延長部分を確認した。底部数㎝が残存していた程度で、後述の南区南辺を流れる東西溝群（SD938・940・943・944)との関係は不詳。SD994はSD993と重複し、SD993より新しい。撹乱により大部分が壊されている。

SX991　東区で検出した南北方向の掘立柱列。柱穴２基を検出した。柱間は約2.4m（８尺)。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺は約65㎝。南側の柱穴は、SX992を取り除いた下で検出した。SD994より新しい。

（３）平安時代以降の遺構

SD936～944　南区東南部で、幾重にも重複する溝を検出した。SD936は幅50㎝で、東に流れた後、直角に折れ南流する。SD937はSD941と重複する幅50㎝の南北溝。SD941より古く、SD936とは重複関係にない。SD938・939はSB953の上面から南区東南隅へ蛇行する溝。重複関係よりSD939がSD938より新しい。SD939は埋土の状況よりSD940に連続する可能性もある。SD940は幅30㎝の東西溝で、東は調査区の外に続く。SD938

と重複し、SD938より新しい。SD941はSX935の西側を流れる南北溝。幅は約1.1m。南にいくにつれ、西肩が判然としなくなる。SD939より新しい。SD942はSD938・939の上部を流れる蛇行溝。SD939があふれた痕跡の可能性もある。SD943は南端の東西溝。幅は約２m以上で、SD938と北岸を同じくし、南岸は調査区外とみられる。東も調査区の外に続くが、東区では撹乱により検出できなかった。SD939・SD940より新しい。SD944は調査区東南隅で長さ３m分を検出した。埋土には瓦器を含む。SD943より新しい。

これらの溝は、以上のような重複関係が見られるが、基本的には改修の工程順序を示しており、各遺構間は大きな時期差はなかったものと考えられる。SD942や、東区・南東区一帯に広がる砂層の存在から、おそらく大雨などで氾濫した食堂院内の水を効率よく外に排水するために掘られたものであろう。なお、重複関係でもっとも古いSD936の埋土から、９世紀中頃の土器が出土した。

SK973　南区西北隅で確認した土坑。埋土は上層と下層に分かれる。上層では不整形で、東西約３m以上、南北約2.5m以上の溜まり状を呈し、下層では一辺約２mのほぼ方形。検出面からの深さは最大で約40㎝。SB970と重複し、SK973の方が新しい。埋土から大量の瓦が出土した。瓦はいずれも奈良時代で、上層に９世紀に降る土器を含む。SB960やSB970などの廃絶にともなう廃棄土坑か。

SX976・SD977　SB960基壇上の身舎東南で、東西約1.2m、南北約１mの赤白色を呈する焼土面を確認した。鍛錬鍛冶炉の底部と考えられる。２回の造り替えがあり、最新のものは直径70㎝、残存深さ10㎝の円形炉。SB960廃絶後に造られたものであろう。また、SD977はSX976にともなう周溝の可能性が高い。

SX978　SB960中央間東の柱に筋をそろえた南北方向の掘立柱列。柱穴を４基確認した。北端はSB960北側柱とほぼ重なる。柱間は約2.7m（９尺）。柱穴は一辺約１mの隅丸方形で、遺構検出面からの深さは最大で約50㎝。SB960廃絶後の遺構である。

SK964　SD963を掘り込む土坑。南北に長い楕円形平面を呈し、長径約1.6m、短径約１m。埋土より多量の檜皮と奈良時代後半の瓦が出土した。SB955やSB960の廃絶にともなう廃棄土坑で、SK973と同性格の遺構か。

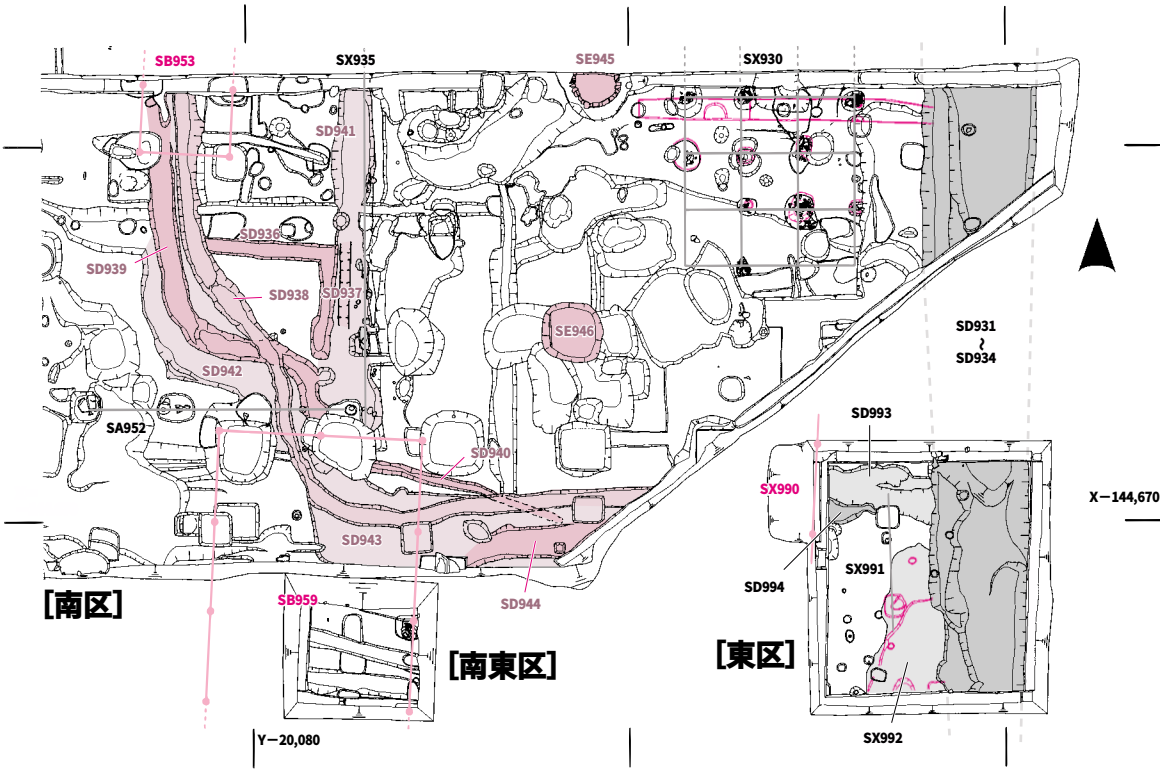


図17　南区東部・南東区・東区　遺構平面図　1:200

SK947　SE950上面で検出した、南北2.3m、東西2.4mの方形の土坑。埋土からは多量の炭と９世紀後半から10世紀半ばまでの土器が出土した。SB960東南付近やSD942周辺に分布する暗灰色土に含まれる遺物と同時期で、10世紀半ばに大風で食堂が倒壊した後に、周辺一帯を整理した際の遺構であろうか。

SE945　南区東部で検出した、内法径1.1mの円形の瓦積み井戸。井戸の深さは検出面より1.4mで、井戸枠は深さ1.1mが残存する。井戸底には浄水用に拳大の礫を敷く。井戸枠は主に平瓦を用い、一部軒平瓦（中世）も使用する。掘形の埋土は粘質土で、井戸枠を固定する。井戸内の埋土から13世紀頃の羽釜が出土した。

SE946　SE945の南で検出した円形の素掘り井戸。直径は1.6m。調査中に崩落し、深さは未確認。埋土から、直径10㎝程度の自然木や中世の瓦器が出土した。

図18　SE945検出状況（南西から）

2　一条北大路の遺構

SF980・SD985　中区中央付近で、一条北大路南側溝とみられる東西溝（SD985）を検出した。溝幅は3.5～４m、遺構検出面からの深さは約0.7m。側溝心の座標はおよそX＝－144,610.5。少なくとも３回以上の浚渫・改修がおこなわれたようである。西から東に流れ、溝底付近に砂が堆積しており、比較的多量の水流があったとみられる。埋土から瓦が出土したが、土器は確認できていない。出土した瓦はいずれも奈良時代後半のもので、埋土間での時期差は認められない。また、平安時代に降る遺物も確認されていない。

北側溝は、今回の調査区内では確認されておらず、北区・中区の間の現水路直下に存在する可能性が高い。その場合、一条北大路（SF980）の側溝心々間距離は約16m（54尺・45大尺）と推定される。

SD981　中区北端で検出した東西溝。幅１～1.5m、残存する深さ約30㎝。調査区東端付近で南に広がり、南流した痕跡も認められた。出土遺物は奈良時代後半のものを中心とする。なお、SD981がある時期の一条北大路北側溝である可能性も残る。

3　北辺三坊三坪の遺構

北辺三坊三坪は、奈良時代のまとまった遺構は少なく、空閑地もしくは広場の状況を呈していた可能性もある。中世以降とみられる多くの小穴を検出したが、建物としてはまとまらない。

SD986　北区西部で確認した南北溝。ほぼ同じ場所で付け替えられている。幅・深さは一定でないが、幅は概ね約30㎝、遺構検出面からの深さは約10㎝。埋土の様相から、２条とも短期間に埋め立てられたと考えられる。埋土から、奈良時代前半から中頃にかけての土器・瓦が多量に出土した。

SX987　北区南部で検出した東西方向の掘立柱列。柱穴は一辺60～80㎝の隅丸方形を呈し、深さは約30㎝。柱の間隔が一定でなく、場所により異なる（1.7～3.4m）。南北溝SD986と重複し、SX987が新しい。SX988の南から２基目の柱穴と柱筋をそろえる。

SX988　北区西部で検出した南北方向の掘立柱列。柱穴11基を確認した。柱穴は隅丸方形で、一辺60～80㎝。南の４基は柱間約2.6mで、遺構検出面からの深さは約50㎝でそろう。以北の柱穴は、柱間にややばらつきがあり（２～2.7m）、深さも異なる。柱穴の掘形から、10世紀の黒色土器が出土した。

Ⅲ　遺　　物

１　木　　簡

はじめに　木簡は、SE950井戸枠内埋土から約360点（2007年１月末現在）出土した。井戸枠内の埋土はすべて持ち帰ったが、なお水洗・遺物選別中であるため、最終的な点数は今後さらに増加し、1,000点を超える一大木簡群（以下、西大寺食堂院木簡と称する）を構成するものと思われる。ただ、点数はかなりの増加が見込まれるものの、全体としての傾向は現段階での知見を大きく逸脱することはないと判断される。

出土層位　木簡は井戸枠内の埋土のａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅ各層から出土した。内訳は表２の通りである。その多くは木屑の間層を多量に含むｃ・ｄ両層に集中し、この両層で約８割を占める。木屑層は、断面観察によると、井戸枠から井戸の中心に向かって三日月形に交互に落ち込む形で存在し、井戸周囲の複数の方向から数回にわたって投棄された状況がうかがえる。最下層のe層にも木簡が含まれ、またa・ｂ層には木屑層と認識できるような堆積は認められず、ｃ・ｄ層に比べて土器が多いという特徴はあるが、削屑も含まれる。木簡の出土状況においても、a・ｂ・ｃ・d・e各層は一連の埋め戻しにかかるとみてよい。

形態的な特徴　木簡の形態別内訳をみると、削屑（091型式の木簡）の占める割合は50％強である。これは通常の木簡群のあり方に比べるとかなり異常な数字である。勿論、今後の埋土の水洗にともなって削屑の割合は増加すると思われる。しかし、これまでの状況から判断すると、削屑の比率が比較的小さいという傾向を解消するほど削屑が卓越するとは考えにくい。削屑の多くが墨痕のみで釈読できない微細な断片である点も、これと軌を一にしよう。12のように11文字の釈読が可能な約22㎝を測る長大な削屑もある（同種の完形木簡の存在も確認できる）がこれは例外で、木簡の切削をともなう事務作業を彷彿とさせるような状況ではない。

ただ、木簡の二次利用がまったくおこなわれなかったわけではない。むしろ二次利用の痕跡をよく残す点に木簡群としての特徴がうかがえる。二次利用形態には３種類が認められる。一つは、表裏で同種の内容の記載がある木簡である。６は一面を８月４日付けの飯支給の木簡として利用した後、反対面を８月27日の飯支給の木簡に二次利用する。その際、最初の支給にかかる記載を削り取っていないのが大きな特徴である。次に、表裏に異種の記載がある木簡である。７は一面には飯支給の記載が書かれているが、反対面にはこれとはまったく無関係の銭に関わる記載が残る。９も一面は同様の飯支給の木簡であるが、反対面は朝参の僧の歴名に利用されている。また、16も飯支給の木簡の反対面を茄子・木瓜・干瓜に関わる帳簿に二次利用する。一次利用・二次利用の判断は難しい部分もあるが、これらの場合も一次記載を削り取らずに反対面を利用しているという特徴がある。もう一つは、表裏に異種の記載がありかつ二次利用の際に二次的整形がおこなわれている木簡である。56と57は穀物の斗量のみを記す付札であるが、反対面には、横材の帳簿状の記載の断片が残る。すなわち、横材の帳簿木簡を二次的に複数の051型式の付札に再加工しているのである。文字の様子はかなり異なるが横材の帳簿木簡（58）も出土しており、不要になった横材木簡を同じ場所で付札に二次利用しているとみて矛盾はない。そしてこの場合も一次利用記載は削っていない。こうした切削をともなわない木簡の二次利用の存在は、削屑の大半が断片的でかつ削屑そのもののが少ないことと表裏一体とみてよいであろう。なお、木簡の加工そのものは、上下両端が

表２　地区・層位別木簡出土点数（2007年１月末現在）

層位	IB70		IC70		IZ70		合計	
	木簡	削屑	木簡	削屑	木簡	削屑	木簡	削屑
ａ層	0	0	1	0	0	0	1	0
ｂ層	1	1	1	17	0	0	2	18
ｃ層	2	18	13	9	0	0	15	27
ｄ層	47	24	76	86	1	0	124	110
ｅ層	8	7	8	19	0	0	16	26
層位不明	1	0	1	0	1	0	3	0
撹乱	2	1	11	4	0	0	13	5
合計	61	51	111	135	2	0	174	186

切り折りのままのものが多いなど、概して粗く、規格性にも乏しい。樹種は、平城京跡での一般的な傾向と異なり、スギ材の占める割合がかなり高いようである。

木簡の年代　紀年銘には、延暦５年（24）、10年（26）、11年（25〈推定〉・27・28）がある。年代的にまとまっており、内容的にも８世紀末とみて矛盾を来す木簡は含まれていない。井戸の埋没状況からみても、最新の紀年である延暦11年（792）からさほど降らない時期に一括投棄されたものとみられる。ちょうど延暦13年（794）の平安京遷都の直前の時期にあたり、長岡宮・京出土木簡と同時期の木簡群ということになる。

なお、25の年紀は当初「正暦二年」と釈読し、これがその段階では年紀のある唯一の木簡であったことから、木簡群全体を平安時代中期の10世紀末に降る一括資料と考えた。「正」と「延」は字体が紛らわしく、両者の可能性を考慮しつつも「正暦」と釈読したのは、次のような理由による。①字形そのものが「正」であり、「延」と釈読するのは困難である、②井戸周辺の最終的な整地土に10世紀の土器が含まれている（15頁SK947の項参照）、③962年（応和２）に大風で倒壊する（『日本紀略』）まで食堂院の衰微を示す文献史料がない、などの点による。すなわち、周辺の遺物や既往の文献史料との整合性から、井戸廃絶の時点は10世紀末に求めるのが妥当ではないかと考えたのである。しかし、井戸枠内の木簡と共伴する土器は８世紀のものであること、木簡にみえる可信の存在は９世紀半ばを下限とするとみられることなど、多くの課題が残されていた。

その後、井戸埋土の水洗の進行によって、明らかに「延暦」と読める荷札木簡がまとまって出土した。いずれも通常の「 」の字形をとる。26のみは第１画を左から起筆する点は25と同じだが、延繞が明確に記される。「延」は「延」と書かれることはあっても延繞が省かれることはなく、「正」と「延」の区別は延繞の有無によるとみられる。すなわち、25の１文字目の「 」のような延繞の省かれた（あるいは「正」の第４・５画と共有する）字体・字形の「延」は類例を見出し難いため、文字そのものは「正暦」と釈読すべきであろう。しかし、木簡を初めとする遺物が増加した現段階でもなお、明らかに10世紀末に降る遺物は見出されておらず、基本的に８世紀の範囲内でおさまっている。しかも、26～28がいずれも25と関連の深い赤江南（北）庄の荷札であり、特に26は書式も類似している。したがって、25が文字通り「正暦」である可能性はなお含みつつも、現段階では25は「延暦」を意図して書いたと解釈するのが最も穏当と判断する。「正〔延〕」とした所以である。今後「」の字体・字形の「延」の事例の確認に留意していきたい。

木簡の内容　西大寺食堂院木簡は、西大寺という寺院組織の内部、しかも食堂院という閉じた空間の井戸の遺物で、遺構の上でもまた投棄状況の上でも極めて一括性の高い遺物とみてよい。内容的にも食堂院という木簡使用の場に相応しくコンパクトにまとまったものとなっている。大別すると、①食材の進上に関わる木簡、②食材の保管に関わる木簡、③食料ないし食材の支給に関わる木簡の３種類から構成されている。

食材の進上に関わる木簡　これはさらに薗からの進上と、荘園などからの進上とに分けられる。前者には東薗からの進上簡（１・２）があり、木瓜・大角豆・茄子・大根・知佐などの蔬菜が届けられている。４は物品名は不詳で、また「判収」の文言があるので受取状の可能性もあるが、蔬菜進上に関わる木簡である。４台の車に載せて送られた物品の進上を示す５も、薗からの進上に関わる可能性がある（ただし、蔬菜か否かは不詳。材木などの可能性もある）。

25～29は、「資財帳」にみえる越前国坂井郡所在の西大寺領荘園赤江庄からの黒米の荷札である。荘園から貢進物の荷札は、上荒屋遺跡など荘園の現地での出土は知られるが、貢進先での出土はこれまでに類例がない。「資財帳」は「赤江庄」と記すのみだが、木簡には「赤江南庄」「赤江北庄」がみえ、赤江庄が南北に二分して経営されていたことがわかる。両庄の木簡で書式が異なり、赤江南庄の25・26は、表に「西大赤江南庄」（「寺」を省く）＋貢進品目・数量（地子との明記はない）＋貢進者名（名のみで姓を書かない）、裏に貢進年月日を記す。これに対し赤江北庄の27・28は、貢進者姓名＋貢進品目・数量＋「西大寺赤江北庄某年地子」を表裏に続けて記す（28は「赤江北庄」から書き出した可能性もなくはないが、その場合裏面末尾に「西大寺」と書くの

26 〔西大赤江カ〕
・□□□□南庄黒米五斗
〔十年カ〕 〔万呂カ〕
・延暦□□十二月廿日□□□□ 175・16・4 051 IC70 d ＊10

27 ・穴太加比万呂黒米五斗
〔西大寺カ〕
・□□□赤江北庄延暦十一年地子 108・14・2 051 IB70 d ＊10

28 ・□万呂黒米五斗西大寺
・赤江北庄延暦十一年地子 147・16・6 051 IC70 d ＊10

29 ・西大□
・延暦□ (44)・17・5 019 IC70 d

30 少戸主波太部直万呂大豆五斗 162・13・5 051 IB70 d ＊10

31 少戸主□□□□紀須大豆五斗 (195)・16・3 033 IC70 d ＊10

32 少戸主波太部直万呂□豆 (111)・22・4 039 IC70 d

33 少波太部直万呂 154・12・4 051 IC70 d ＊10

34 少□□部廣□大□ 97・16・5 051 IC70 d

35 美作国勝田郡吉野郷〔搗カ〕□米五斗 171・29・6 032 IB70 d ＊10

36 川合郷茜庭刀自女 144・18・3 051 IC70 e ＊10

37 ・佐々貴山公時守戸白米
・「□成乎智廣□□」 (127)・24・3 019 IC70 d ＊11

38 ・矢田部廣人米五斗
・上二月十八日 199・27・3 051 IC70 d ＊11

39 楮田部由万呂〔赤カ〕□五斗 94・11・4 011 IB70 e

40 縄万呂□五斗 117・24・3 051 IC70 d

41 〔夾カ〕
・□角豆二百五十二枝
・三中取 134・10・4 051 IC70 d ＊10

42 醤漬瓜六斗 132・18・2 033 IC70 d ＊10

43 五斗八□ 147・31・5 051 IC70 d

44 五斗一升六合 96・20・3 051 IB70 d

45 五斗一升六合 97・17・2 051 IB70 d ＊11

46 五斗一升六合 108・16・4 051 IB70 d ＊11

47 五斗一升六合 110・14・2 051 IC70 d

48 五斗一升四合 125・16・2 051 IB70 d

49 五斗一升三合 123・19・5 051 IC70 d ＊11

50 ・五斗一升
・「□□□　　□」 84・18・3 051 IB70 d

51 五斗一升 153・17・4 051 IB70 e ＊11

52 五斗一升 153・25・3 051 IC70 d ＊11

53 四斗八升 166・19・6 051 IC70 d ＊11

54 四斗六升 110・13・3 051 IB70 d

55 四斗六升 134・15・4 051 IC70 d

56 ・四斗六升
・「〔タ〕〔ヲ〕□十
五
□ □
□ □」 176・25・5 051 IC70 e ＊11

57 ・四斗六升
・「五 廿 □
十 ヶ
又 ヶ
□ 」 146・21・4 051 IC70 d

58 ・舟 麦 □
春 伍 料
料 舟 □
目 代 □
・□ 麦 □
□ 春 □
麦 □ 麦〔春カ〕□ (40)・(187)・6 081 IC70 z
日麦 □

59 ・成成弐弐弐弐商商弐□朝堂〔海カ〕□成成 成弐弐 足□
・□□□□□□□□ 312・21・4 011 IC70 d

60 同法 径140・厚6 061 IB70 d ＊9

61 西南角□ 西大寺 名 〔楼カ〕 (井戸枠北四段目外側) 2665・265・65 061 IC70 ＊11

【西大寺食堂院木簡釈文】

（＊8は図版8に写真を掲載したことを示す）

1
東薗進上瓜伍拾壱果　又木瓜拾丸　大角豆十把
茄子壱斗弐升　七月廿四日　別□□□〔当カ〕
299・37・4　011　IC70　d　＊8

2
東薗進上大根三升　知佐二升
(232)・(9+7)・3　081　IC70　d　＊9

3
□　□八□　付浄女　進上七月廿三日□□
(176)・25・2　011　IC70　d

4
五拾把　七月十日僧信梵判収目代安豊
〰〰〰　〰〰〰〰〰〰
(245)・22・3　019　IC70　d　＊9

5
一車十一村〔合カ〕
又進四車二車別十村　□冊村　十月十九日蔵冊恵智
一車九村
282・32・4　011　IC70　d

6・飯壱升　伊賀栗拾使間食料　八月廿七日　目代〔倉人カ〕□□
・「□□□□□□　八月四日□□〔目カ〕
上座　寺主　可信　□　□　□□倉人」
（裏面左行ハ墨線デ囲ンデ抹消）
395・25・6　011　IC70　d　＊8

7・飯弐升　客房侍倉人一人鎰取一人合二人間食料
寺主「□□」□都□「聞圓」　少都□〔那カ〕　三月五日
・「銭□貫文　少寺主　而□□□」
「□□」　而□□
291・42・2　011　IC70　c　＊8

8
飯壱斗壱升　蔓菁洗漬並□
上座　寺主「信如」可信
〰〰　〰〰〰
(180)・41・3　019　IC70　d

9・十日朝参沐口頭一人　多守師　多表師　慈舜師
慈□師　保忠師　別当守泰
・「飯壱升　雑□□常料　十一月四日
寺主『□□』□□　□　□」
〔可信カ〕
226・26・1　011　IC70　d　＊8

10・損分入八升　八斗八升　主所返充
□□□□　□□□□
・「聞圓」　少□〔都カ〕□
(134)・(15)・2　081　IC70　b　＊9

11・寺主「信如」可信「基憬」□□
〰〰　〰〰
・　□　□
(200)・(18)・5　081　IB70　d　＊9

12
飯壱斗伍升　蔓菁□女□並仕丁
091　IC70　d　＊9

13
〔僧カ〕□別若干□
□□□
091　IC70　d　＊8

14・漬蕪六升
・道下米依
(66)・25・3　IB70　攪乱　＊8

15・茄子十五石六斗　六石五斗見直充了
「世　世　世　世」九石一斗　直未□九十三文今所給　「□□　世　世　世　世　世＝
＝世世世世世世」□□　（「　」部分は重書）
□□　□
・□□二石九斗「茄子」四石「麻」一石□　□「財平□」
「為為為」□□□卅□
(239)・18・3　019　IB70　d

16・四斗五升茄九石　二斗一升知□〔木カ〕斗□瓜一石五斗　＝
九日升五合　□漬
＝五升干瓜
・「□□□□□□□□」五月廿□日　目代「慈舜」
□肆升　寺□□料〔廻散カ〕
339・28・4　011　IC70　d　＊9

17
□田料大豆五斗
(111)・20・5　081　IB70　d　＊9

18・浄酒弐升□□□料又酒〔政所カ〕
・□　□　□　□　□
(156)・(9)・4　081　IC70　d　＊9

19
□酒壱升弐合□□
(174)・(10)・3　081　IB70　d

20・白米□□□□□□□□
・塩壱斗　塩
126・(8)・1　081　IC70　c　＊8

21
□　中院浄主　西院□守　西倉道長
□　□　□
(236)・(33)・9　081　IC70　d

22
僧房作所
(82)・(11)・5　081　IC70　d　＊8

23
o西南□殿鎰
112・31・6　061　IC70　d　＊8

24・羽郡野田郷戸主□□私人戸口生江伊加万呂
・延暦五年十月廿七日
142・18・3　051　IC70　e　＊10

25・西大赤江南庄黒米五斗吉万呂
・正暦十一年六月十五日吉万呂〔延〕
156・21・4　051　IC70　d　＊10

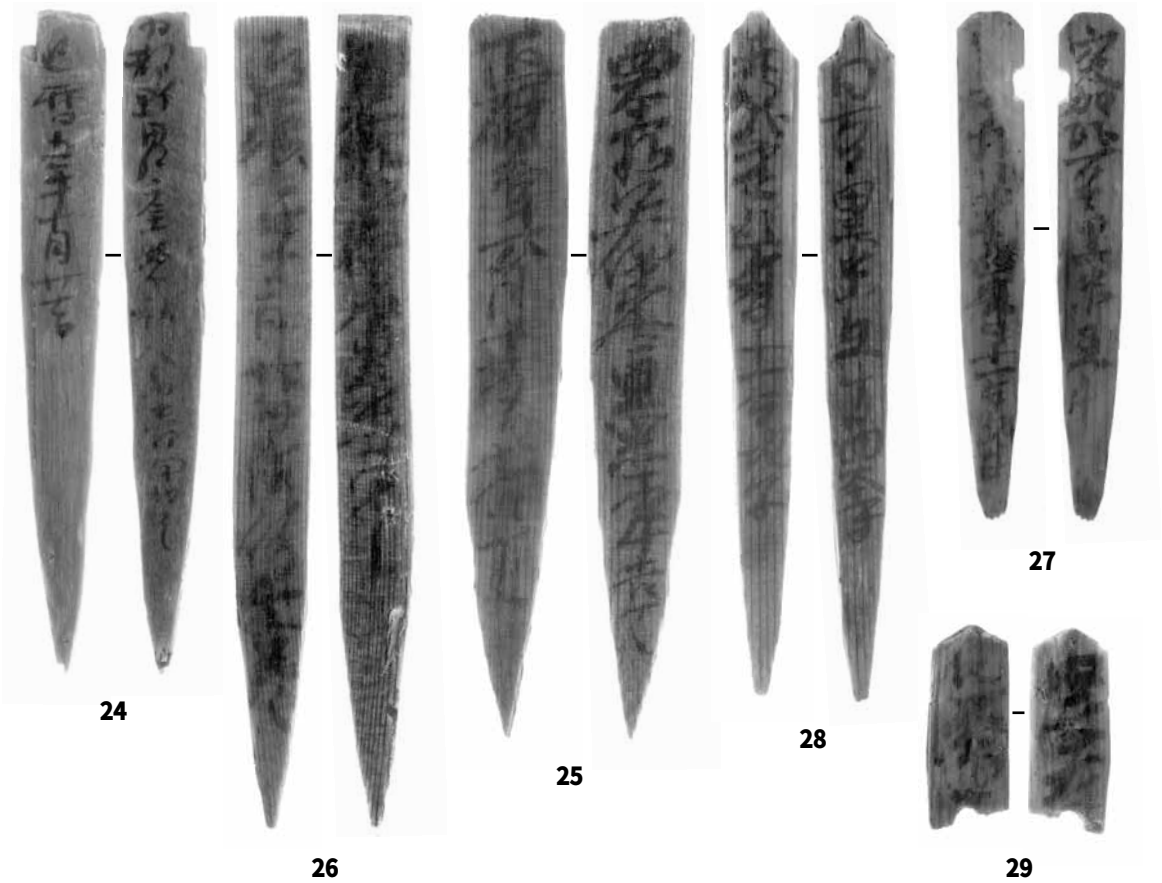


図19 「延暦」紀年銘のある越前関係の荷札（赤外線デジタル写真）

は不自然で、27と比較するならば、表裏は上記のように理解するのが妥当だろう）。したがって、書式からみて29は赤江南庄の荷札と判断される（３文字目は「赤」か。ただし「寺」もあり得る）。なお、荘園地子は９世紀以降顕著に見出せるが、既に天平宝字元年（757）には同じ越前国坂井郡の東大寺領荘園鯖田国富庄の墾田地子の事例がある（東南院文書。『大日本古文書』編年文書４、257頁）。

「資財帳」からは赤江庄以外にも多くの荘園の存在が知られるが、今回出土した木簡にはそれらに直接結び付くような資料は見出せない。むしろ、赤江庄と同じ越前国との関わりを示す荷札が多いのが注目される。24にみえる野田郷は、越前国の足羽郡と丹生郡の両者に存在するが、１文字目は「羽」と判読できるので、足羽郡の野田郷である。郡名の略記は類例がないが、上端に二次的整形の痕跡はない。足羽郡野田郷の荷札には、「戸主某戸某」の書式の荷札の類例があり（奈文研1974『平城宮木簡二』、2774号）、類似した書式をとることや、生江氏がみえる点も興味深い。品目は米か。荘園の荷札ではなく、律令制租税収取にもとづく貢進物とみられるが、略式の記載からみると、あるいは封戸などの可能性がある。

30～34は大豆の荷札である。「少」＋貢進者名＋「大豆五斗」を基本の書式とする。越前国との強い結びつきや、大豆の貢進荷札の類例（越前国坂井郡。『平城宮木簡二』、2741号）から考えると、冒頭の「少」は越前国足羽郡少名郷を示すか。郷名の１文字を冒頭に書く荷札としては、島根県青木遺跡の「美」（美談郷）や「伊」（伊努郷）の事例があり、西大寺との直接的な結びつきの中で取られた略式の書式と理解できる。

越前国以外では、美作国の春米（「搗米」と表記）の荷札（35）や近江国と考えられる白米の荷札（37。本来は習書のある裏面が表か）がある。また、「人名＋五斗」のみや人名のみの荷札がある（38～40。39のみ011型式、他は051型式）。これらも米の荷札の可能性が高く、越前国や近江国の荷札との関わりが考えられる。41はササゲの若莢（＝夾）を食用とするサヤササゲの付札か。

食材の分配に関わる木簡　6～20は食材や食料の支給に関わる伝票や帳簿の木簡である。このうち、６・７表・８・９裏・10・11・12・16裏は飯の支給伝票とみられる。記載項目は共通で、①支給品目・数量、②被支給者・用途、③支給日付、④支給責任者、⑤決裁署名の５項目からなる。支給品目は飯で、生の米ではなく炊いたごはんと理解しておく。数量は概ね一人あたり１升（現在の４合）である。被支給者は、伊賀栗拾使（６。「資財帳」に見える伊賀国名張郡所在の栗林に関わるか）、客房侍倉人・鎰取（７）、蔓菁洗漬並□（８）のような雑務従事者のほか、雑□□常料（９裏）、寺廻散（撒）料（16裏）のような用途の形でも表現されるが、これまでのところ僧に対する支給例はない。日付は３月（７）、５月（16裏）、８月（６）、11月（９裏）があり、年紀はみられない。日下の支給責任者には目代や倉人（６表裏とも。16裏）がみえ、僧名が記される場合もある（16裏）。決裁者には、上座、寺主、大都（維）那、少都（維）那、可信がみえ、自署が加えられる例は多くはないが、寺主には信如（８。11も）、大都（維）那には聞圓（７。10も）、少都（維）那（ヵ）には安豊（16裏）、可信には基憬（11）が署す事例がある。なお、９表の朝参僧歴名にみえる別当守泰は、「資財帳」末尾に衆僧の一人として署す守泰と同一人である可能性が高い。

食料支給に関わる伝票木簡としては、長屋王家木簡の例が著名である。長屋王家の伝票木簡は、①被支給者、②支給品目・数量、③受取人、④支給日付、⑤支給責任者の５項目からなる。西大寺食堂院木簡ではこのうち支給品目・数量が冒頭に記され、受取人の項を欠き、かつ決裁者が加わる。その点では、請求文書がそのまま支給伝票に転用される形式をとる点は異なるものの、桓武天皇の皇后藤原乙牟漏の皇后宮職に関わる食料支給木簡（平城宮跡造酒司南の宮内道路南側溝出土、奈文研1996『平城宮発掘調査出土木簡概報』32）との親近性が顕著である。時期も同じ延暦年間で、決裁署判に抹消が施される事例がある点も共通する。ただし、これらの記載が両面に及ぶ（前者は片面におさまる場合もあるが、おさまりきらない場合は適宜裏面に続ける。後者は請求文書を転用する関係で、署判を裏面に記す）のに対し、西大寺食堂院木簡では片面で完結する。このため、反対面を別の支給木簡として利用したり、別の用途の木簡に利用したりすることがある（前述）。17～20は断片的で木簡の全体像は把握できないが、白米・大豆・酒・塩などの食材に関わる帳簿木簡の断片とみられる。なお、製塩土器が多数出土しているにもかかわらず、塩のみえる木簡は現在20が唯一で、塩の荷札もない。

食材の保管に関わる木簡　42～57は食材の保管に関わるとみられる木簡である。42は醤漬の瓜の容器の付札。43～57は斗量のみを記す051型式の木簡で、形状からみて米の付札の可能性が高い。その場合、西大寺への進上の際の荷札の可能性もあるが、量目のヴァリエーションが豊富であること、横材の帳簿木簡を転用した事例があること（56・57）から、食堂院における保管の際に、俵ないし容器に付けた付札とみられる。23はキーホルダーの木簡である。「□殿」は「薬」または「菓」の可能性が考えられるが、断定できない。また、「西南□殿」は「資財帳」にはみえない。

その他の木簡　21は中院・西院・西倉という西大寺の伽藍構成をうかがわせる断片的な史料。22の僧房作所は僧房の造営を担当した部局名であろう。延暦年間にもなお西大寺の造営が続いていたことを示唆する。59は習書木簡。60は曲物の底板に墨書したもの（木製品４）。これと同じ「同法」ないし「同」と記す墨書土器が井戸埋土から多数出土している。西大寺内のある僧侶集団の什物であることを示す墨書か。61は下から４段目北側の井戸枠の外側に墨書したもの。墨書部分を丁寧に削って記す。井戸枠には767年に伐採された材が含まれており（42・43頁参照）、他材の二次的な転用は考えにくいが、西大寺にあった（あるいは建立の予定のあった）「西南角□〔楼ヵ〕」の部材用に準備し納品された材を、井戸枠に転用したのかも知れない。

まとめ　以上概観したように、西大寺食堂院木簡は、食堂院の運営や事務処理だけでなく、西大寺そのものの寺院経営の実態や経済基盤を如実に示す豊かな内容をもつことが明らかになった。また、年代的にも８世紀末の平安遷都の頃という、平城京跡ではこれまでに類をみない時期のものである。内容的にも年代的にもユニークな木簡群として、その全貌の解明と研究の進展が大いに期待される。

2　瓦 磚 類

右京一条三坊八坪　軒丸瓦83点、軒平瓦131点、丸瓦883kg、平瓦3,656kg、磚129kg、凝灰岩切石片143kgが出土した。ただし、井戸SE950の出土遺物は現在も整理中のため今後も増加する可能性があり、上の数値は暫定的である。このほか鴟尾、鬼瓦、面戸瓦、熨斗瓦などの道具瓦類も出土している。

１は軒丸瓦6132Ｂで２点出土。単弁16葉で中房連珠は１＋８。２の6133Ｒは単弁16葉、中房蓮子は１＋８で10点あり、SD939・SD941などから出土している。今回の調査では6139Ａに次いで多い型式となる。３の6139Ａは単弁12葉、中房の蓮子は１＋６で15点出土。軒丸瓦のなかでは出土数が最も多い。４は複弁12葉、中房蓮子１＋８の6236Ａで６点出土。文様が摩滅している。５は４と同様の文様構成をもつ6236Ｉで１点出土。２～５は西大寺創建期の軒瓦である。このほかにも奈良時代の6135Ａ、6236M、平安時代の複弁蓮華文（西大寺84Ｂ）、中世に属する三巴文（西大寺164Ａ）などが少量出土している。

６は藤原宮式の軒平瓦6641Ｃで１点、７は6664Ｄで１点出土。８は6675Ａで３点あり、うち１点はSD942から出土している。９は6691Ａで、３点中１点は曲線顎Ⅱで、SD942から１点出土している。10は6691Ｄ、11は6691Ｆで各１点出土。12は6710Ｄで２点あり、うち１点はSD939から出土している。13は6730Ａで２点、14は6732Ｆで４点、15は6732Ｋで６点出土した。16は6733の新型式で、５点出土した。文様は均整で左右３回反転の唐草文をかざり、中心飾りは上方に広がる無軸三葉形と対葉花文を組み合わせる。対葉花文上方の闊（かつ）弁部の形が特徴である。瓦当面の向かって左上隅と左第３単位の主葉上辺に明確な笵傷があり、顎は特異な曲線顎を呈す。瓦当最大幅は30.5㎝。以上は奈良時代に属し、6732型式の瓦はいずれも西大寺創建期の瓦である。このほか、小片だが奈良時代の6654Ａ、6663Ａ、6732Ｅ・Ｎ・Ｑ・Ｒ・Ｚ、6767Ａ、6775Ｃ、平安時代に属する西大寺283Ａ、薬師寺321などが出土している。

22は南都七大寺Ｉ式Ｂ1の鬼瓦。東大寺講堂や西塔の出土品と同笵で、全長約48㎝。眉間の向かって左寄りに釘孔があり、脚下端には無紋部分が残存する。このほか、平城宮式鬼瓦Ⅲ式、鴟尾片、施釉の円形垂木先や磚があり、井戸SE950からは大量の熨斗瓦とともに、凸面に「大男瓦二百九十七□〔枚カ〕／又小女瓦□」と墨書した丸瓦や、人物像や鳥の戯画を描いた磚（残存長14.0㎝・図20）などが出土した。

図20　SE950出土墨書戯画磚

食堂院の軒瓦は軒丸瓦6139Ａ（15点）、6133Ｒ（10点）、6236Ａ（６点）と軒平瓦6732Ｑ（14点）、6732Ｋ（６点）などが主体をなし、6730Ａや6733新型式も補足的に使用されたと考える。瓦の年代観から、食堂院の造営は概ね宝亀年間におこなわれたと思われる。

北辺三坊三坪　軒丸瓦33点、軒平瓦15点、丸瓦402kg、平瓦1,334kg、磚６kgが出土したほか、鬼瓦、面戸瓦、熨斗瓦、凝灰岩切石などがある。

17は軒丸瓦6134Ａaで２点、18は6225Ｆで１点出土、19は6316Ｍで裏面の接合粘土が非常に厚い。このほか、6133Ｒ、6138Ｂ、6139Ａ、6236Ａ・Ｈ、6314Ａ、6316Ｉなどがある。20は小型の軒平瓦6685Ｂで２点出土。少数だが、6691Ａ、6732Ｑ、6733新型式も出土している。21は鬼瓦の小片で牙と外区珠文帯が残存する。南都七大寺式ⅣＡの可能性が高い。以上の瓦は奈良時代に属する。

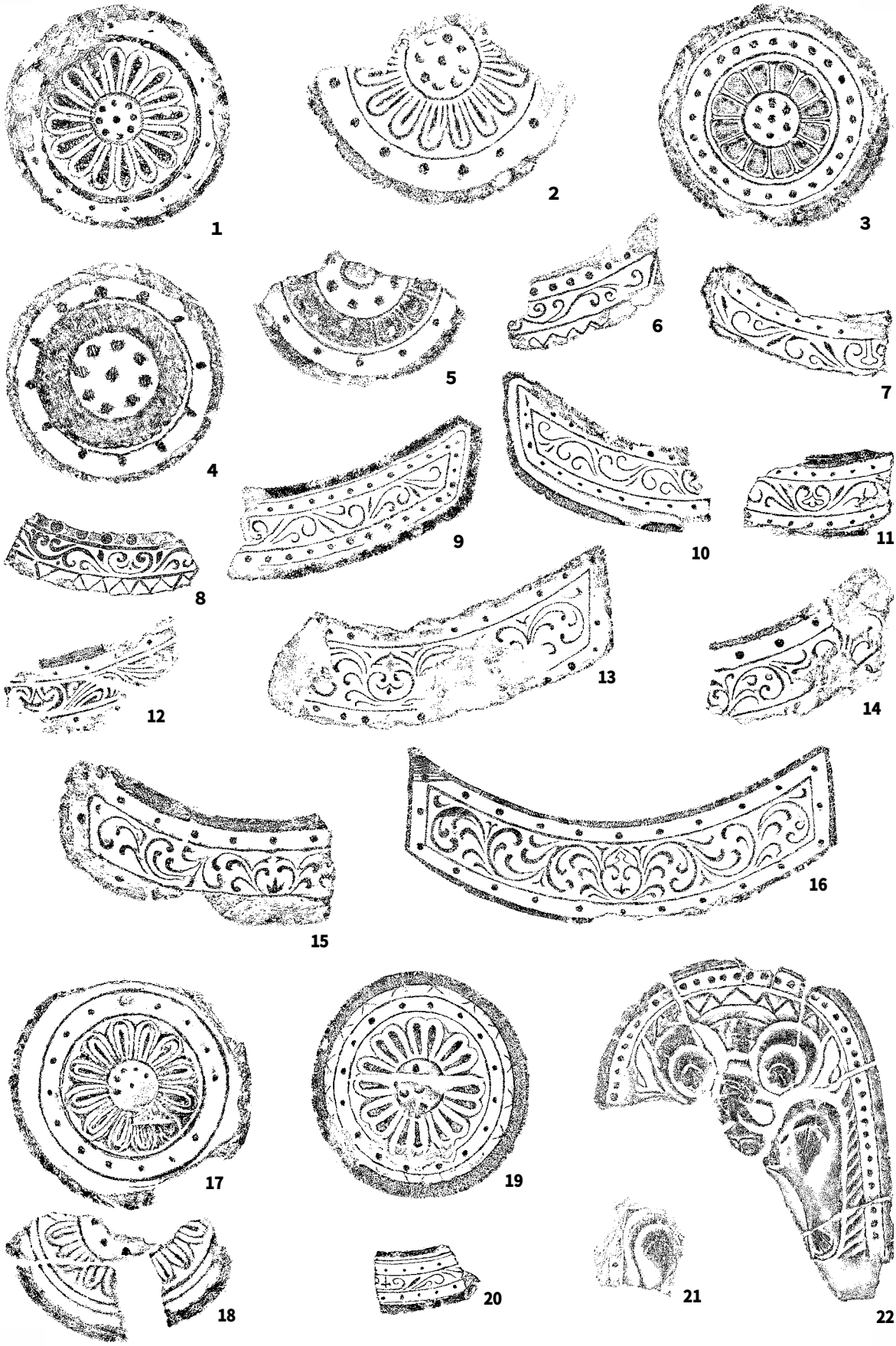


図21　出土瓦（1～20は1:4　21・22は1:8）

３　土器・土製品

土器・土製品は、調査区全体から整理用コンテナで80箱ほど出土した。奈良時代の土器が全体的に多いが、包含層より出土する土器の傾向としては、南東寄りに中近世のものと円筒埴輪が多く、また北側では形象埴輪が多くなる傾向がある。ここでは井戸SE950、井戸と重なる土坑SK947、大炊殿SB960の東南一帯に広がる包含層（暗灰色土）より出土した施釉陶器・瓦磚、埋甕列SX930から出土した土器について報告する。

（１）SE950出土土器

奈良時代末から長岡京期の土師器、須恵器とともに製塩土器が大量に出土した。土師器、須恵器は共伴する木簡の年代とその一括性を評価すると、平城京土器Ⅳの基準資料となりうる可能性をもつ。ただし、後述するように器種構成や産地に偏りが指摘できることから、平城宮・京の土器と同列に扱うことには注意を要する。製塩土器は整理用コンテナ数で土師器、須恵器の約２倍が出土しており、消費地から出土した古代の製塩土器としては他に例をみない出土量として、今後の標識的な資料のひとつとなろう。

出土した土器は遺物取上げ層序のa層から最下層の礫層まで相互に接合関係があるが、概ねa・b各層間と、c・d・e各層間で接合するものが多い。また、特にc・d・e層でほぼ完形に復する土器や墨書土器が多い傾向がある。製塩土器は各層で出土量に差異はないが、やはりc・d・e層に残存状況の良いものが多い。

土師器（図22） 土師器の主な器種には杯Ａ、杯Ｂ、杯蓋、皿Ａ、皿Ｃ、椀Ａ、椀Ｃ、高杯、壺Ｂ、壺Ｅ、甕Ａがある。杯Ａは奈良時代を通じて普遍的な供膳具であるが、ここではいずれも数点しかなく、小片である。17はb2手法の杯Ａ。口径の８分の１程度が残存、b層の出土。

供膳具の主体を占めるのは椀と皿である。椀Ａでは口径12.5～17㎝の椀ＡⅠが主体的で、口径10.2㎝の小型の椀ＡⅡは１点。１は椀ＡⅡで底部から口縁部の全体にミガキ調整を施す。d木屑層から出土した。底部外面に墨書があるが、釈読できない。２から６は外面の全体にミガキ調整を施す椀ＡⅠ。７・８も椀ＡⅠであるが、外面全体をヘラケズリで成形した後、ミガキ調整は施さない。９は外面がナデ調整の椀ＡⅠ。10・11は口縁端部の内側に面をもつ椀Ｃ。外面は口縁端部のすぐ下を強くヨコナデし、以下はナデ調整を施すが、指頭圧痕を残す。数点の出土にとどまる。12は特異で口縁端部のヨコナデが非常に強く、明確な段をもち、口縁端部は外反する。底部は不調整。１点のみ出土した。杯B蓋は口径約25㎝の杯ＢⅠ蓋（13）がほぼ完形に近い状態で出土した。小型の杯ＢⅢ（16）が杯形に高台を付す形状であるのに対し、中、小型の杯ＢⅡ（15）、杯ＢⅠ（14）は口縁部が開いて椀形を呈する。16は口縁部外面にミガキ調整を施す。14は口縁部外面をヘラケズリで成形した後、ヨコナデ調整を施す。15は口縁部外面をヘラケズリ成形後、一部にミガキ調整を施す。

皿Ａは椀Ａとならんで供膳具のなかで主体的である。法量から口径21㎝前後の皿ＡⅠと口径16～18㎝の皿ＡⅡの２種類に分けられ、皿ＡⅠの方が器高が低い。数量的には皿ＡⅡが圧倒的に多い。18は底部外面のみミガキ調整を施す。19は底部外面をヘラケズリ成形後、外面全体にミガキ調整を施す。底部外面に針書きで「×」と記す。20～22は口縁端部を強くヨコナデするため、端部までケズリが及ばないが、基本的に外面全体をヘラケズリで成形し、ミガキ調整は施さない。このc0手法が皿ＡⅡのなかでも多い。皿ＡⅠは多くないが、23のように外面が不調整で指頭圧痕を残すものが多い。24は特異な例で、口縁部を強く２段にヨコナデすることで中段に稜線をもつ。底部外面は不調整で指頭圧痕を残す。底部内面に暗文をもち、外面に墨書があるが、釈読はできない。25は小型の皿Ｃ。数点出土したが、灯芯の痕跡を残すものはない。

28は高杯の杯部のみ。高杯は少なくとも５個体以上が出土しているが、杯部片には28のように外面に短いハケメを残すものが多い。杯部外面に「西大寺」と墨書する。29は脚部のみ残存。脚柱部内面に粘土の絞り目を残し、外面は下から上へのヘラケズリで八角形に面取りする。脚裾部の内外面にハケメ調整を施すが、外面は部分的にナデ消す。30は壺Ｂ。少なくとも２個体がある。全体にナデ調整で仕上げるが、体部外面に

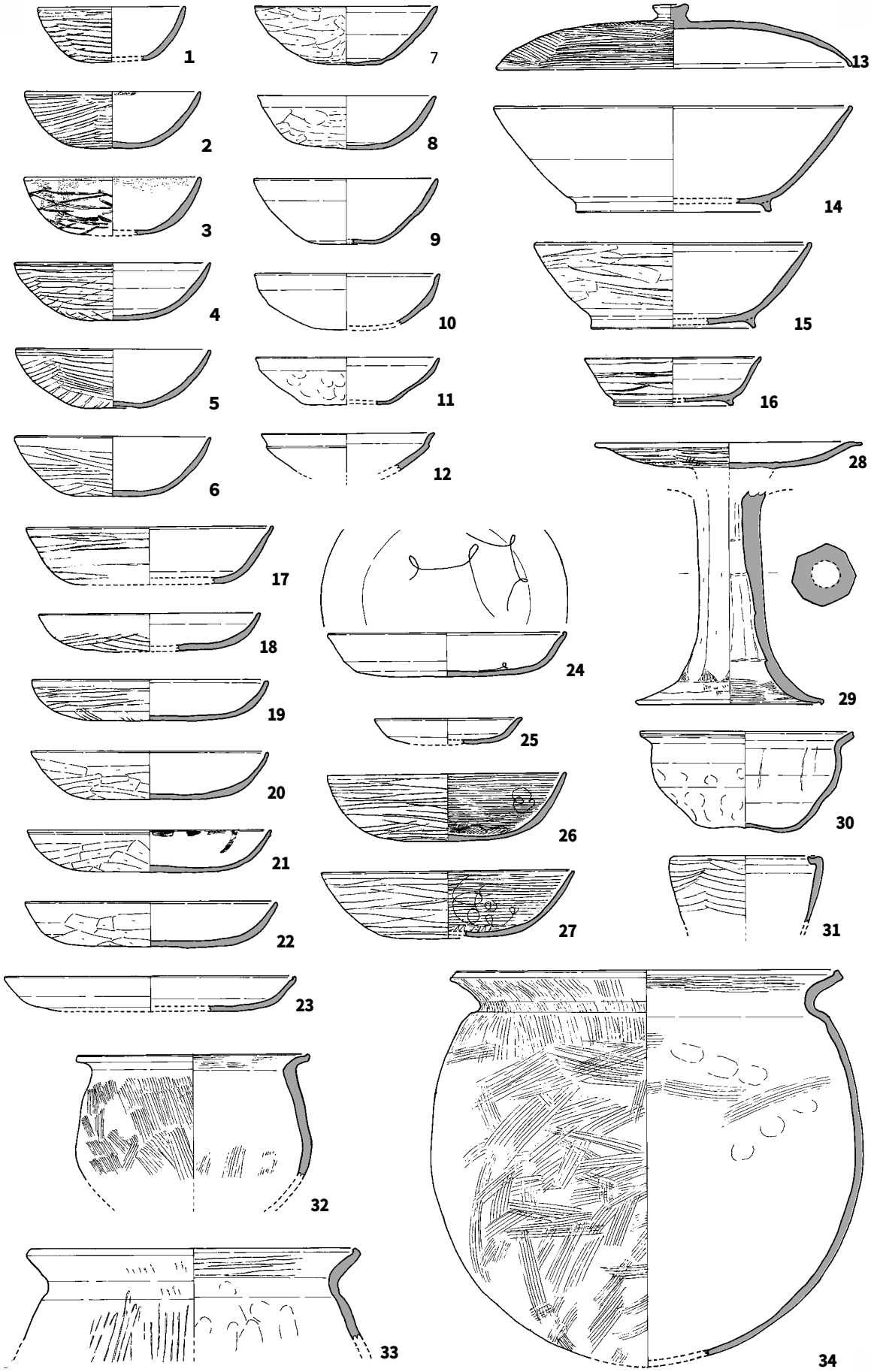


図22　SE950から出土した土師器・黒色土器　1:4

粘土の接合痕跡を残す。31は壺Ｅ。２個体が出土。32～34は甕Ａ。いずれも外面の下半を中心に煤が付着する。32は口径15㎝前後の甕ＡⅣ。内外面にハケメ調整を施すが、内面の上半はナデ消す。この法量の甕は少なくとも５個体ある。33は口径約23㎝の甕ＡⅡ。外面には粗いハケメが残る。32はもうひとまわり大きい甕ＡⅠで口径約27㎝。主体的なのは甕ＡⅠと甕ＡⅡである。

黒色土器（図22） 26と27は黒色土器の杯。いずれも外面は細かいヘラミガキ調整を施し、口縁部内面は横方向のミガキを施す。26は底部内面に一方向のミガキとそれを縁取るように螺施状のミガキを、27はジグザグのミガキを施す。いずれも口縁部内面に最後に付したと思われる花紋状の暗文を四方に配する。これらの黒色土器は調整の点からやや古い様相をもつようにもみえる。

須恵器（図23・図25・PL.13） 須恵器の主な器種は杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ａ、皿Ｃ、鉢Ｄ、壺Ａ蓋、浄瓶、甕Ａなどが出土した。供膳具は相対的に杯Ｂが少なく、杯Ａ、皿Ａ、皿Ｃが多い傾向にある。杯Ｂが少ないわりに杯Ｂ蓋の出土が多い。このなかで転用硯も数点含まれるが、比率は低い。なお、杯Ａと皿Ａは灰～灰白色を呈する胎土や明瞭な火襷を残す点で類似することから、特定の産地から運ばれた可能性が高い。

51は小型の杯ＡⅣ。重ね焼きの痕跡がある。52～54は口縁端部を丸くおさめる杯ＡⅢ。55・56も杯ＡⅢであるが、口縁端部が皿Ｃのように面をもつ。これらはいずれも灰白色の胎土で火襷と重ね焼き痕をもつ点が共通する。57～61は杯ＡⅡ。口径に対して器高が低く、皿に近い。やはり灰白色の胎土で火襷をもつものが目立つ。62・63は杯ＢⅢ。63は杯Ａに多くみられたような灰白色の胎土と火襷の特徴をもつが、こういった特徴をもつ杯Bは少ない。他はいずれも青灰色～暗褐色の堅緻な胎土で、自然釉がかかるものもある。64は杯ＢⅡ、65・66は杯ＢⅠ。67は皿Ｃ。供膳具のなかで個体数は多くない。蓋は杯類の個体数のバランスからみて、杯Ａと組み合うことも考えられるが、ここでは便宜上、杯Ｂ蓋として報告する。68～70は杯ＢⅢ蓋。数量的には少ない。71～78は杯ＢⅡ蓋で最も多い。器高の低いものと高いものがある。75は転用硯である。79・80は杯ＢⅠ蓋。

81・82は浄瓶の頸部。いずれも焼成堅緻で、赤褐色の胎土に自然釉がかかる。猿投産であろう。83は壺蓋。２点出土したが、うち１点は転用硯。84～86は鉢Ｄ。小型の貯蔵具としては鉢Ｄが主体的に使われていたのであろうか法量違いが各２、３点ずつ出土した。87は小型の甕Ａ。88は大型の甕Ａ（図25）。ほぼ完形に近い。底部片は礫層より、胴部から肩部・口縁部はe～b層にわたって出土した。出土状況と破片の大きさから、ほぼ完形に近い状態で井戸の礫層上に投棄され、井戸が埋没する過程か埋没後に土圧で割れたと思われる。口縁端部は断面が三角形で上に尖る形状。肩部から胴部にヘラ描きの落書きがある。

墨書土器（表３・PL.14） 出土した墨書土器は計103点。ここでは釈読できたものを表３に示す。出土傾向としてはa～b層より出土した墨書土器は11点あるが、小片で釈読できないものが多い。それに対して、c層以下の墨書土器は遺存状態が良く、釈読できるものには記載内容に一定の傾向を指摘できる。

供膳具、とくに須恵器杯Ａ、皿Ａなどに「西大寺」あるいは「西寺」が多く、約20点を数える。これらの墨書土器は西大寺が当時、「西寺」とも称していたことを示す重要な資料である。「西大寺」「西寺」の墨書土器は、いずれも残存状況が良好で、上層のa・b層からは出土していない。また、土器の種類にも、一定の傾向が指摘できる。供膳具全体は土師器皿Ａ・椀Ａと須恵器杯Ａが圧倒的多数を占めるが、「西大寺」「西寺」と記すものは須恵器に偏る。また、注目すべきは「西大寺弥」（表３　11・22）や「薬□〔師ヵ〕」（表３　58）と記したものである。これらが弥勒金堂や薬師金堂を指すものであるならば、これらへの配膳用の食器である可能性を想起させる。しかし、一方で「西大寺」あるいは「西寺」だけの記載の場合や「西大寺備」（表３　21）などが、どういった使われ方をしていたのか問題が残る。この点は、食器の管理や配膳の制度といった食堂院全体の理解に関わる問題として今後の課題としておきたい。

また、「綱」（表３　29・50）は僧侶の役職を示すのであろう。「同法」「同」（表３　10・30～36・52・53）は本

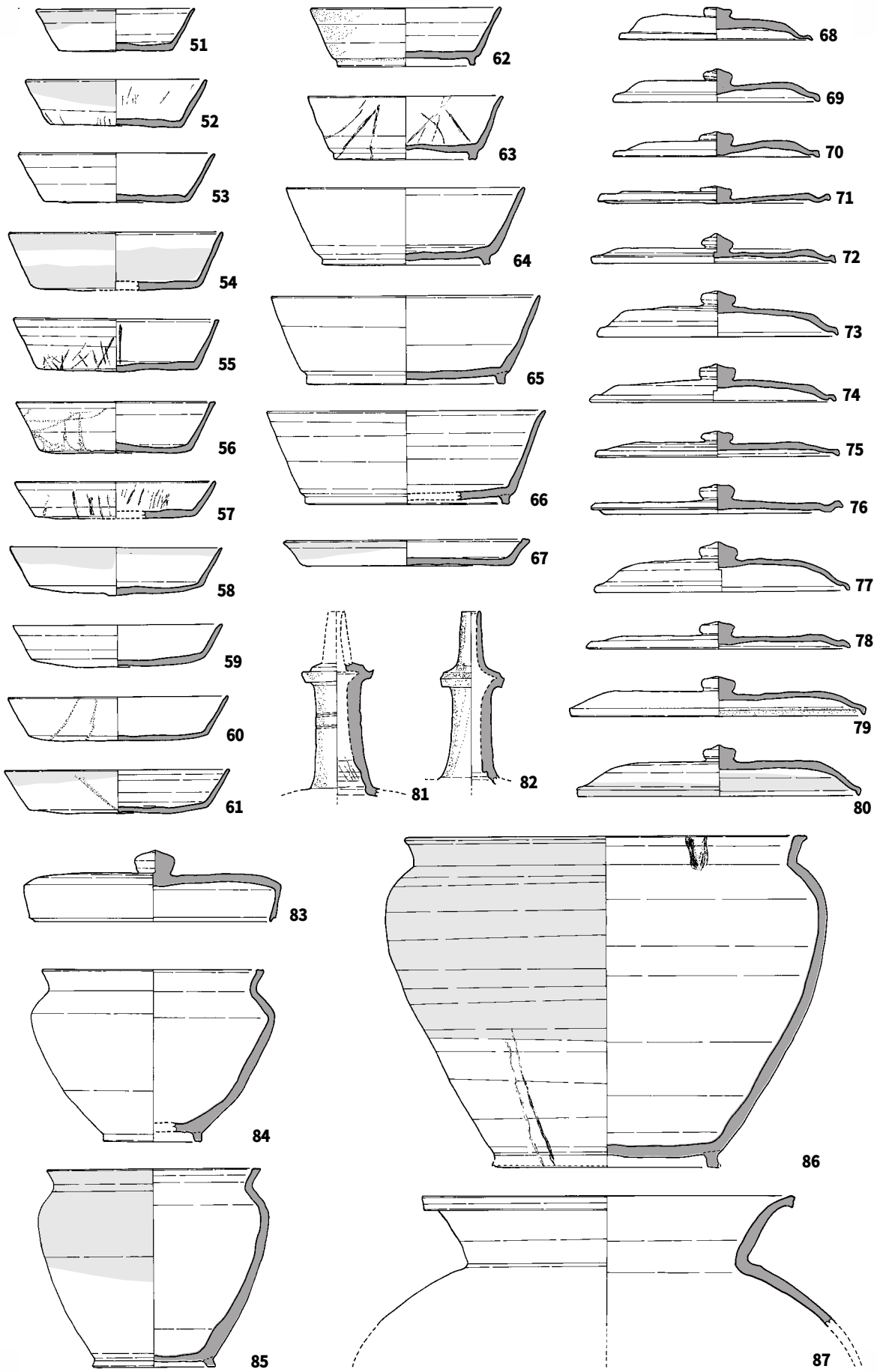


図23　SE950から出土した須恵器　1:4

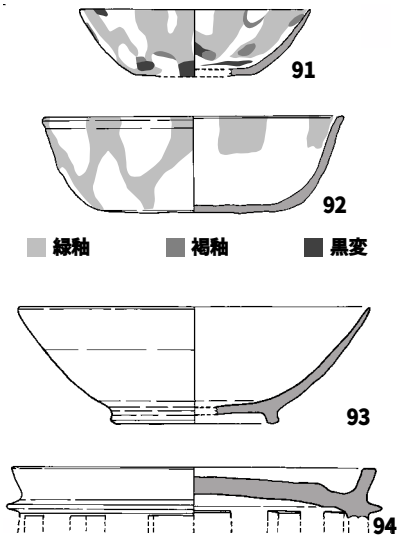


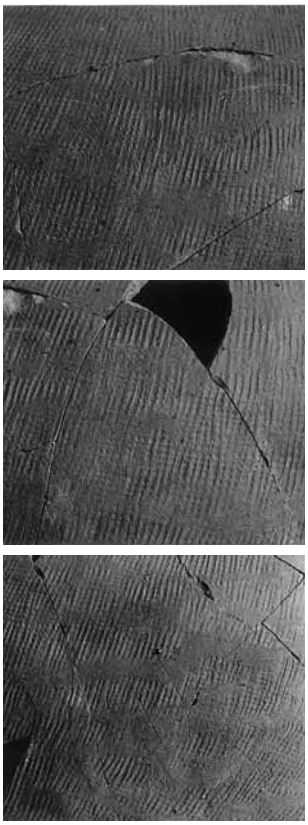
図24　SE950から出土した施釉陶器・陶硯　1:4

調査区の東側でおこなわれた元興寺03年調査でも同様の墨書土器が出土している。「同法」「同」は土師器皿Ａの底部に記すものが多い。

施釉陶器（図24・巻頭カラー）　奈良三彩の盤、杯、小椀が各１個体、緑釉椀が２個体出土した。91は三彩の小椀。風化し一部黒変しているが数ヵ所に褐釉の点描が確認できる。92は二彩の杯。外面はＶ字形に緑釉を施す。銀化が進んでいるため、表面は金属のような光沢であるが、緑釉部分は厚く、盛り上がったようにみえる。このほか、おそらく同一個体と思われる盤の口縁部片と底部片が出土している(巻頭カラー)。この底部片には径2.5㎝ほどの円形の窯道具の痕跡が４ヵ所に残る。類似した痕跡をもつ二彩盤が西隆寺の調査でも報告されている(奈文研1993『西隆寺発掘調査報告書』)。盤は口縁部内外面にＶ字状に、底部内面はＶ字を重ねた斜格子状に緑釉を施すもので、正倉院に残る磁皿に類例をみることができる。93は釉色が黄緑色の緑釉椀。高台は貼付け成形である。同様の緑釉椀はもう１点あり、いずれも猿投産であろう。

陶硯(図24)　圏足円面硯が１点出土。94は硯面から外堤部にかけて残存。青灰色を呈し、砂粒を多く含む胎土である。硯面の内面にヘラ描きがあるが、判読はできない。

製塩土器（図26・巻頭カラー・PL.15）　土師器、須恵器を上回る量の製塩土器が出土した。調査区一帯の包含層からも多く出土しており、調査区全体からの出土量は整理用コンテナで20箱を超える。これらの製塩土器で運ばれた塩が、どのように消費されたのかは推測の域を出ないが、漬け菜や醤などの食品加工に使われた可能性が考えられよう。



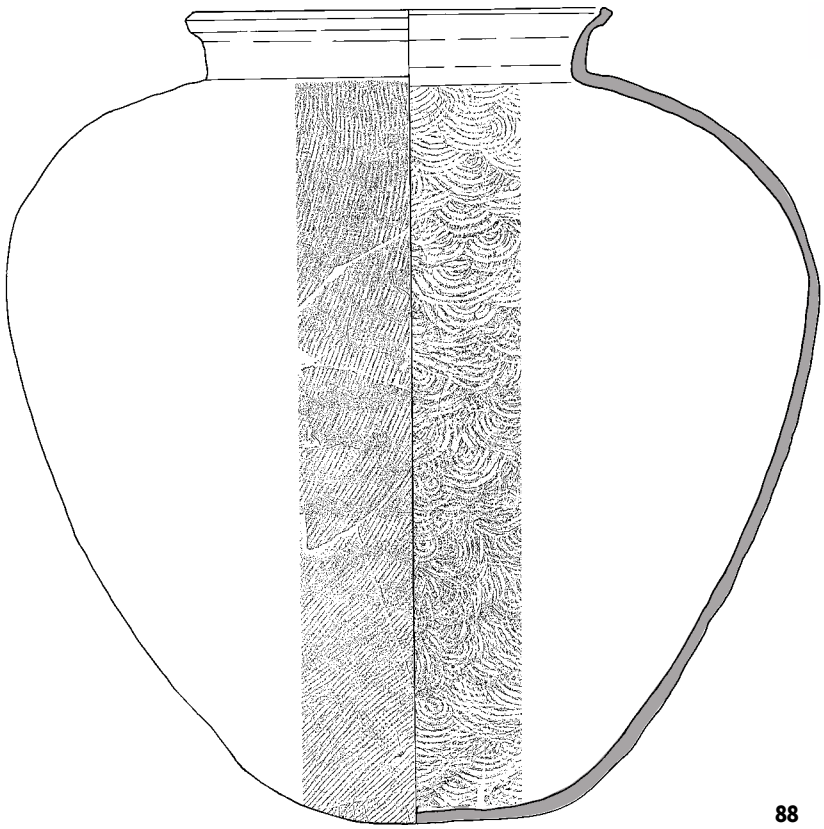


図25　SE950から出土した須恵器甕　1:6

表３　SE950から出土した墨書土器一覧

No.	中小地区	出土層名	土器の種類		部位	釈文	備考
1	IB70	b	土師器	皿A	底部外面	□□／唐唐	習書ヵ。他にも文字あり
2	IB70	c	須恵器	杯または皿	底部外面	□〔×ヵ〕	
3	IC70	c木屑層	須恵器	杯A	底部外面	西寺	
4	IB70／IC70	c木屑層／d木屑層	土師器	皿A	底部外面	西大寺	
5	IC70	d	土師器	杯または皿	底部外面	□〔四ヵ〕	
6	IB70	d	須恵器	皿A	底部外面	小曽比	
7	IC70	d	須恵器	皿A	底部外面	西寺	
8	IC70	d	須恵器	鉢D	底部外面	西寺	
9	IC71	d	須恵器	杯または皿	底部外面	西大寺	
10	IC70	d	土師器	杯または皿	底部外面	同	
11	IC70	d／e／礫層	須恵器	杯B	底部外面	西大寺／弥	
12	IC70	d木屑層	須恵器	皿A	底部外面	西寺	
13	IB70	d木屑層	須恵器	杯A	底部外面	西寺	
14	IB70／IC70	d木屑層	須恵器	杯または皿	底部外面	西寺	
15	IC70	d木屑層	須恵器	杯または皿	底部外面	西大	
16	IB70	d木屑層	須恵器	杯A	底部外面	西大寺	
17	IB70	d木屑層	須恵器	杯A	底部外面	西大寺	
18	IC70	d木屑層	須恵器	杯B蓋	頂部外面	西大寺	
19	IC70	d木屑層	須恵器	杯B	底部外面	西大寺	灯火器に転用
20	IC70	d木屑層	土師器	皿A	底部外面	西大寺	
21	IB70	d木屑層	須恵器	皿C	底部外面	西大寺備	内面にも墨あり
22	IC70	d木屑層	須恵器	杯B蓋	頂部外面	西大寺弥	
23	IC70	d木屑層／e	須恵器	皿A	底部外面	西寺	
24	IC70	d木屑層	須恵器	杯A	底部外面	西大□〔寺ヵ〕	
25	IC70	d木屑層／e／d	土師器	高杯	脚部内面	西大寺／□／□	
26	IB70	d木屑層	須恵器	杯A	底部外面	寺	
27	IC70	d木屑層	須恵器	杯B	底部外面	□寺	
28	IB70	d木屑層	須恵器	皿	底部外面	寺	
29	IB70	d木屑層	土師器	皿A	底部外面	綱	
30	IB70	d木屑層	土師器	杯または皿	底部外面	同	
31	IB70	d木屑層	土師器	皿A	底部外面	同	
32	IB70	d木屑層	土師器	杯または皿	底部外面	同	
33	IC70	d木屑層	土師器	杯または皿	底部外面	同	
34	IC70	d木屑層	須恵器	杯B蓋	底部外面	同	
35	IB70	d木屑層	土師器	杯または皿	底部外面	同	
36	IB70	d木屑層	土師器	皿A	底部外面	同	
37	IB70	d木屑層	土師器	皿A	底部外面	備	
38	IC70	d木屑層	須恵器	杯または皿	底部外面	□〔毘ヵ〕	
39	IB70／IC70	d木屑層	土師器	椀A	底部外面	厨□（記号）	
40	IC70	d木屑層	土師器	高杯	杯部外面	□（記号）	
41	IB70	d木屑層	須恵器	皿	底部外面	器	
42	IC70	d木屑層	須恵器	杯B	底部外面	三川	
43	IC70	d木屑層	須恵器	杯A	底部外面	□女	
44	IB70／IC70	d木屑層	土師器	杯B	底部外面	真／□〔大ヵ〕	漆付着
45	IC70	d木屑層	土師器	杯または皿	底部外面	九	
46	IC70	d木屑層	須恵器	杯または皿	底部外面	□（記号）	
47	IC70	d木屑層	須恵器	杯A	底部外面	□〔×ヵ〕	
48	IC70	e	須恵器	杯A	底部外面	西大寺	
49	IC70	e	土師器	高杯	杯部外面	西大寺	
50	IC70	e	土師器	杯または皿	底部外面	綱／□□	
51	IC70	e	土師器	椀A	底部外面	□〔綱ヵ〕	
52	IC70	e	須恵器	杯B蓋	頂部外面	同法	
53	IC70	e	土師器	杯または皿	底部外面	同	
54	IB70	e	土師器	皿A	底部外面	衆	
55	IC70	e	土師器	皿A	底部外面	𡚬	
56	IB70	e	須恵器	杯B蓋	頂部外面	北	
57	IB70	e	須恵器	杯B蓋	頂部外面	御	
58	IC70	不明	須恵器	杯または皿	底部外面	薬□〔師ヵ〕	

形態からⅠ類とⅡ類に分類した。Ⅰ類は筒形のもの、Ⅱ類は砲弾形のもの。数量的にはⅠ類が約７割、Ⅱ類が約３割を占める。Ⅰ類は口縁端部以下の２～10㎝ほどが被熱により黒変しているものが多く、Ⅱ類は黒変が全体に及ぶものが少なくない。以下、成形技法や胎土によって細分する。

①Ⅰ類　筒形

Ⅰ－a類は外面に指押さえ、内面はナデ調整の痕跡が残る。内面をヘラケズリするものはない。外面を押さえながら内面をなでつけて筒型に成形するのであろう。筒形の器体は断面楕円形を呈するものが多い。胎土に径１～３㎜の小粒の円礫を多く含む。内面は淡褐色、黄褐色、赤橙褐色、暗褐色を呈するものが多い。Ⅰ－a類が製塩土器全体の８割近くを占める。図26の101のように口縁部が肥厚して外反するものが多く、概ね口縁端部は幅狭く面取りする。また、Ⅰ－a類には103のように口縁部が外反せず、端部を幅広く面取りするものもある。ほとんどが口縁端部の数カ所に工具があたった痕跡を持つ。口縁部から胴部にかけての破片が大半であるが、底部片も２点確認した。102は底部のみの破片。筒形の胴部に円形の粘土板を貼り付けて押さえつけたため、丸みを帯びた形になる。屈曲部分の外面に粘土の接合線がみえる。他に底部の半分が残る破片があるが、粘土接合線は明確でない。

Ⅰ－b類も外面を押さえながら内面をなでて筒型に成形する。Ⅰ－a類に比べ、薄手で内面が白灰色～淡黄褐色を呈する。胎土に径１㎜以下の細かい鉱物を含み、小粒の円礫は含まない。量的にはⅠ－a類の１割にも満たない。104のように口縁端部は薄く引きのばし、面取りは施さない。Ⅰ－a類同様、口縁端部に工具があたった痕跡をもつものが多い。

Ⅰ－c類は型作りで筒形に成形するもの。105の１点のみ出土。胎土は精良。径１㎜以上の砂粒をほとんど含まない。口縁端部の下約７㎝の範囲に布目痕を残す。器壁の厚さは均一で、外面から押さえた痕跡が明瞭でなく、布目がつかない部分もあるため、粘土を布をかぶせた内型に押しつけて成形したというより、あらかじめ作った５㎜ほどの粘土板を内型に巻いて成形したようにみえる。布目が残る部分より下部には皺が寄ったような痕跡が残るが、内型の凹凸ではなく、粘土板を作る時の痕跡か、型からはずす際についた工具の痕跡であろう。口縁端部は下から上にヘラケズリして面取りする。

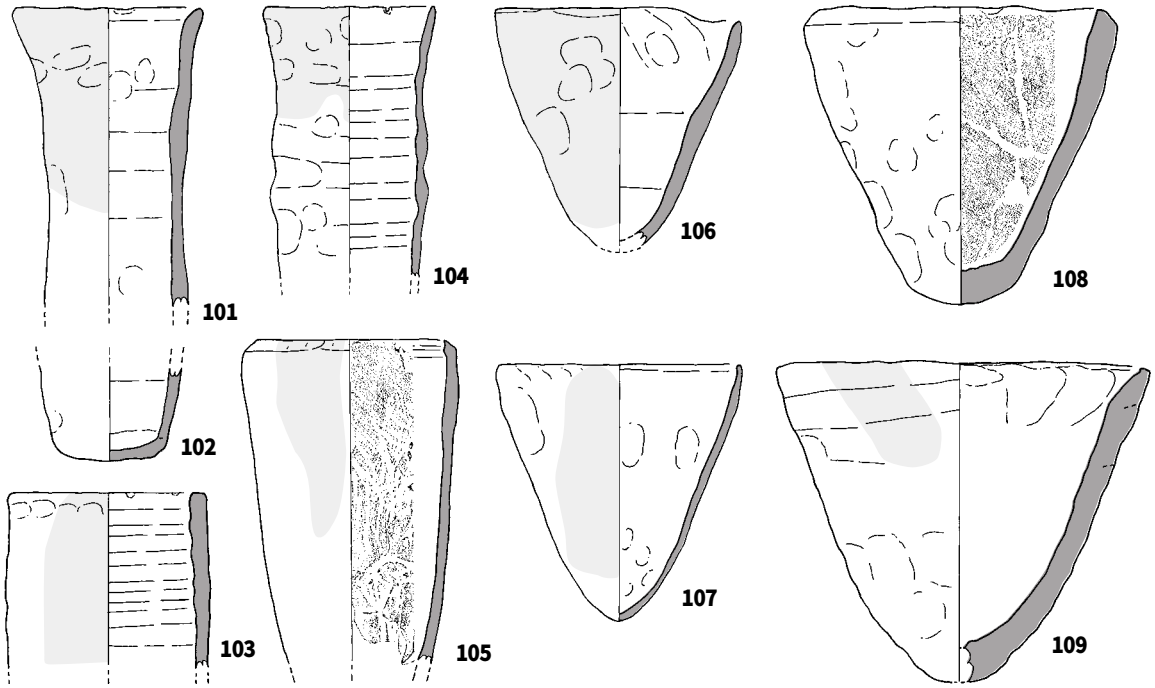


図26　SE950から出土した製塩土器　1:4

②Ⅱ類　砲弾形

Ⅱ－a類は比較的小型で器壁が１㎝程度のもの。内面が淡褐色～暗褐色を呈する。胎土に径１㎜前後の砂粒を多く含む。器体下半は内面にナデを残し、上半は器壁が薄くなり、やや開き気味で口縁部が内湾する。106は口縁部の内面に斜めに粘土を引き上げたような痕跡が残る。数量的にはⅠ－a類に次いで多い。

Ⅱ－b類は器形、法量がⅡ－a類に似るが、胎土は精良で砂粒をあまり含まず、器壁が薄い。色調はいずれも褐色。７は内面は縦方向のナデが残り、口縁部外面には斜め方向にナデが残る。個体数は少ない。

Ⅱ－c類は大型で厚手のもの。色調は淡紅褐色～赤褐色。胎土は比較的精良で、土師器のようであるが、径２～３㎜の白色砂粒を多く含む。外面に粘土紐を螺旋状に巻き上げた粘土接合線が残る。109は内面に口縁端部をつまみ上げたような指押さえが残り、端部は水平にヘラケズリする。内面を下から上に縦方向にヘラケズリするものもある。

Ⅱ－d類も厚手であるが、内面に布目が残る型作りのもの。色調はいずれも暗赤褐色で、胎土に径１㎜前後の砂粒を多く含む。108は外面は内型に粘土を押さえつけた痕跡をナデ調整する。内面の布目痕は瓦にみられる痕跡に似て、平織りの布を綴じ合わせた綴じ目をもつものもある。個体数はⅡ－a類に次いで多い。

この他にも、非常に細かい布目をもつものや、特徴的な胎土のものなど、これらの分類には属さない個体があるが、それらはいずれも小片で、全体量からみると非常に少ない。宮都周辺の消費地から出土する製塩土器がもつ多様性に比べると、これらの製塩土器は特定の産地から運ばれた可能性が高い。

（２）SK947出土土器

SK947に捨て込まれたとみられる土師器の皿が多く出土した（図27）。埋土には奈良時代のものも若干含むが、概ね９世紀後半から10世紀前半の土師器皿と黒色土器である。土師器皿はいずれも器壁が薄く、ec手法のものが主体的で、e手法のものもある。個体数は多いが、いずれも小片。それに対し、緑釉皿、灰釉皿、黒色土器A類の椀は残存状況が良い各１点が出土した。111は土師器の蓋。112は口縁部が外反する土師器の小皿。113・117～120は口縁端部外面を強くヨコナデする。底部は指押さえの痕跡が残るが、厚い部分はヘラケズリ成形する。口縁端部にまでヘラケズリが及ばないものもあるが基本的にec手法。118を除いて、口縁端部内面は内側に細く巻き込む。116は口縁端部が強く外反するタイプで、ec手法とは言い難いが、底部はヘラケズリする。114・115はe手法でヘラケズリは施さない。121は緑釉の皿。底部から直線的に伸びる口縁部は端部で小さく外反する。高台は貼付けの輪高台。残存する底部半分の高台の内側に、三叉トチンの痕跡が4.2㎝間隔で２カ所に確認できる。釉色は淡青黄色を呈し、青灰色の精良な胎土である。猿投窯の産品であろう。122は灰釉の皿。口縁部は薄く外反し、高台はやや内湾する。施釉は口縁部上半を浸し掛けしたあと、見込み部分には刷毛塗りする。123は黒色土器Ａ類の杯。口縁外面は端部より約15㎝が黒変する。底部内面にかすかにミガキの痕跡が確認できる。

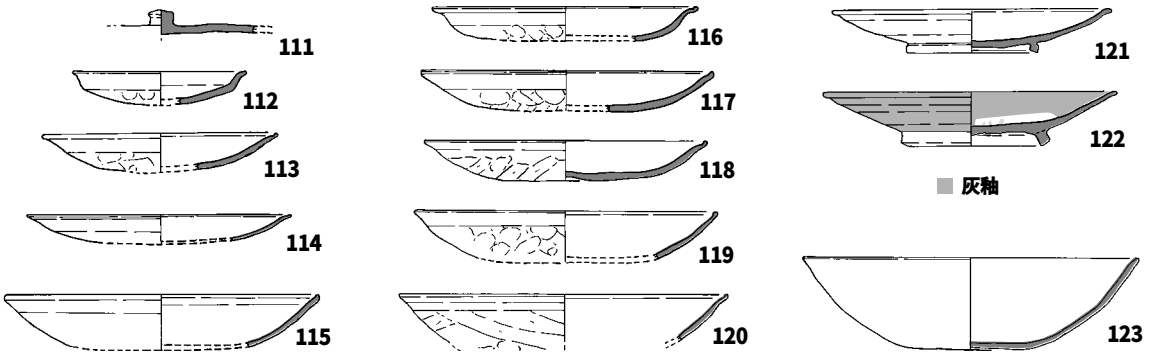


図27　SK947から出土した土器類　1:4

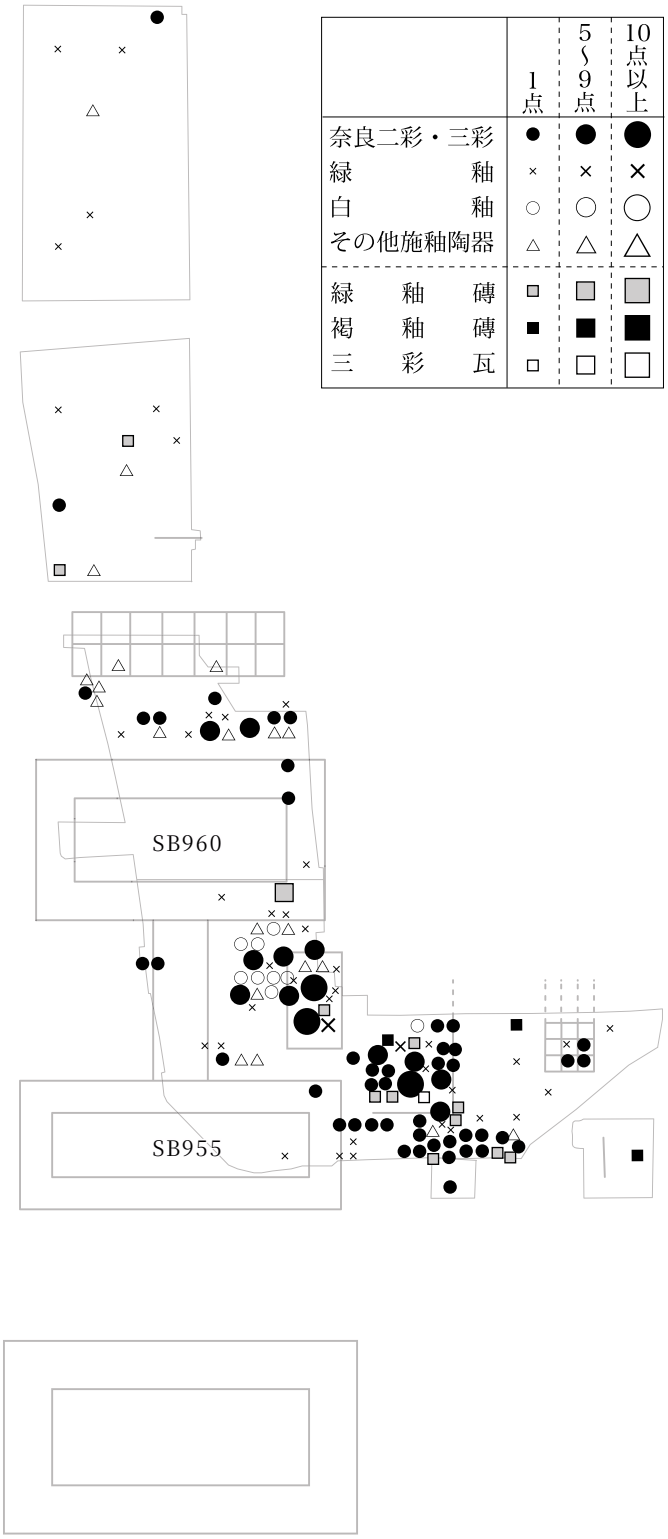


図28　施釉陶器・瓦磚の出土分布

（３）包含層出土施釉陶器・瓦磚

調査区全域から奈良時代の土師器・須恵器・製塩土器とともに、奈良三彩・白釉・緑釉陶器などが数多く出土した（巻頭カラー）。緑釉磚・褐釉磚・三彩瓦と合わせて出土地点を図28に示す。

出土が特に多いのは、大炊殿SB960の東南に広がる暗灰色土である。暗灰色土は奈良時代の土器が中心であるが、小片ながら10世紀に降る土師器皿、黒色土器、灰釉を含む包含層である。10世紀半ばの食堂倒壊後に形成された層とみられ、包含する奈良時代の遺物は二次的に堆積したものと思われる。しかし、中区と北区からも施釉陶器、瓦磚が出土しているが、緑釉については平安時代以降のものが主体的であり、奈良時代のものに関しては南区に偏ることがわかる。よって、それほど遠い場所より持ち込まれたものとは考えにくい。

暗灰色土から出土した施釉陶器は、奈良二彩の盤が最も多く、いずれも口縁部に面をもつもので、白地に緑釉をV字に重ねた斜格子状に施す。井戸SE950の資料に比べ、摩滅しているものが多いが、残存状態の良いものには緑釉部分がやや深い緑色を呈するものや黄緑色を帯びるものがあり、発色の違いが認められる。このほか、鉢、多嘴壺などの器種があるが、いずれも破片である。また、釉の残りは良くないが、白釉の盤も出土しており、これらが正倉院に伝わる施釉陶器の種類と類似する点は注目される。

施釉瓦磚類も暗灰色土の分布と重なるように出土しており、施釉陶器の分布と大きな差異は見出せないため、食堂院のいずれの建物で使われていたものかは推測の域を出ない。緑釉と褐釉の磚は、下面に段をもつ構造のものがある。おそらく仏像の台座か須弥壇の化粧として見える部分にのみ施釉したのであろう。同様の磚は西大寺の防災工事にともなう発掘調査でも出土している（奈良県教育委員会・奈文研1990『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』）。また、施釉瓦は１点のみ二彩の垂木先瓦が出土した。白釉、緑釉の彩色が逆の垂木先瓦が、やはり西大寺防災工事の発掘調査で出土しており、東塔、西塔周辺に集中することから、両塔で使われた可能性が指摘されている（同上）。

（４）SX930出土土器

SX930では須恵器甕の底部が据えられた状態で残っているものもあった（図30）。原位置をとどめる底部のなかに口縁部や体部の破片が落ち込んだ状態で検出したが、１つの甕に数個体分の口縁部片や体部片が混じるものがある。南区東南部一帯の包含層からも須恵器甕片が多量に見つかっており、耕作などによって破片が周囲に散らばったとみられる。今回の調査でSX930および周辺の包含層から出土した甕は、頸部内径が40㎝前後で、ほぼ同じ法量のものである。

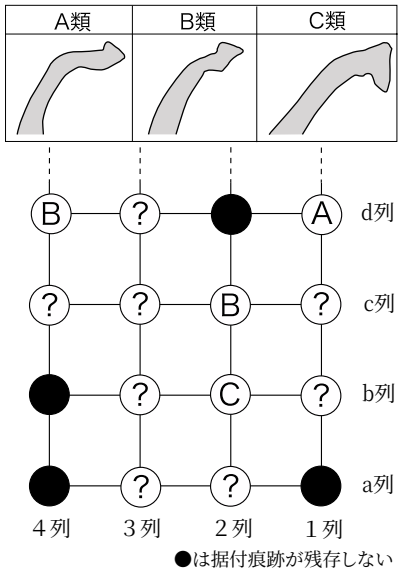


図29　SX930甕の口縁部形態と配列

口縁端部の形状は、大きく分けて３種類。個々の埋甕の位置を便宜上、図29のように記す。Ａ類は口縁端部が断面三角形に肥厚し、鈍く上に尖る。131は比較的口縁部の残りが良い状態でd－１の底部の中から比較的まとまって出土した。残存する底部片とも胎土・色調が類似することから、d－１に据えられていたとみられる。Ｂ類は口縁端部が上に折れ、外側に面をもつもの。残存状況の良いものはないが、数個体分の口縁部片がある。132はd－４の中から出土した。底部片と同一個体とみられること、周辺に破片が多いことからd－４のものとみられる。Ｃ類は口縁端部が垂直に下に折れることで外側に面をもつ。133はB類で頸部にもタタキが残る。図化した破片は包含層の出土ではあるが、b－２中の口縁部片と同一個体とみられる。Ａ類は美濃須衛窯、Ｃ類は和泉陶邑窯によくみられるもので、Ｂ類は基本的にＡ類の形態であり角度の違いとみることもでき、生産地の違いと短絡的に結びつけることはできないが、いずれにせよ、埋甕に使う甕は数種の産地のものを寄せ集めて使っていた様相が見てとれる。また、頸部が長いC類が混在することは、内容物による使い分けの視点からの検討も必要であろう。

また、SX930の据付掘形からは埋設の時期を示すような土器は出土しなかったが、残存する埋甕の底部の中からは明らかに別個体の甕の口縁部片、体部片と混在する状態で土師器皿、黒色土器が数点が出土した。これらの土器片と甕の底部には間層は確認できないため、最終的な土中への埋没の時期を示すと考えられるが、別個体の甕の破片と確実な上下関係は確認できなかったこと、数個体分の甕の破片と混在することから、ある程度、埋甕が割れた状態で混入したと考えざるをえない。

134と136はa－２から出土。134は土師器皿でe手法と思われるが、器表面は摩滅しているため調整はよく観察できない。135はd－３から出土した小型の黒色土器Ａ類の椀Ｂ。丸みを帯びた器体に隅丸三角形状の高台を貼りつける。内面は全体的に丁寧にミガキを施す。外面は口縁端部の下１㎝ほどが黒色を呈する。136も黒色土器Ａ類で、やや大きな椀Ｂ。胎土はざらついた感じで、器表面の残りがよくないため、ミガキは明瞭に観察できない。高台の形状は135に似る。

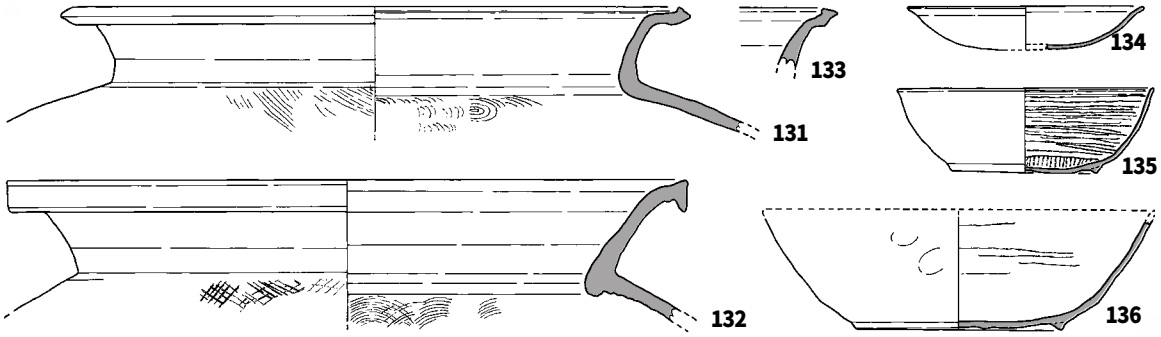


図30　SX930から出土した須恵器甕・黒色土器・土師器（131～133は1:6　134～136は1:4）

４　金属製品・木製品

（１）金属製品

金属製品には鉄釘、鉄槍鉋、鉄刀子、銅火箸、鉄金具などがあるが、全体に数は少ない。鉄釘が比較的多いが他は少なく、特に銅製品は火箸のみである。金属製品は各種遺構や包含層から出土したが、特に井戸SE950井戸枠内からが多く、溝、土坑、柱穴などからも少量出土した。１・２は銅火箸。１は腐蝕が著しく全体が黄銅鉱化して金色を帯びるが、完形品。ただし、先端から3.7㎝のところで折れている。元部は、頂部がいわゆる「未敷蓮華」形を呈し、その直下に１条の凸帯、さらにその下に17条の螺旋状刻線を施す。その先、先端までは装飾はない。先端は面取りする。頂部の花弁は３つ、螺旋線刻はきわめて細く整っている。長さ23.5㎝、身部直径3.5㎜、頂部直径４㎜。SE950井戸枠内ｄ木屑層出土。２は腐蝕が著しく、表面から１㎜の深さまで緑青化している。途中３カ所で折れ、先端部はかなりの長さが失われる。頭部は半球形に作り身より一回り大きい。残存長16.7㎝、身部直径3.8～４㎜、頭部直径５～5.2㎜。SD941・942出土。銅火箸はこのほかにSD942から身部直径３～3.3㎜の別の２個体分（１対か）が出土。３は木製柄の付いた鉄槍鉋。穂の先端部が欠失するがほぼ完形。穂先はかなり短い。柄は元部小口と、穂先下面にそろえて先端下面を面取りする。樹種はサカキか。穂先の反りは約10度。残存長16.6㎝、柄長径1.4㎝、同短径1.2㎝、穂先残存長6.1㎝、同幅１㎝。SE950井戸枠内ｅ層出土。４・５は鉄刀子。いずれも残りは良くないが、４は木柄が一部残存。４は残存長16.2㎝、刃部長10.1㎝。SE950井戸枠内d層出土。５は両関。先端を欠失し、刃が摩滅する。残存長9.5㎝、同幅９㎜。SE950井戸枠内d木屑層出土。６～８は鉄釘。６は方頭。頭部の一部と脚部を失い、基部は外圧で曲がる。残存長12.3㎝、基部横断面は8.5㎜角。SE950井戸枠内d木屑層出土。７は大型の円頭釘で頭部のみ残り、基部横断面は10㎜×12㎜の長方形。SB951柱穴出土。８は小型の平折釘ないし合釘。頭部を失う。残存長2.8㎝、基部横断面は2.5㎜×３㎜の長方形。SE950井戸枠内b層出土。９はU字形の金具。両端を薄く叩き延ばし、そこに方孔を穿ち、中央で曲げたもの。いま一端は破損している。方孔に軸を通して用いたとみられ、あるいは釣瓶の吊下金具か。残存長7.1㎝、残存幅3.6㎝、屈曲部厚さ4.5㎜。方孔は約７㎜角。SE950井戸枠内ｅ層出土。

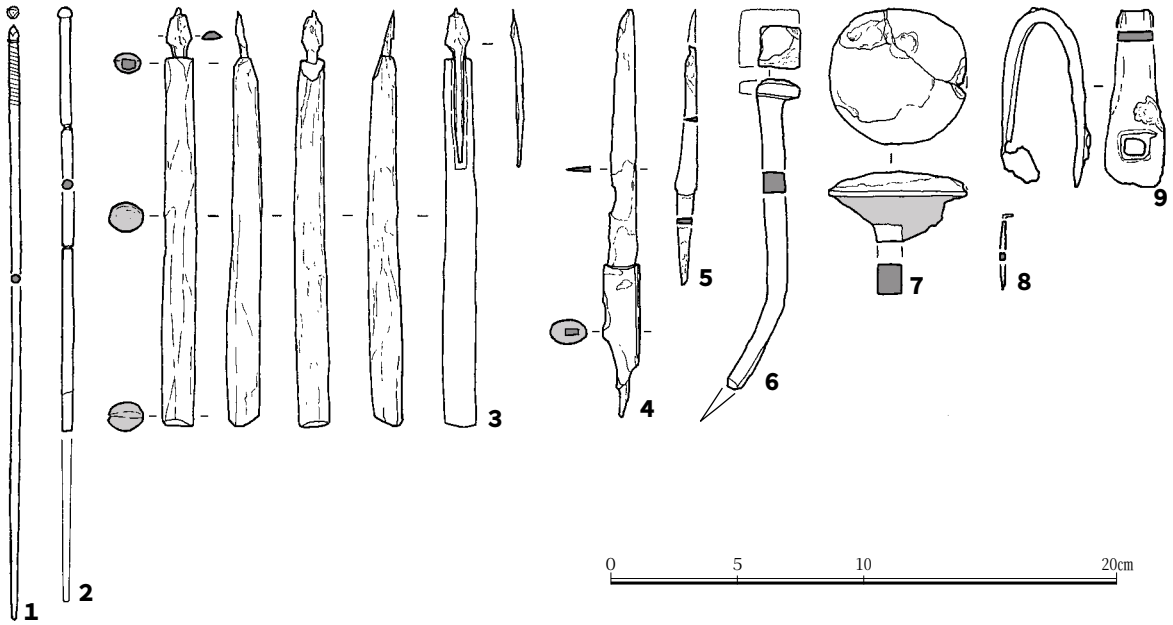


図31　SD941・SD942・SE950・SB951出土金属製品　1:3

（２）木製品

木製品の多くは井戸SE950から出土した。食事具、服飾具、容器、祭祀具、部材など種類は多岐にわたるが、点数は箸を除いて多くはない。これら製品以外に板ないし角材断片、削片、樹枝などがある。削片類は細長い細かなものが目立ち、建築部材等の大型品加工の際に生ずる大片は僅かである。細かな削片はたとえば箸などの小型品製作にともなった可能性が高い。箸の点数が多いことはそれと関連し、失敗品などを含むと思われ、制作現場で削片とともに芥屑として一括され井戸廃棄時に遺棄されたものが多数あると思われる。一方、点数の少ない他の製品は芥屑として一括して遺棄されたものもあろうが、井戸使用時に誤って落下したものも含まれると考えられる。

１は連歯下駄。歯幅は台の幅にそろう。歯は著しく摩耗し後歯は失われる。前壺は前歯の前中央、後壺は後歯の前に穿たれる。残存長18㎝、幅8.6㎝、残存高2.8㎝。ヒノキ板目材。SE950井戸枠内d層出土。２は部材。一端に枘を削りだし、その直下に枘孔を穿つ。枘側と反対の小口面は使用により摩滅。脚部か。残存長19.1㎝、幅4.7㎝、厚さ1.3㎝、枘の出２㎝、枘孔幅１㎝、同高1.5㎝。ヒノキ。SE950井戸枠内d層出土。３は大型円形曲物底板。全体の４分の１程が残存。表面に幾筋かの刃物傷が残る。側面７カ所に直径２～５㎜の木釘孔があり、そのうちの２孔は打ち直し。推定直径39.5㎝、厚さ0.9㎝。ヒノキの柾目板材。SE950井戸枠内ｃ木屑層出土。４は小型円形曲物底板。土圧で歪む。側面には木釘痕が６カ所あり、うち３カ所に木釘が残り他は孔である。一面に「同法」の墨書がある。墨書は後世の刃物傷などより古い。直径13.4～14.2㎝、厚さ６㎜。ヒノキの柾目材。SE950井戸枠内d層出土。５は挽物皿。全周の５分の１程度の小片。口縁部内外と内底面に轆轤整形痕が残り、外底面は剥離面のまま。推定復元直径21㎝、残存高1.4㎝、底部厚さ５㎜。ヒノキ材を横木取り。SE950井戸枠内d木屑層出土。６は刳物の匙。柄元を失い、身は口唇部が一部欠失し、内面の半分ほどが黒色に炭化する。基部から取った樹枝を利用し、基部を身に先端を柄に加工。残存長14.9㎝、残存高10.8㎝、残存幅7.7㎝、身の高さ3.4㎝、身の深さ1.7㎝。シイノキ属。SE950井戸枠内ｃ層出土。７～10は杓子。７はやや大型。柄元を失う。加工は身の先端から柄元に向かって削る。身の先端は使用によって摩耗、片減りする。残存長27.7㎝、身幅5.9㎝、身残存長９～9.5㎝、身厚さ３～５㎜、柄幅３㎝、柄厚さ５㎜。スギの柾目板材。SE950井戸枠内ｃ木屑層出土。８は幅広で、ほぼ完形品。身の後端から柄にかけて角を面取りする。先端は使用により両面が摩滅。残存長26.4㎝、身部幅7.4㎝、厚さ６㎜。ヒノキ板目材。SE950井戸枠内木屑層出土。９は半截し半分が欠失、かつ柄元も折損。やや粗製で輪郭は不整形。残存長18.1㎝、残存幅2.9㎝、厚さ３㎜。スギ板目材。SE950井戸枠内d木屑層出土。10は柄元と身先端を失う。残存部の形態が７に相似する。残存長13.1㎝、幅3.7㎝、厚さ2.5～３㎜。スギ板目材。SE950井戸枠内d層出土。11～13は箸。いずれも表面を粗く削り成形したもので、横断面が不整な七～八角形を呈する。先端が元より僅かに細い。11はほぼ完形で、長さ25.3㎝、長径７㎜、短径５㎜。ヒノキ。SE950井戸枠内ｃ層出土。12は２カ所で折れるが、ほぼ完形。長さ24.2㎝、直径５㎜。スギ。SE950井戸枠内b層出土。13も折れているがほぼ完形で、長さ21.5㎝、直径約６㎜。ヒノキ。SE950井戸枠内ｅ層出土。14は栓であろう。八角柱状で、先端部約３分の１は使用により摩滅し稜が失われたのであろう。残存長4.9㎝、残存直径1.8㎝。スギ。SE950井戸枠内ｃ層出土。

15は用途不明の火箸状木製品。身の先端部を欠失。長い身は横断面が不整な八角形を呈し、短い頭部は身部よりひとまわり大きな横断面長方形を呈する。頭部は、頂部が四角錐をなし、その下に３条の刻線を巡らせて４層の塔状となる。用途不明であるが、あるいは散杖のようなものか。残存長31.2㎝、身部直径８㎜、頭部長２㎝、頭部幅1.1㎝、頭部厚さ８㎜。スギ。SE950井戸枠内ｃ木屑層出土。16・17は斎串で、17はCⅢ型式。16は縦に半截して半分が失われ、下端部も欠損するが、CⅢ型式であろう。16の切込は３回程度。残存長34.2㎝、残存幅2.3㎝、厚さ３～４㎜。ヒノキ。SE950井戸枠内ｅ層出土。17の切り込みは４回程度。長さ24.4㎝、幅3.7㎝、厚さ２㎜。ヒノキ。SE950井戸枠内ｅ層出土。18は腐蝕、欠損の著しい塔形あるいは相

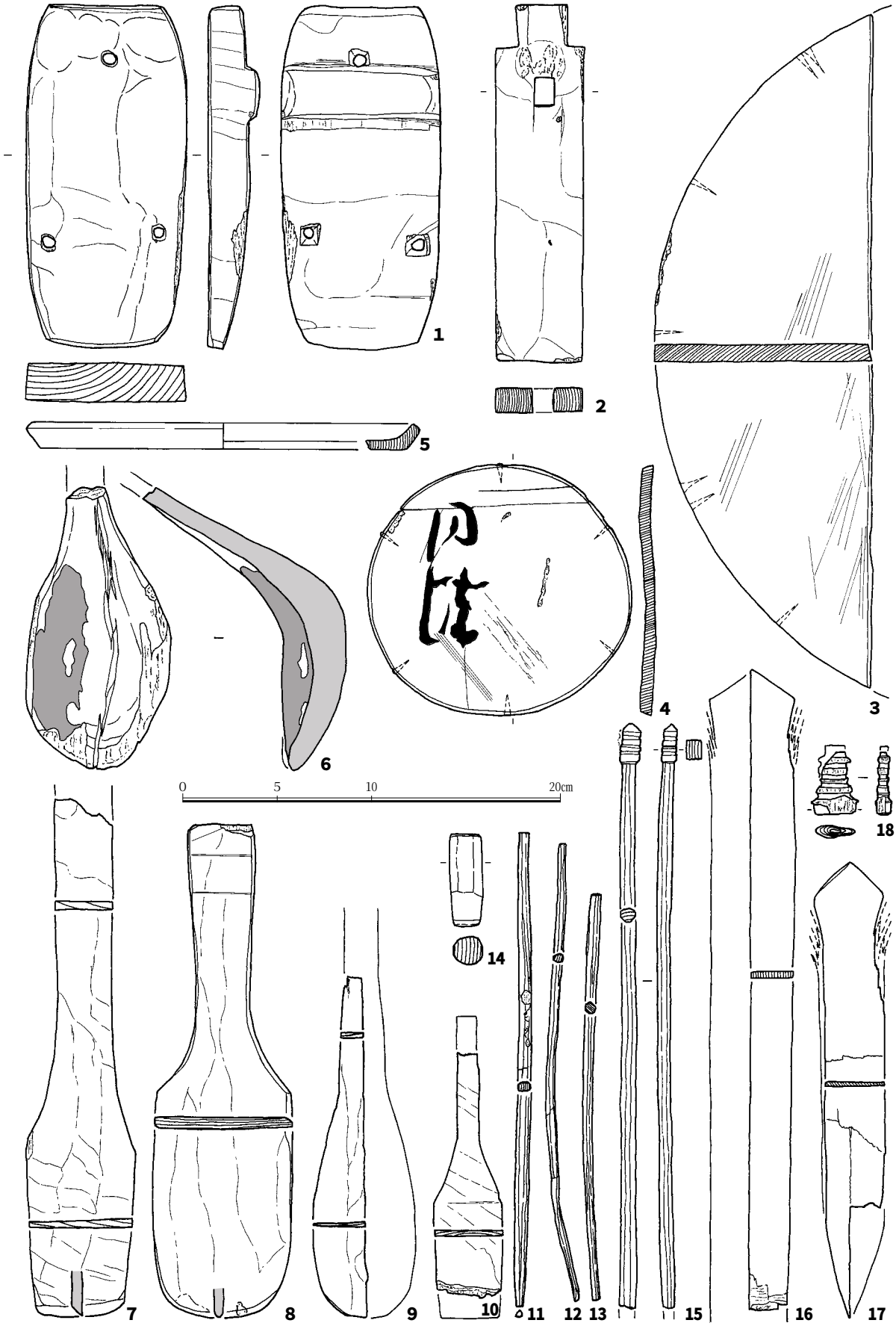


図32　SE950出土木製品　1:3

輪形の扁平な小型品。５層で、頂部は欠失。横断面は細長い楕円形。基部が幅広く頂部はやや小さい。基部は別材にはめ込むためであろうか、先細りとなっている。残存高3.3㎝、幅2.5㎝、残存厚８㎜。樹種不明の広葉樹。SE950井戸枠内ｅ層出土。

（３）SE950井戸枠

SE950井戸枠は５段分合計20枚が残存するほか、e層直上からも井戸枠とみられる部材が１点出土した。以下、井戸枠の段数は、下から１段目、２段目と数える（図37）。

寸法と構造　１～３段目は、長さ240.5～268.4㎝、幅57.3～62.1㎝、厚さ8.6～12㎝。四隅の組手は５枚組とし、上端と下端の枘の成はその他より小さい。１段目と３段目は、南・北材の両端を３枚枘、東・西材の両端を３枚枘とする。２段目は東材の両端を２枚枘、西材の両端を３枚枘とし、南・北材は東端を３枚枘、西端を２枚枘とする。４段目は、長さ257.7～268.5㎝、幅25.5～26.5㎝、厚さ6.5～10.8㎝。四隅の組手は３枚組で、枘は北・南材を２枚枘、東･西材を１枚枘とする。北材の外面の墨書部分のみ、墨がよくのるように槍鉋で平滑に仕上げている。５段目は、長さ257～265㎝、幅23.5～28.4㎝、厚さ6.1～8.9㎝を測る。上半分の劣化が著しいが、４段目とほぼ同じ形状・構造に復元される。

なお、井戸埋土から出土した井戸枠は、５段目以上に劣化が著しいものの、当初は４段目と同形状であったと考えられる。すなわち、井戸SE950は、下３段を幅の広い部材で組み、４段目から上部は幅の狭い部材で組んだと推測される。また、下３段は板厚が大きいが、これは土圧を考慮した結果であろう。

木材の加工　１～４段目の部材は、表面に加工過程の痕跡を残す。外面は、丸太より板状に割り裂いた痕跡をもち、さらに釿で加工する。使用した釿は丸刃で、上２段は刃幅約60㎜、下３段は刃幅約90㎜のものを主体とし、木目方向に打つ。内面は槍鉋で木目方向に仕上げ、枘差部分と太枘穴部分は鑿で加工する。なお、すべての材において建築部材などから転用された痕跡は認められなかった。

１～３段目の部材は、端部に運搬用の桟穴を残すものがある。桟穴は１辺につき１・２カ所あけられている。なお、１・３～５段目は枘差が両端で同形であるのに対し、２段目は南・北材の枘差が両端で異なるが、これは加工の際、本来は両端を同形にするところを、桟穴をさけるために変更したものと推測される。

１段目北材の木口面中央には墨線が引かれる。墨線から材端までの寸法は両端でそれぞれ等しいため、これらの墨線は、木材の心を示す際に記す心墨と考えられる。

上下を固定する太枘の枘穴は、長辺5.8～6.7㎝、短辺３～4.3㎝。部材の中央に設けられ、井戸内面からの寸法は部材の厚さがふぞろいであるにもかかわらず約３㎝と等しく、上下段で井戸の内面をそろえるために計画されている。太枘は、長さ約10.9㎝、幅5.7～６㎝、厚さ2.8～3.0㎝で、ほぼ同一の寸法を測る。上半部分のみを鑿で削り調整しているものがあることから、連結する下段の枘穴に太枘を差し込んでから、上段を組んだと考えられる。

線刻と打刻印　１～３段目の外面には、線刻や打刻印が認められる。線刻は葉模様や直線などで、打刻印は「西」「寺」の文字を刻印したものと、〇の中に文字を入れる〇字形とに分類される。〇字形は「大」「下」「十一」と刻み、「大」と「下」は線の太さから２種ずつに分類される（表４）。上下段での打刻印の関係が認められないこと、４・５段目の部材には打刻印が確認されないことなどから、これらの機能についてはなお検討が必要である。なお、木材の打刻印は、認証印や検定印の機能を有していた可能性が指摘されている（鐘方正樹2003「井戸枠部材の打刻印と木材生産」『井戸の考古学』同成社）。

表４　外面の線刻および打刻印の数

	種類と数
３段目北	「大」（太）×２
３段目東	「西」×２
３段目南	「下」（太）×２
３段目西	「西」×２、「寺」×１
２段目北	なし
２段目東	線刻、「西」×２、「寺」×２、「下」（細）×５
２段目南	線刻、「下」（太）×５
２段目西	線刻、「西」×２、「寺」×２、「大」（細）×５、「下」（太）×５、「十一」×１
１段目北	線刻、「下」（細）×５
１段目東	「西」×２、「寺」×２、「下」（太）×３
１段目南	線刻（葉模様）
１段目西	「下」（太）×５

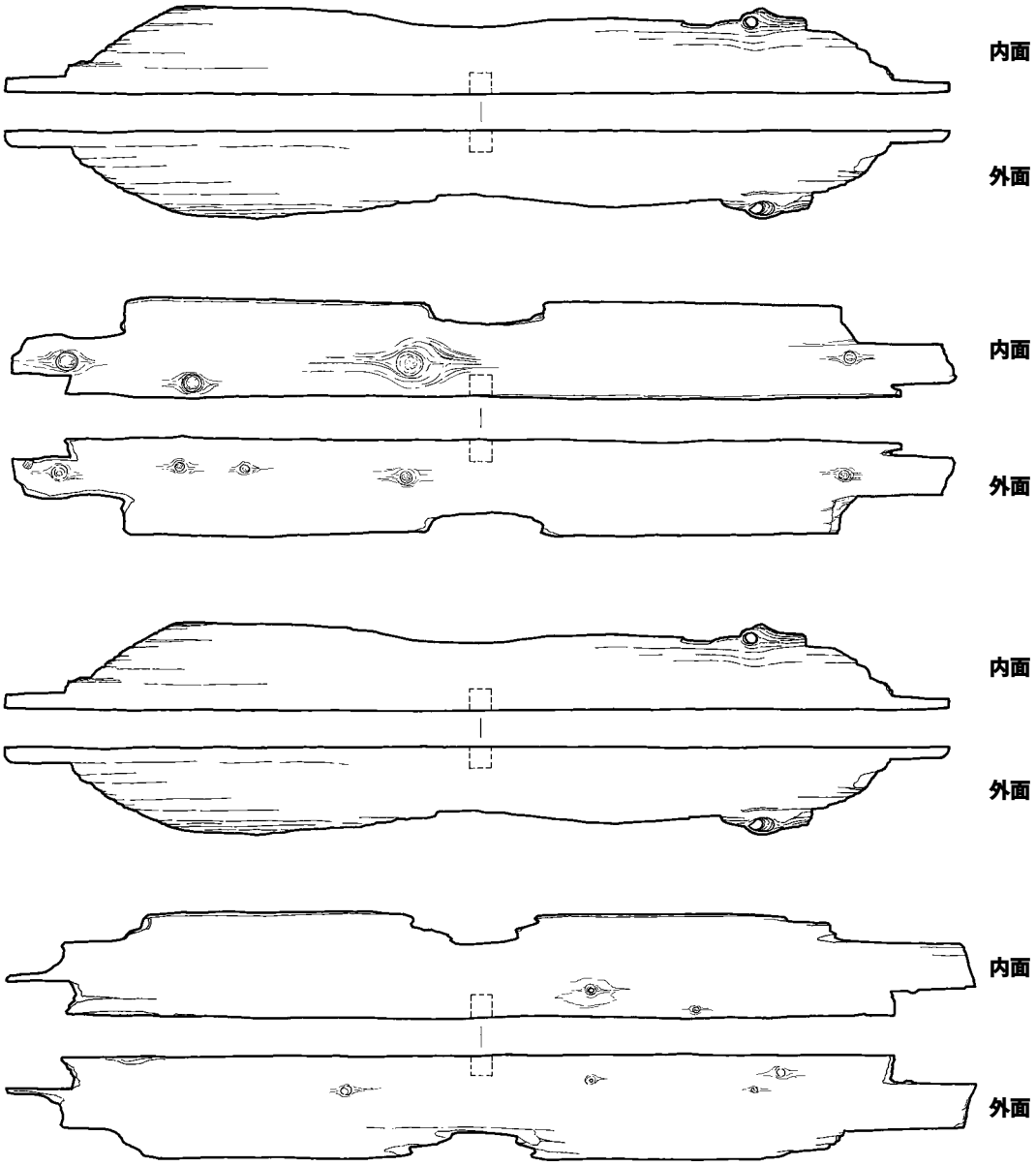


図33　井戸枠実測図　1:20
上から順に５段目北・東・南・西

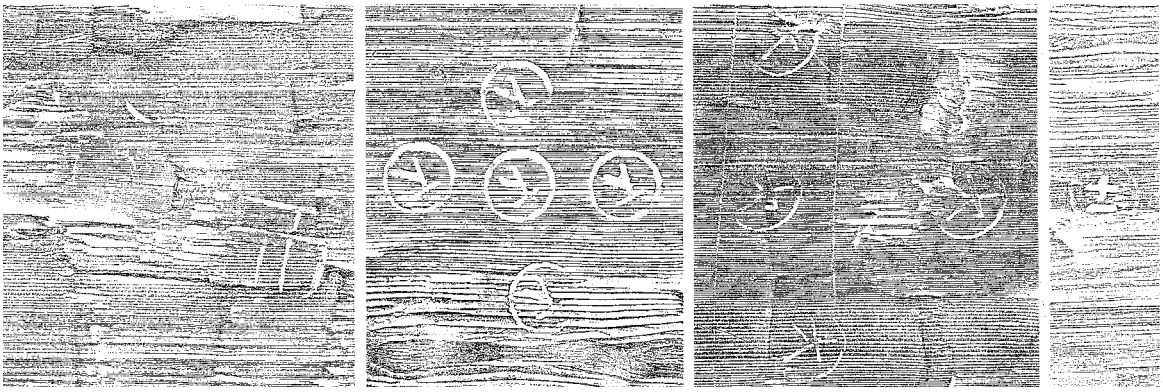


図34　外面の打刻印
「寺」「西」・「下」（太）・「大」（細）・「十一」（いずれも２段目西）

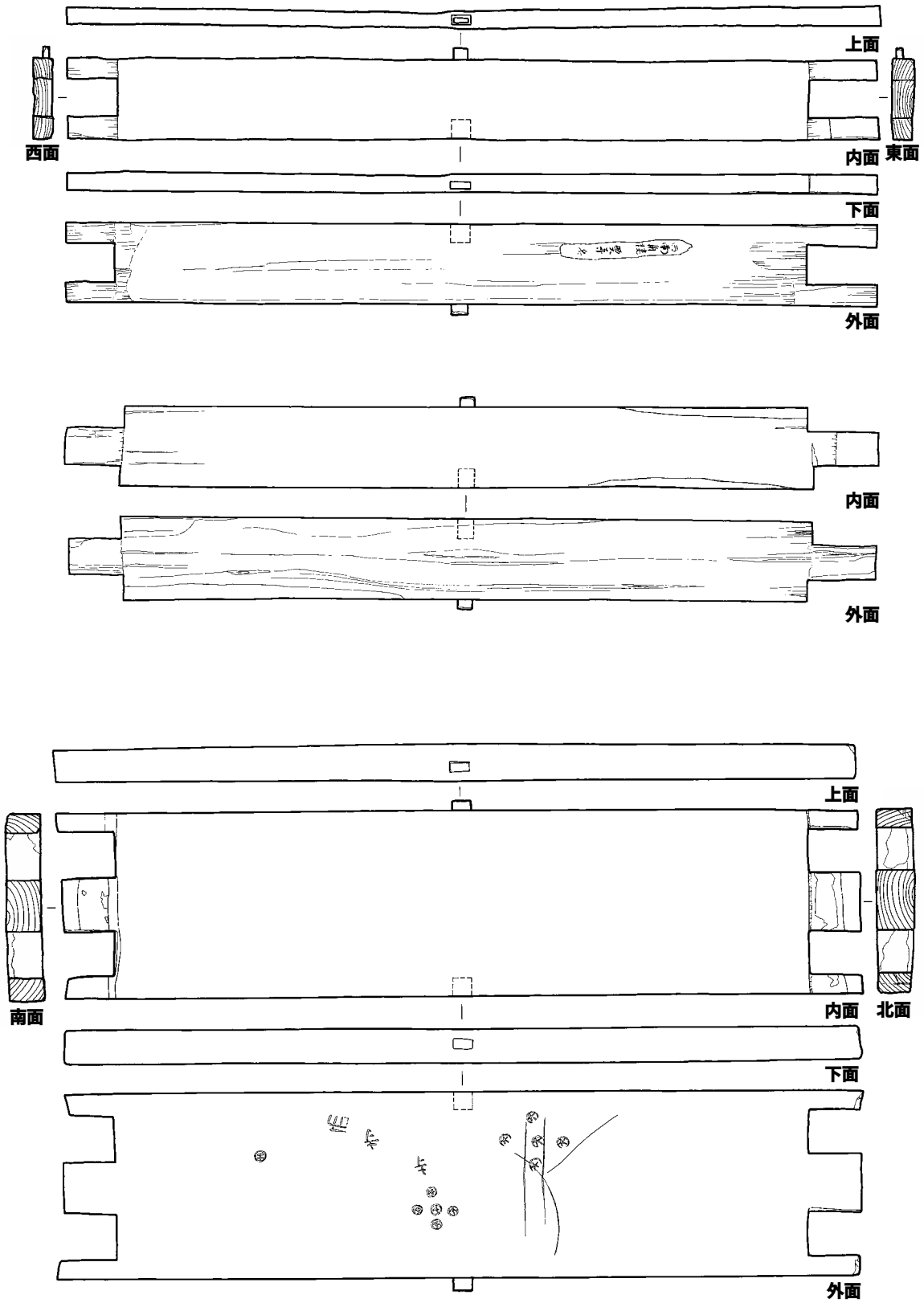


図35　井戸枠実測図　1:20
上から順に４段目北・東・２段目西

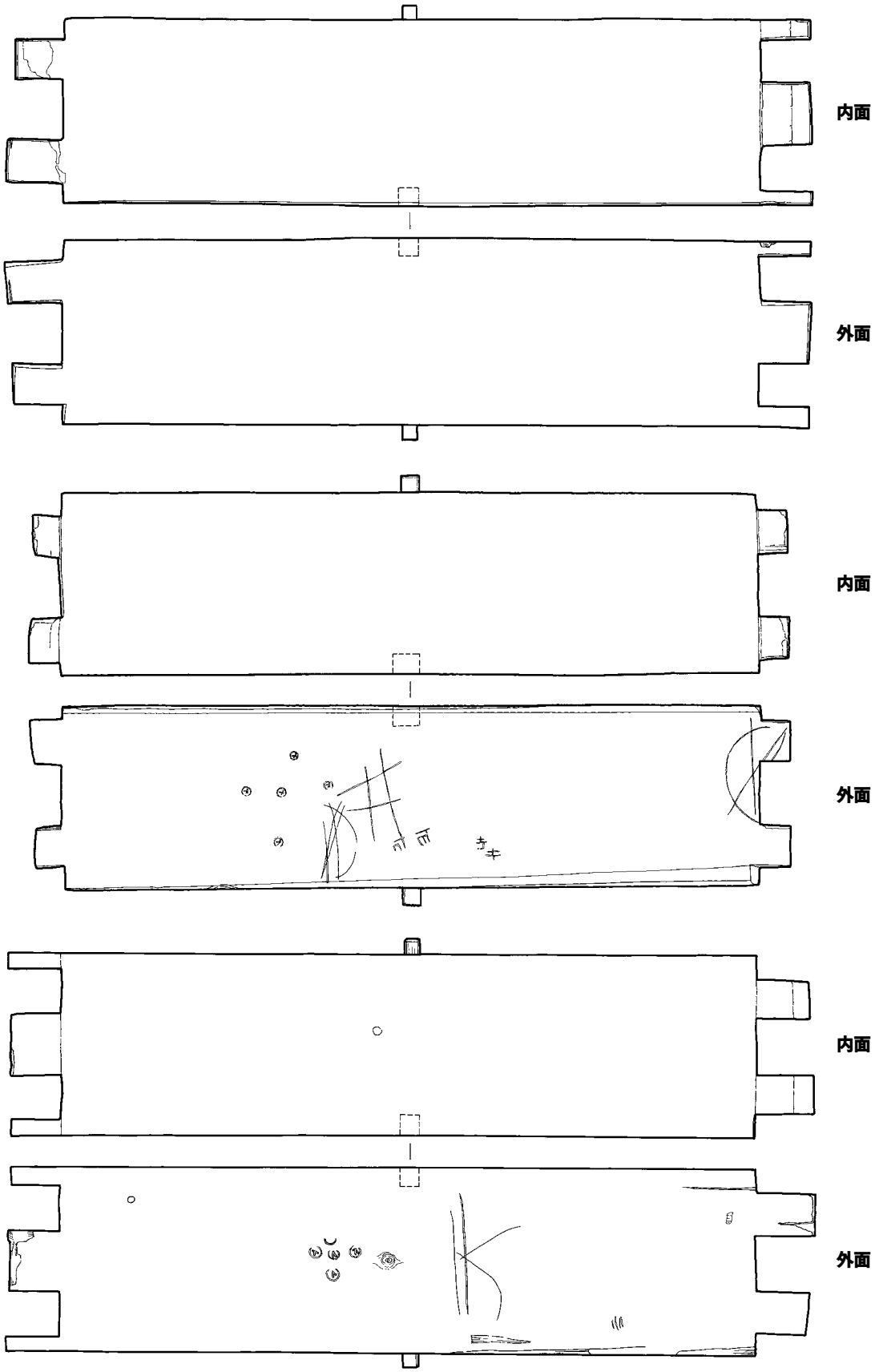


図36　井戸枠実測図　1:20
上から順に２段目北・東・南

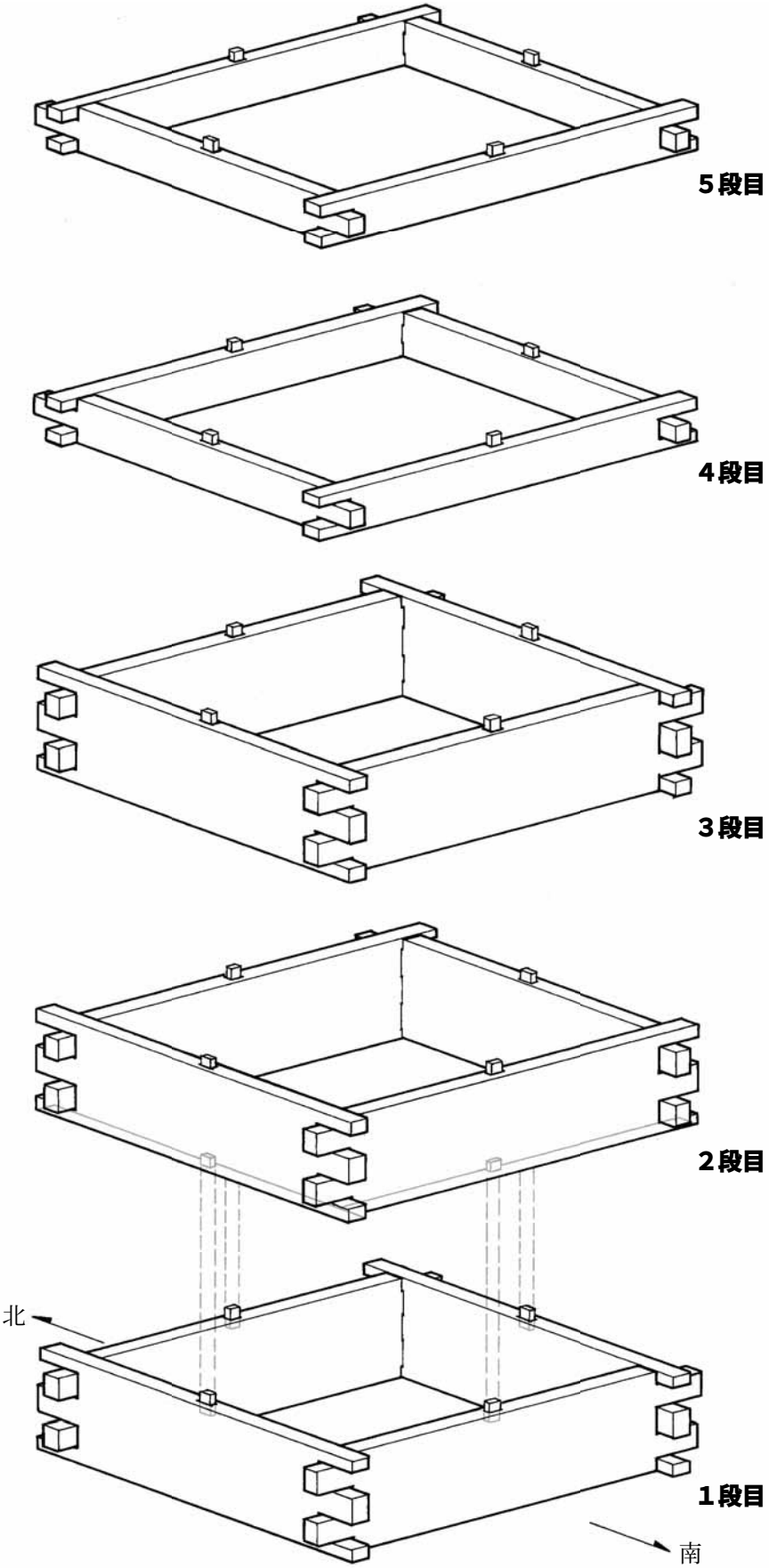


図37　SE950井籠組模式図

Ⅳ　自然科学による分析

１　年輪年代測定

西大寺食堂院跡から出土した井戸SE950を構成する井戸枠の樹種同定調査および年輪年代調査を実施した。

（１）調査対象試料および調査方法

樹種同定調査　樹種同定調査では、20点すべての井戸枠を対象とした。剃刀で木口（横断面・図40）、柾目（放射断面・図41）、板目（接線断面）の各切片を採取し、ガムクロラールで封入したプレパラートを作製した。これらのプレパラートを光学顕微鏡で観察し、木材組織の特徴をもとに樹種同定をおこなった。

年輪年代調査　年輪年代調査では、５段目の４点の井戸枠は表面の劣化が著しく年輪幅の計測が困難なため対象から除外し、１段目から４段目の計16点の井戸枠を対象とした。

年輪幅の計測は、1,670万画素のデジタル一眼レフカメラで撮影された木口面または柾目面のデジタル年輪画像をもとに画像計測する方法でおこなった。この場合、画像１枚あたりの撮影範囲を５㎝×４㎝程度とすることで、10μmの計測精度が維持される。年輪画像計測に際しては、奈文研が千葉大学と共同で開発した年輪画像計測ソフトを使用した。

年輪年代の照合には、近畿地方の建造物や遺跡から出土したヒノキ材の年輪幅データをもとに作成された暦年標準パターンを用いた。対数変換および５年移動平均法（ハイパスフィルタリング）で前処理された測定試料の年輪データと暦年標準パターンの時系列データとを相関分析し、相関性の有無をｔ検定することで照合をおこなった。さらに、測定試料と暦年標準パターンの時系列データをプロットしたグラフを重ね合わせることで、照合の成否を目視によっても確認した。また、上記方法で年輪年代の確定した井戸枠の年輪データを平均することで西大寺井戸枠パターンを作成し、これと照合することで、暦年標準パターンとの照合では統計的な有意が認められなかった３点の井戸枠（２段目西、３段目東、３段目西）についても年輪年代を確定した。

調査対象となった井戸枠の中には、樹皮や面皮（樹皮を剥いだだけの部分）を残しているものもあり、これらの最外層からは木口切片を採取して木材組織の形成状況を光学顕微鏡で観察し、伐採時季を特定した。

（２）結果

樹種同定調査　木材組織には、下記の特徴が認められた。

・樹脂道、放射仮道管、螺旋肥厚、異形細胞いずれも存在しない。
・放射柔細胞（図41中rp）の末端壁が薄く、数珠状を呈していない。
・樹脂細胞（図40・41中rc）が晩材部に偏在し、しばしば接線方向に配列している。
・分野壁孔がヒノキ型壁孔（図41中cp）で、普通２個である。

これらの特徴が全部材に共通して確認されたので、井戸枠の樹種はヒノキと判断される。

年輪年代調査　年輪年代調査をおこなった16点の井戸枠のうち、４段目南を除く15点の年輪年代が確定した。年輪年代調査の結果を図38に示す。

年輪年代の確定した部材の中には、樹皮が残存するもの１点（図39）、面皮が残存するもの２点、辺材の一部が残存するもの（以下、辺材型と称す）５点、辺材部を欠き心材のみのもの（以下、心材型と称す）７点が含まれていた。これらの中でとりわけ重要な意義をもつのが、樹皮または面皮を残す３点（以下、あわせて樹皮型と称す）である。

樹皮型の３点について、最外層付近の年輪を顕微鏡で観察したところ、以下の所見を得た。樹皮（図39・40中bk）を残す１段目東の最外層の年輪年代は767年であり、最外層には晩材（図40中lw）が形成されていた。し

たがって、１段目東の原木の伐採時季は、767年から768年にかけての生育停止期間、すなわち767年晩秋から768年の早春にかけてと判断される。面皮を残す２段目東の最外層の年輪年代も767年であり、晩材が形成されていることから、伐採時季は767年晩秋から768年の早春にかけてと判断される。一方、面皮を残す３段目北は、最外層付近の細胞が裂かれるように破壊されていて、樹皮を剥ぐ際に木部の最外部も損傷されたことが示唆される。したがって、木材組織の形成状況をもとに３段目北の原木の伐採時季について言及するのは困難である。

辺材型の５点については、717年から751年にかけての年輪年代が得られた。また、心材型の７点については、645年から720年にかけての年輪年代が得られた。一般的に、辺材型の場合には年輪年代が実際の伐採年よりも数年ないし数十年程度、また心材型の場合には年輪年代が実際の伐採年よりも数十年以上、原木からの切削の度合いに応じてそれぞれ古くなる。これらの事情を考慮すると、辺材型および心材型の12点も、樹皮型試料から得られた767年頃に伐採され、一括で用材調達されたと解釈しても矛盾を生じない。

部材名称（部材番号）	照合年輪数	辺材幅	ヒノキ暦年標準パターンとのｔ値	西大寺井戸枠パターンとのｔ値	最外層年輪年代	特記事項	200 300 400 500 600 700 800 A.D.
井戸枠４段目北（6190）	143	-	10.2	11.8	641+4		499 645
井戸枠４段目東（6192）	253	-	10.8	11.3	663+8		411 671
井戸枠４段目南（6189）	65	-	-	-	-		
井戸枠４段目西（6191）	213	1.6cm	5.3	8.1	711+35	辺材型	499 746
井戸枠３段目北（6196）	261	2.7cm	8.6	14.7	766+1	樹皮型(面皮)	506 767
井戸枠３段目東（6193）	147	-	- *	5.8	694+2		548 696
井戸枠３段目南（6194）	217	-	6.9	7.3	593+55		377 648
井戸枠３段目西（6195）	183	1.6cm	4.2*	8.4	709+42	辺材型	527 751
井戸枠２段目北（6198）	181	-	5.5	10.2	719+1		539 720
井戸枠２段目東（6197）	267	3.3cm	8.2	9.5	767	樹皮型(面皮)	501 767
井戸枠２段目南（6200）	182	0.7cm	5.3	10.2	724+8	辺材型	543 732
井戸枠２段目西（6199）	198	-	4.8*	6.7	683+1		486 684
井戸枠１段目北（6203）	355	0.6cm	11.4	12.5	714+3	辺材型	360 717
井戸枠１段目東（6204）	331	1.9cm	6.3	9.1	767	樹皮型(樹皮)	437 767
井戸枠１段目南（6202）	341	1.9cm	7.7	13.8	741	辺材型	401 741
井戸枠１段目西（6201）	252	-	7.1	9.8	720		469 720

＊　奈良文化財研究所ではｔ≧５を照合成立の基準としているため、当該ｔ値は年代確定条件を満たしていないが、西大寺井戸枠パターンとの照合では年代確定条件を満たしている。

図38　SE950井戸枠の年輪年代測定結果

図39　１段目東の樹皮残存状況

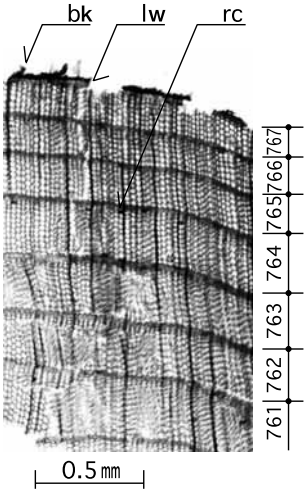


図40　１段目東の木口切片

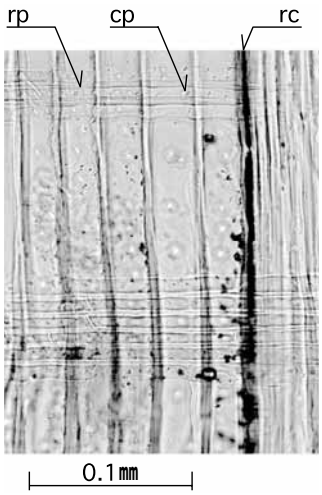


図41　４段目西の柾目切片

2　環境考古学分析

西大寺食堂院跡から出土した井戸SE950井戸枠内堆積物を採取し、花粉分析、寄生虫卵分析、種実同定、珪藻分析をおこなった。

（１）試料と方法

花粉分析、寄生虫卵分析、種実同定、珪藻分析などの遺体分析を総合的におこなうことによって、植生や堆積環境をより詳細に復元することが可能になる。また、遺構内の堆積物は現地性の強いものが多く、遺構の性格や遺構周囲の植生や環境をあきらかにできる場合も多い。

今回の調査では、SE950井戸枠内のa層（試料１）、b層（試料２）、c層（試料３）、c木屑層（試料４）、d層（試料５）、d木屑層（試料６）、e層（試料７）、礫層（試料８）の計８点の堆積物を対象に、花粉分析、寄生虫卵分析、種実同定、珪藻分析をおこなった。

花粉分析はリン酸三ナトリウム法－篩別・沈澱法－フッ化水素酸法－アセトリシス処理法、寄生虫卵分析は篩別・沈澱法－フッ化水素酸法、種実同定は0.25㎜目の水洗篩別法でそれぞれおこない、生物顕微鏡、双眼実体顕微鏡下で観察し同定計数をおこなった。同定レベルによって科、亜科、属、亜属、節、種の階級で同定分類し、含有密度により異なるが、花粉は200から300粒以上、寄生虫卵は堆積物１㎤中の定量で、種実は堆積物200㎤中の定量で、珪藻は100から300個以上の計数を基本とする。花粉、種実、珪藻の数量を、それぞれダイアグラム（図42～44）に示す。

（２）結果と遺体群集の特徴

検出された各遺体群集の特徴によって分帯を設定し、各遺体の対比関係を表５に示し、以下に下部より遺体群集の特徴を記す。

①下部の礫層はコナラ属アカガシ亜属の花粉が優占し、イネ科、ヨモギ属がともなわれる。他の遺体は少ない。

②e層では樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属花粉が減少し、コナラ属コナラ亜属が増加する。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、セリ亜科が増加する。他の遺体は少ない。

③c木屑層、d層、d木屑層では草本花粉のイネ科が増加する。d木屑層では特徴的にミズアオイ属、アカザ科－ヒユ科、スベリヒユ属、アブラナ科の草本花粉が増加し、キュウリ属が出現する。c木屑層ではソバ属花粉がわずかに出現する。d木屑層はスゲ属、カヤツリグサ科、コナギ、アカザ属、ヒユ属の草本種実、ナス、トウガン、ウリ類の栽培植物の種実が検出される。d木屑層より以浅はHantzschia amphioxys、Navicula muticaの陸生珪藻が優占する。

④b層、c層ではイネ科、ヨモギ属の草本花粉が増加し、ミズアオイ属が消失する。b層からソバ属がわずかに検出される。カヤツリグサ科、アカザ属、ザクロソウ、ナデシコ科の種実が多く、b層でイネ（炭化米）、ナス、ウリ類、c層からナスの栽培植物の種実が検出される。陸生珪藻が引き続き優占する。

⑤a層になると樹木花粉のマツ属複維管束亜属が増加し、イネ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科の草本花粉が出現する。種実と珪藻は低密度である。

⑥寄生虫卵は低密度で層準によるが、鞭虫、回虫を主にマンソン裂頭条虫、カピラリアが検出される。

（３）推定される植生と環境・栽培植物

①下部より礫層は堆積速度が速く、近隣にはカシ（コナラ属アカガシ亜属）林が分布し、井戸周辺にイネ科とヨモギ属の草本が生育し耕地の環境が示唆される。

②e層になると森林が大きく減少し、要素としてコナラ・クヌギ（コナラ属コナラ亜属）の二次林が増加する。イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、セリ亜科などの人里植物ないし耕地雑草の性格をもつ草本が繁茂

し、周囲は路傍・庭および耕地の環境が拡大する。

③c木屑層、d層、d木屑層ではアカザ科－ヒユ科、ミズアオイ属、アブラナ科の花粉が微増し、試料６（d木屑層）ではミズアオイ属、スベリヒユ属が多く、一括性が高く、比較的短い時間軸を反映しているとみられる。周囲はイネ科、スゲ属などのカヤツリグサ科、アカザ属、ヒユ属、コナギ、アブラナ科スベリヒユ属が生育し、路傍・庭および畑や水田の耕地の環境が示唆される。栽培植物ではソバ属、キュウリ属、ソバ属の花粉、ナス、トウガンの種実が検出され、周囲での調理過程で井戸内に落ち込んだものと考えられる。

④b層、c層では周辺の森林が減少し、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アカザ属、ザクロソウ、ナデシコ科の日当りの良い乾燥を好む草本が増加し、周辺の乾燥化が示唆される。路傍・庭および畑の環境が示唆される。b層ではイネ（炭化米）、ナス、ウリ類、c層からナスの栽培植物の種実がみられる。

⑤a層になると周辺でアカマツ二次林が成立する。周囲はイネ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科の人里植物ないし耕地雑草の性格をもつ草本が生育し、周囲は路傍・庭および耕地の環境が分布する。

⑥寄生虫卵は低密度に層準によっては検出され、居住域周辺における生活汚染程度と考えられる。

⑦ｂ層、ｃ層、c木屑層、d層、d木屑層で陸生珪藻が優占し、井戸水自体は陽当たりが悪く珪藻が生育せず、陽の当たる井戸上部の湿った壁面で生育した陸生珪藻が堆積し反映されたと考えられる。

（４）まとめ

SE950井戸枠内堆積物の環境考古学分析をおこなった結果、周囲はイネ科、ヨモギ属等の草本が生育し、概ね路傍・庭ないし耕地の環境が示唆された。下部の礫層の時期には、カシ林（コナラ属アカガシ亜属）の照葉樹林が優勢であるが、e層より上位は草本が多くなる。e層ではコナラ・クヌギの二次林（コナラ属コナラ亜属）が一時的に増加し、最上層のa層ではアカマツ二次林（マツ属複維管束亜属）が成立する。栽培植物として、イネ（炭化米）、ウリ類、ナス、トウガン、ソバ属が検出され、調理の際に井戸に落ち込んだと考えられ、当地で食生活の一端が見出された。

表５　井戸SE950の遺体群集の対比と環境

<table>
<tr><th rowspan="2">堆積層</th><th rowspan="2">試料
No.</th><th colspan="3">花粉群集</th><th rowspan="2">寄生
虫卵</th><th colspan="2">種実群集</th><th colspan="2">珪藻群集</th></tr>
<tr><th>分帯</th><th>草本</th><th>主要樹木</th><th>分帯</th><th>主要種実</th><th>分帯</th><th>主要珪藻</th></tr>
<tr><td>a層</td><td>1</td><td>V</td><td>イネ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科
（路傍・庭、耕地）</td><td>マツ属複維管束亜属
（アカマツ二次林）</td><td></td><td>V</td><td>少ない</td><td>III</td><td>少ない</td></tr>
<tr><td>b層</td><td>2</td><td rowspan="2">IV</td><td rowspan="2">イネ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科
（路傍・庭、畑）</td><td rowspan="2">低率
（周辺の樹木減少）</td><td>＋</td><td rowspan="2">IV</td><td rowspan="2">カヤツリグサ科、アカザ属、ザクロソウ、ナデシコ科、コメ、ナス、ウリ類
（路傍・庭、畑）</td><td rowspan="5">II</td><td rowspan="5">Hantzschia amphioxys
Navicula mutica
（陸生珪藻、湿った壁面）</td></tr>
<tr><td>c層</td><td>3</td><td>＋</td></tr>
<tr><td>c木屑層</td><td>4</td><td rowspan="3">III</td><td rowspan="3">イネ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、ミズアオイ属、アブラナ科、（スベリヒユ属）、ソバ属、キュウリ属
（路傍・庭、耕地）</td><td rowspan="3">アカガシ亜属
（周辺に照葉樹）</td><td rowspan="3">＋</td><td>III</td><td>少ない</td></tr>
<tr><td>d層</td><td>5</td><td rowspan="2">II</td><td rowspan="2">ヒユ属、コナギ、スゲ属、ウリ類、ナス、トウガン
（路傍・庭、畑、湿地）</td></tr>
<tr><td>d木屑層</td><td>6</td></tr>
<tr><td>e層</td><td>7</td><td>II</td><td>イネ科、ヨモギ属
（路傍・庭、耕地）</td><td>アカガシ亜属、コナラ亜属
（コナラ・クヌギ二次林増加）</td><td></td><td rowspan="2">I</td><td rowspan="2">少ない</td><td rowspan="2">I</td><td rowspan="2">少ない</td></tr>
<tr><td>礫層</td><td>8</td><td>I</td><td colspan="2">アカガシ亜属の樹木を主にイネ科・ヨモギ属の草本
（照葉樹林が優勢、耕地）</td><td>＋</td></tr>
</table>

＋出現、＿栽培植物、（ ）推定される環境

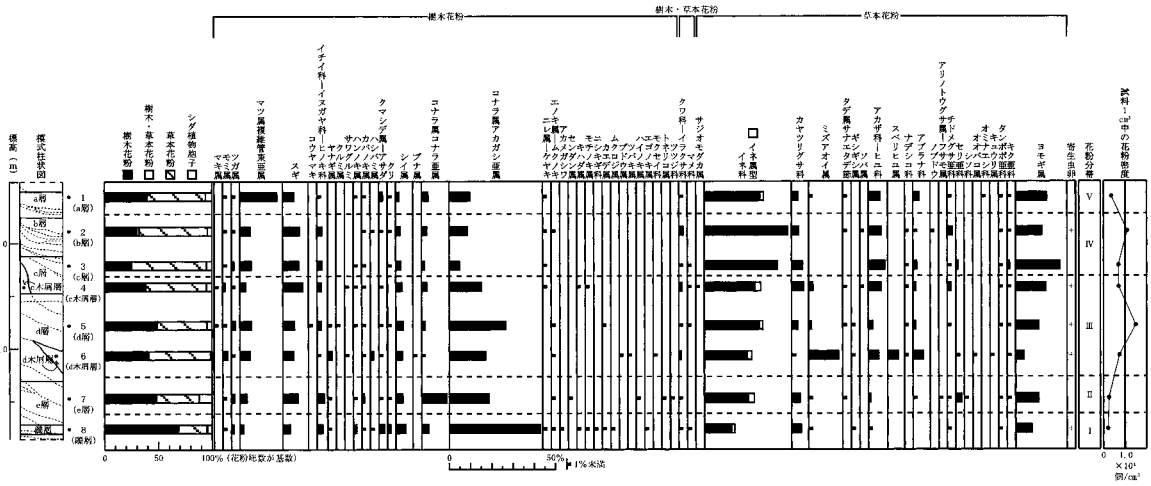


図42　井戸SE950における花粉ダイアグラム

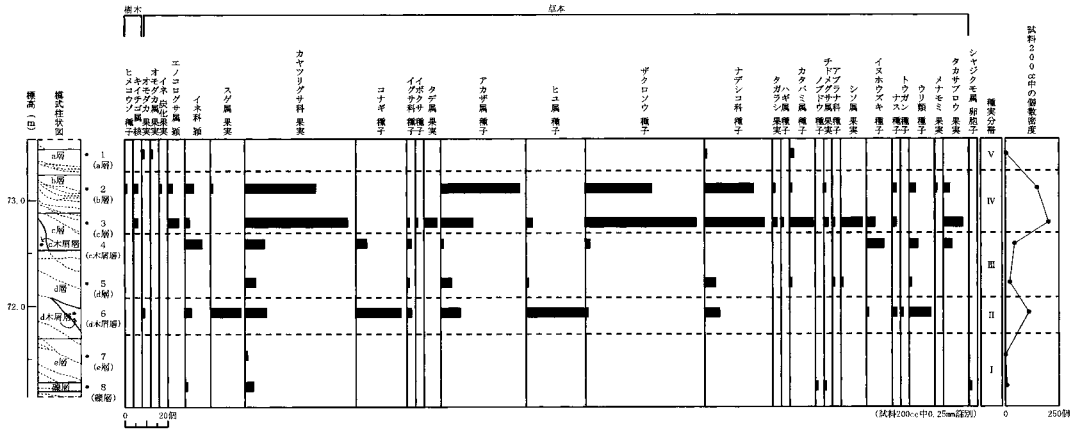


図43　井戸SE950における種子ダイアグラム

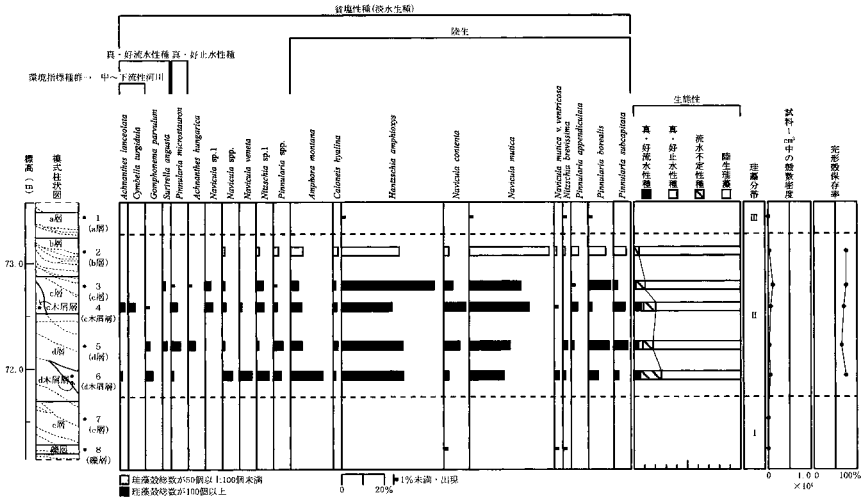


図44　井戸SE950における主要珪藻ダイアグラム

Ⅴ　調査の成果

右京一条三坊八坪の検出遺構と出土遺物　遺構は、その重複関係や出土遺物より、奈良時代前半以前、奈良時代後半（西大寺創建段階）、平安時代以降の３時期に区分できる。

奈良時代前半の遺構は、建物や柱穴列、溝などで、いずれも、北で東に振れるという特徴をもつ。西大寺造営以前の当地の利用を考えるための資料となろう。

今回の調査における最大の成果は、奈良時代後半に造営された創建段階の西大寺食堂院の位置と建物配置の大半が明らかになったことにある。これまで食堂院の位置と建物配置は、「資財帳」の記載順序や、後世に描かれた古絵図などから復元されていたが、SB960やSB955など、「資財帳」の記載と規模の等しい建物遺構を検出したことで、当地が西大寺食堂院にあたること、食堂院の中軸上に食堂・殿・大炊殿などの主要堂舎が南北に並ぶことが判明した。さらに、覆屋をともなう巨大な井戸SE950や埋甕列SX930などの「資財帳」に記載のない遺構を検出し、西大寺食堂院に関する新たな知見を得ることができた。

SB960の東南で検出したSE950は、これまで平城京跡で検出された井戸の中で最大の平面規模をもつ。井戸枠の下３段は部材寸法も大きく、四隅の５枚組の組手も珍しい。また、部材の表面には加工痕や打刻印などが残り、古代の木材調達や木工技術を検討する上で重要な情報をもつ資料である。

井戸の埋土からは、多種多様な遺物が出土した。約360点の木簡は、内容･年代共に特徴的なもので、奈良時代後半の寺院経営の実態を示す資料として注目される。また、箸・杓子等の食事具、皿・椀などの食器、食物の残滓など、当時の寺院における食生活がうかがえる食堂院らしい遺物も数多く出土した。出土した土器の中には、墨書土器が多数含まれている。墨書の内容は、「西大寺」「西寺」などのほか、「西大寺弥」「薬□〔師カ〕」と記したものもあり、食堂院で用意された食物が専用の器で弥勒金堂・薬師金堂へ供されていた可能性が考えられる。また、「同」「同法」と記した墨書土器や木製品も出土した。元興寺03年調査においても「同法」と記された墨書土器が確認されているほか、近年その西側でおこなわれた調査でも「同法所」と記した墨書土器が出土している（㈶元興寺文化財研究所2007「平城京右京一条三坊一坪の調査　発掘調査現地説明会資料」）。食堂院東隣の坪が西大寺に関わる敷地である可能性が高まったといえよう。

SE950出土遺物は、その内容だけでなく、井戸枠使用木材の伐採年代である767年から、木簡の年代である延暦11年（792）頃までの約30年間という、具体的な使用年代が特定される一括資料としても評価できる。

調査区東南では埋甕列SX930を検出した。SX930は市15次調査で検出された遺構の南延長部分とみられ、両調査を合わせると南北に80基以上の甕を並べた施設として注目される。また、凝灰岩列SX935はSX930とほぼ同じ範囲で南北に並行していることから、両者は関連する遺構と考えられ、SX935を基壇状の整地の西辺外装とすると、その整地上に埋甕遺構が整然と並んでいた姿が考えられる。しかし、埋甕を覆う建物遺構は市15次調査に続いて今回の調査においても検出されず、仮に埋甕を覆う建物が存在しなかった場合、甕は露天に放置されていたこととなる。そのほかにも、SX935に対応する東辺外装にあたる遺構が検出されないこと、両遺構間に広がる東西約８mの空閑地の存在など、埋甕の機能や凝灰岩列との関係についてはなお課題を残す。また、埋甕内部には食品などの残存物は確認できなかったが、多量の製塩土器の存在や、木簡の記載内容を考慮すると、醤などの調味料を製造・貯蔵していた可能性が考えられよう。

調査区全域からは奈良三彩、白釉などの施釉陶器類が出土した。奈良時代の大規模寺院が所有していた陶器類の具体的な内容を示すものとして重要である。また、その種類が正倉院宝物と類似するという点も興味深い。これら一連の施釉陶器類が食堂院という場所に保管されていた可能性が高まったことも大きな成果である。仏具としての側面をもつ奈良三彩が食堂院で管理されていたことは、南都古代寺院の食堂院が単に食事を供する場ではなく、食事を通した修行行為の一端を担う場でもあったことを示すものといえよう。

西大寺食堂院の成立と終焉　西大寺の造営は、天平神護３年（767）年に造西大寺司が任命された後に本格化したと考えられる。SE950の井戸枠に用いられた木材には767年晩秋から768年早春の間に伐採されたものが含まれ、西大寺造営にともない新たに木材が調達された状況がうかがわれる。食堂院の造営は、出土した瓦の年代観より、東塔・西塔の造営時期とほぼ同じで、金堂院よりやや遅れた宝亀年間と考えられ、「資財帳」が記される宝亀11年（780）までには完成したとみられる。

一方、食堂院の廃絶の時期については慎重な検討を要する。SB960礎石抜取穴より９世紀半ばの遺物が出土していることや、SE950の埋土から出土した「延暦十一年」の木簡の存在より、殿・大炊殿・井戸などの西大寺食堂院の主要施設は、８世紀末から９世紀半ば頃までに廃絶したと考えられる。しかし、SX930の甕の底部から10世紀半ばの土器が出土したこと、食堂自体は応和２年（962）に大風で倒壊するまで存続したとみられることなどを考慮すると、僧の共食の場としての食堂院本来の機能はごく早い段階で失われるものの、貯蔵施設とみられる埋甕はその後も存続した可能性があり、食堂院の各施設の廃絶時期は、それぞれの機能によって異なっていたと考えられる。

それでは、殿・大炊殿・井戸などの廃絶の契機はどのように理解すべきか。残念ながら、この点を史料的に明確に裏付けることはできない。寺内の僧侶が一堂に会して食事を取ることがおこなわれなくなり、その空間としての食堂院が形骸化したというような寺院組織内部の要因とともに、寺院組織を越えた外的な影響、たとえば木簡の最新の年紀から２年後に訪れた延暦13年（794）の長岡京から平安京への遷都という、多分に政治的な要因をも考慮すべきかも知れない。平安京において西寺の造営が本格化するのは、弘仁・天長年間に入ってからであり、平安京の寺院と南都の寺院とは断絶の側面のみが強調されるが、今回の発掘調査で明らかになった長岡遷都以後の西大寺の動向は、単に西大寺一寺の趨勢のみならず、南都寺院の盛衰や平安仏教の形成、さらには長岡京の歴史的な位置付けの理解についても一石を投じるものとなろう。

その後の当地の利用実態を示す遺構は少ない。食堂院の各施設のうち、食堂は11世紀初めに弥勒金堂として機能していたらしく、倒壊後に再建されたようである。SB960やSX930の周辺で部分的に広がる包含層（暗灰色土）には10世紀半ばを下限とする遺物が含まれており、食堂の再建にともなう周辺の整地に関わると考えられる。しかし、食堂以外の建物は再建された様子はなく、遺構も境内の排水のために掘られた溝や、炉跡などが確認されるのみである。

右京一条三坊八坪の検出遺構と出土遺物　中区では一条北大路南側溝と考えられる東西溝SD985を検出した。南側溝の溝心はX＝－144,610.5付近となり、元興寺03年調査で検出された一条北大路南側溝の溝心より約３m北に位置する。今回北側溝は検出していないが、遺存地割からの推定位置や、遺構検出面とそれを覆う土の堆積状況が北区と中区に挟まれた現水路を境に南北で異なることなどを合わせると、北側溝は現水路直下に位置すると考えられる。この場合、一条北大路側溝心々間距離は約16m（54尺・45大尺）となる。

北区で検出したSD986は、ほぼ南北に通り、埋土の状況より一気に埋め立てられたとみられることから、何らかの区画にともなう溝と考えられる。埋土に含まれる遺物は奈良時代半ばを下限とするため、北辺三坊三坪は既に奈良時代前半には活発な土地利用がされていたようである。しかし、柱列の他に建物などの遺構は確認されず、利用の実態は不明である。北辺三坊三坪は、絵図等には西大寺の「修理所」と記されるが、今回の調査では西大寺寺地である確証は得られなかった。

おわりに　現在の西大寺は、近鉄線南側に概ね叡尊による復興後の姿をとどめるが、今回の調査では、広大な面積を占めた奈良時代の西大寺とその周辺の状況を解明する大きな成果を得た。奈良市教育委員会や㈶元興寺文化財研究所による調査成果と合わせて、西大寺創建期の遺構が良好な状態で地中に保存されていることが明確になってきたわけである。今後も地道な発掘調査を続けることによって、往時の西大寺の姿が一層明らかにされ、かつ適切な保存処置が講じられることを切に期待したい。

〔付章〕　西大寺食堂院の配置計画と建物の復元

本章では、「資財帳」に記載された建物と検出遺構との照合を基礎に、食堂院を構成する建物について考察する。なお、検出した建物の遺構は、大規模な礎石の据付穴や基壇縁の側溝などが中心で、いずれも造営の基準とした単位尺や方位を正確に算出する定点になり得ないため、ここでは単位尺を29.6㎝、方位を真北として検討する。

（１）「資財帳」から復元される建物配置

「資財帳」に記載された食堂院の建物と規模は２頁に示した通りである。「資財帳」からは、食堂院には「堂」や「殿」と称する中心施設となる建物が３棟、また厨と倉がそれぞれ２棟ずつ、それに建物をつなぐ軒廊と校倉造の倉があったことがわかる。こうした「資財帳」の記述から復元される建物配置については、これまでにいくつかの復元案（図45）が提示されている。これらの復元案について食堂院部分のみに注目すると、各建物の位置に若干の相違はみられるものの、区画の中央に「食堂」「殿」「大炊殿」の東西棟建物３棟を南北に並べ、それらの東西に南北棟の「厨」と「倉代」をそれぞれ１棟ずつ並べ、「双軒廊」を「食堂」と「殿」の間に、東西棟の「甲双倉」を「大炊殿」の背後に置くという配置が共通してみられる。

（２）食堂院の建物配置

今回の調査成果と、これまでに検出されている遺構および既往の復元案より食堂院の建物配置を検討すると図46となる。以下、各建物について詳細を述べる。

食堂・殿・大炊殿　今回の調査では、食堂院の主要堂舎のうち殿（SB955）および大炊殿（SB960）とみられる建物を検出した。各建物の規模は、SB955が桁行約30m（100尺）、梁行約12m（40尺）、SB960が桁行約27m（90尺）、梁行約15m（50尺）となり、「資財帳」の記載と等しくなることを確認した。また、市12次調査では、食

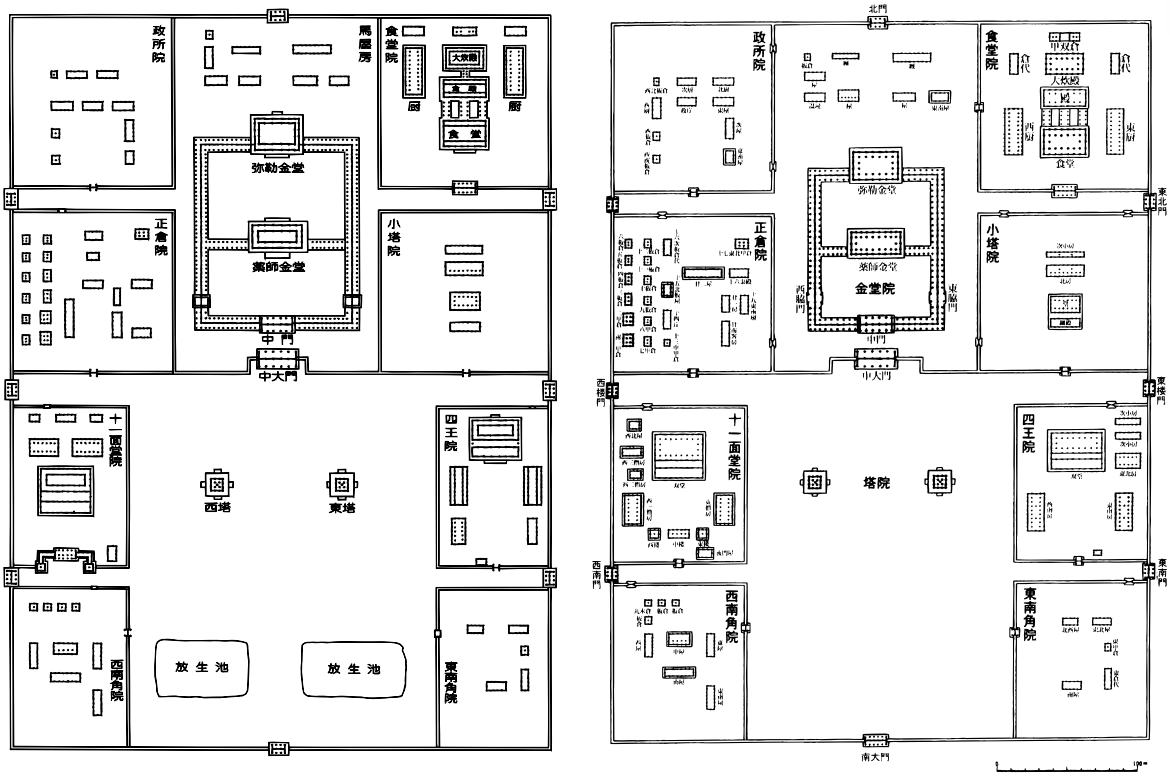


図45　既往の復元案
左：奈良市1978『平城京復元模型記録』
右：宮本長二郎1983「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」『西大寺と奈良の古寺』より一部改変

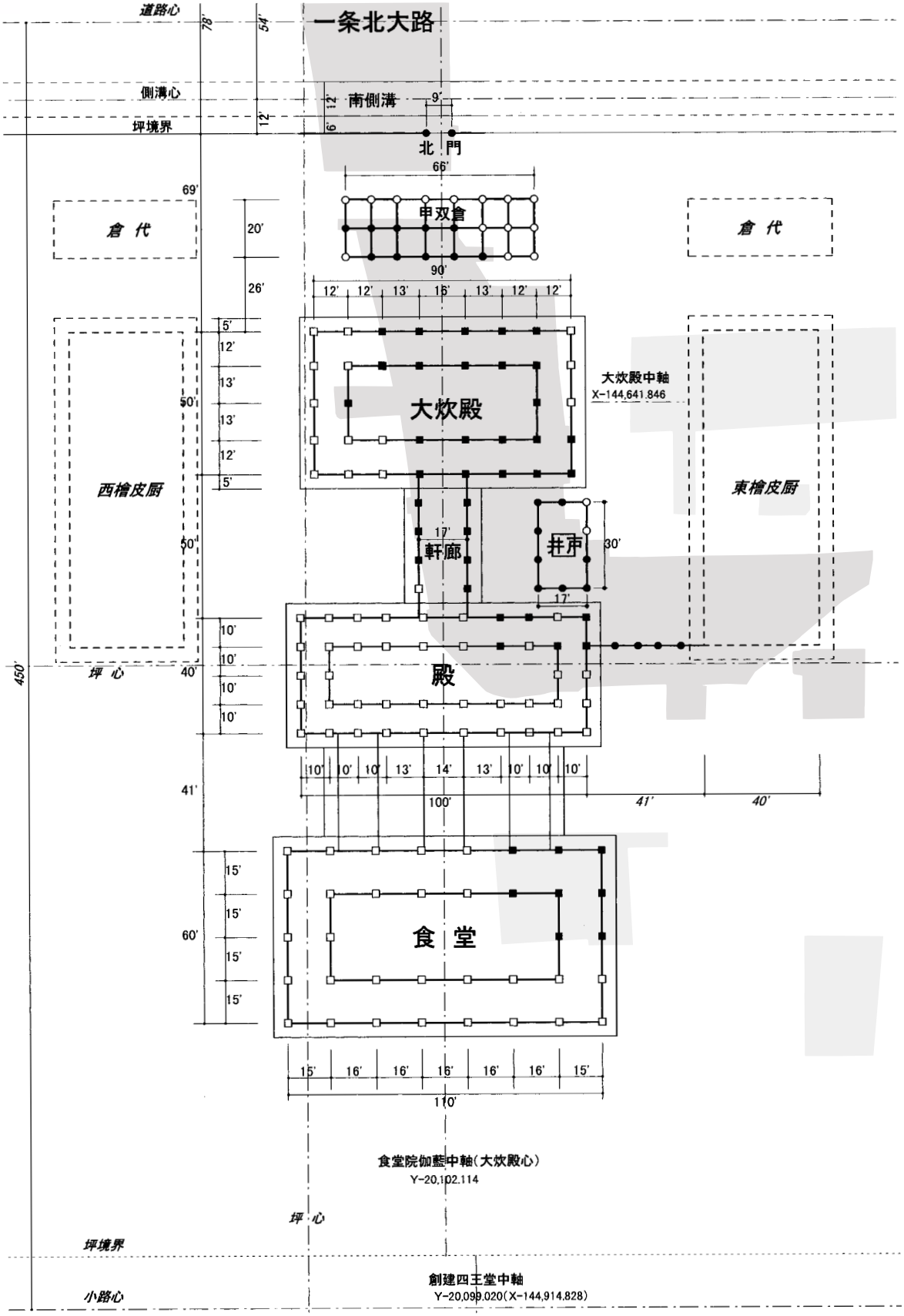


図46　西大寺食堂院　配置図　1:600

単位：1 ≒1尺　□：礎石建ち　○：掘立柱　黒塗は検出済　文字の斜体は推定を示す

堂とみられる建物が検出されており、SB960より推定される中軸で折り返すと、桁行約33m（110尺）、梁行約18m（60尺）となり、「資財帳」の記載と等しくなる。

これら食堂院の主要堂舎である食堂・殿・大炊殿は、中軸をそろえて南北に並び、各建物間の距離は側柱心々で、食堂と殿が41尺、殿と大炊殿が50尺となる。

軒廊・井戸覆屋　殿と大炊殿の間には、２棟を結ぶ軒廊（SC965）と井戸SE950を覆う井戸覆屋（SB951）が並ぶ。軒廊と井戸覆屋はともに桁行約９m（30尺）、梁行約5.1m（17尺）の南北棟の建物である。軒廊は中軸上に、井戸覆屋は殿と東側柱筋をそろえた位置に建ち、主要堂舎と井戸が機能的に一体であったことをうかがわせる。このような食堂院における主要堂舎と井戸の配置には、西隆寺の食堂院との類似性を見出すことができ、両寺院の密接な関係があらためて確認できる[1)]。

双軒廊　上記のような食堂院中枢部の計画的な配置から、軒廊西側の井戸覆屋との対称位置に、これらと同規模の建物がもう１棟並んで建つ可能性が考えられる。「資財帳」に記載される「双軒廊」が、従来の復元案にあるような廊が３棟並行するものであるとすると、軒廊と井戸覆屋、それに井戸覆屋と対称位置に想定される建物の３棟が「双軒廊」と同様の配置を取ることとなる。しかし、今回検出した遺構は「資財帳」に記された「双軒廊」の規模と一致せず、同建物に比定することは困難である。よって、現段階では従来の復元案通りに殿と食堂の間に「双軒廊」を置くものと考える。

東檜皮厨　今回の調査では、「東檜皮厨」に比定し得る明確な遺構は検出していない。しかし、殿の東側に取り付く東西塀SA952を殿と「東檜皮厨」を結ぶ目隠し塀、また凝灰岩列SX935を「東檜皮厨」の基壇西辺に関わる遺構と解釈すれば、「東檜皮厨」は殿の東側、側柱心々間で41尺離れた位置に想定できる。また、「東檜皮厨」の南側柱筋を殿の北入側柱筋にそろえた位置に想定すると、「資財帳」記載の規模に従えば、北側柱筋が大炊殿の北側柱筋とそろうことになる。

甲双倉　SB970は、大炊殿の北側に位置することから甲双倉の南半部分に比定した。柱間寸法より、建物は桁行約19.8m（66尺）、梁行約６m（20尺）に復元されるが、「資財帳」の記載と規模が一致しない。「資財帳」に記載された「甲双倉」の規模は、総長で桁行69尺８寸（約20.66m）、梁行18尺４寸（約5.45m）であり、他の建物が丈の単位で規模を記すのに対して、「甲双倉」は寸の単位まで規模を記すのが特徴的である。これは古代において倉を検量する基準が斛（こく）法（倉内に収納できる体積値）であったことを考慮すれば、倉の内寸を記したものと考えられる。したがって、甲双倉における「資財帳」との規模の不一致は、倉独特の記載方法に起因するものと解釈することができよう。

しかし、「資財帳」の記載が「瓦葺」でありながら、遺構が掘立柱である点、双倉の類例には南北棟が多い点などをふまえると、SB970が「甲双倉」とは別の建物である可能性も残る。既往の復元案では、「甲双倉」は「大炊殿」北側の中軸上に想定されてきたが、他の場所に単独で建てられていた可能性も否定できない。この場合SB970は、たとえば食堂院北辺の回廊の一部など、「資財帳」に記載されていない他の建物を想定する必要がある。

北門　食堂院は一条北大路に面し、主要堂舎を並べる中軸にそろえて北門（SB975）を開く。北門の規模は、門柱心々間で約2.7m（９尺）の小規模なもので、築地塀あるいは土塀の一部を切り欠いて設けた棟門に想定される。北門は「資財帳」に記されないが、「資財帳」では各院の区画施設についての記載がないことから、省略したものと考えられる。遺構より、大炊殿の北側柱と北門（北側の境界）間の距離は約20m（69尺）となる。大炊殿と北門の間には甲双倉が建ち、甲双倉は大炊殿の北側柱心から約10.7m（36尺）の位置に棟通りを配する。

その他、「西檜皮厨」は、中軸に対して「東檜皮厨」と対称の位置に、「倉代」２棟は、それぞれ「東檜皮厨」「西檜皮厨」の北側に想定する。

（３）食堂院の規模

食堂院の規模と一条北大路　既往の復元案では、食堂院は右京一条三坊八坪に位置し、敷地は１坪分の広さに復元されてきた。しかし、今回検出した食堂院の主要堂舎が並ぶ中軸は、坪の想定南北中軸から５丈程度東側にずれており、食堂院の南に位置する四王院の中軸と近い位置にある。このことから、食堂院は、四王院と同様に１坪に満たない敷地であった可能性が指摘できる。

また、今回検出した一条北大路の南側溝SD985は、東隣の右京一条三坊一坪で検出されている一条北大路の南側溝[2)]と比べて明らかに規模が大きく、溝心が約３m北側にずれる。これに合わせて食堂院の北限も想定される右京一条三坊八坪の北限より北側に出ている。このことは一条北大路が西大寺食堂院の東限と考えられる西三坊坊間東小路を挟んで様相を異にしていたことを示唆するが、西大寺の寺域、さらには平城京北辺坊の存在と関わる問題であり、既往の研究成果をふまえた上での総合的かつ慎重な検討を要する。

（４）各建物の復元

殿・大炊殿・甲双倉の３棟について、柱間寸法より、各建物の復元を試みる。

殿　殿は桁行９間、梁行４間の建物で、桁行中央間を14尺と広くして、外側に向かって柱間を狭くする金堂式の柱配置を取る。桁行中央の両脇間が13尺、それより外側の柱間が10尺で、梁行の柱間は10尺等間である。このように、10尺の柱間が四周にまわることから、四面庇の建物に推定でき、また身舎の奥行が10尺等間と浅く、身舎桁行の両端間も同じく10尺であることから、屋根は寄棟造の可能性が考えられる[3)]。基壇の出については明確な痕跡をとどめないが、大炊殿と同じ５～６尺程度と考えるのが妥当であろう。

大炊殿　大炊殿は桁行７間、梁行４間の建物で、殿と同じく桁行中央間を広くする金堂式の柱配置を取る。桁行の中央間が16尺、両脇間が13尺、それより外側が12尺であり、梁行の両端が12尺、中央２間が13尺である。12尺の柱間が四周にまわるため四面庇の建物に復元でき、身舎の奥行を深くすることから、入母屋造の可能性が考えられる。基壇の出は、南北の基壇縁に延びる東西溝の存在から５～６尺程度であろう。また、礎石抜取穴などから凝灰岩片が出土することから、基壇化粧は凝灰岩であったと思われる。

甲双倉　甲双倉は桁行７間、梁行２間の建物で、桁行は両端の各２間が９尺等間、中央３間および梁行が10尺等間となる。こうした柱配置から、２間四方の倉を３間はなして東西に２棟並べた双倉を想定した。ただし倉部分は、桁行18尺、梁行20尺となり、「資財帳」の記載と比べて桁行がかなり短く、「資財帳」の「甲双倉」の規模を今回検出した柱配置に重ね合わせると、桁行の中心を揃えて間口の広い校倉をのせた姿となる（図47）。

校倉造は、束の上に井桁を組んで校倉をのせる構造であり、束の柱間と校倉の規模が必ずしも一致する必要性はないが、現存する古代建築の類例にならえば、やはり束の位置と校倉の規模が一致するのが望ましい。この点からも今回検出した遺構の性格については、食堂院全体の建物配置も含め、改めて検討する必要がある。

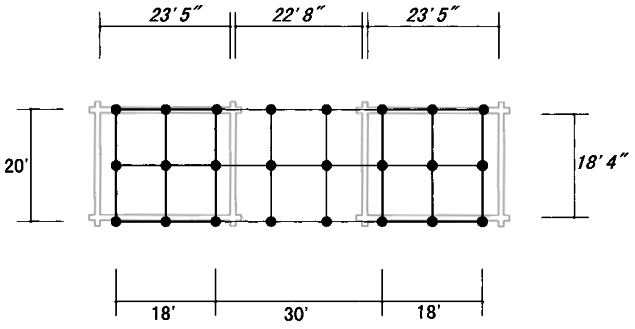


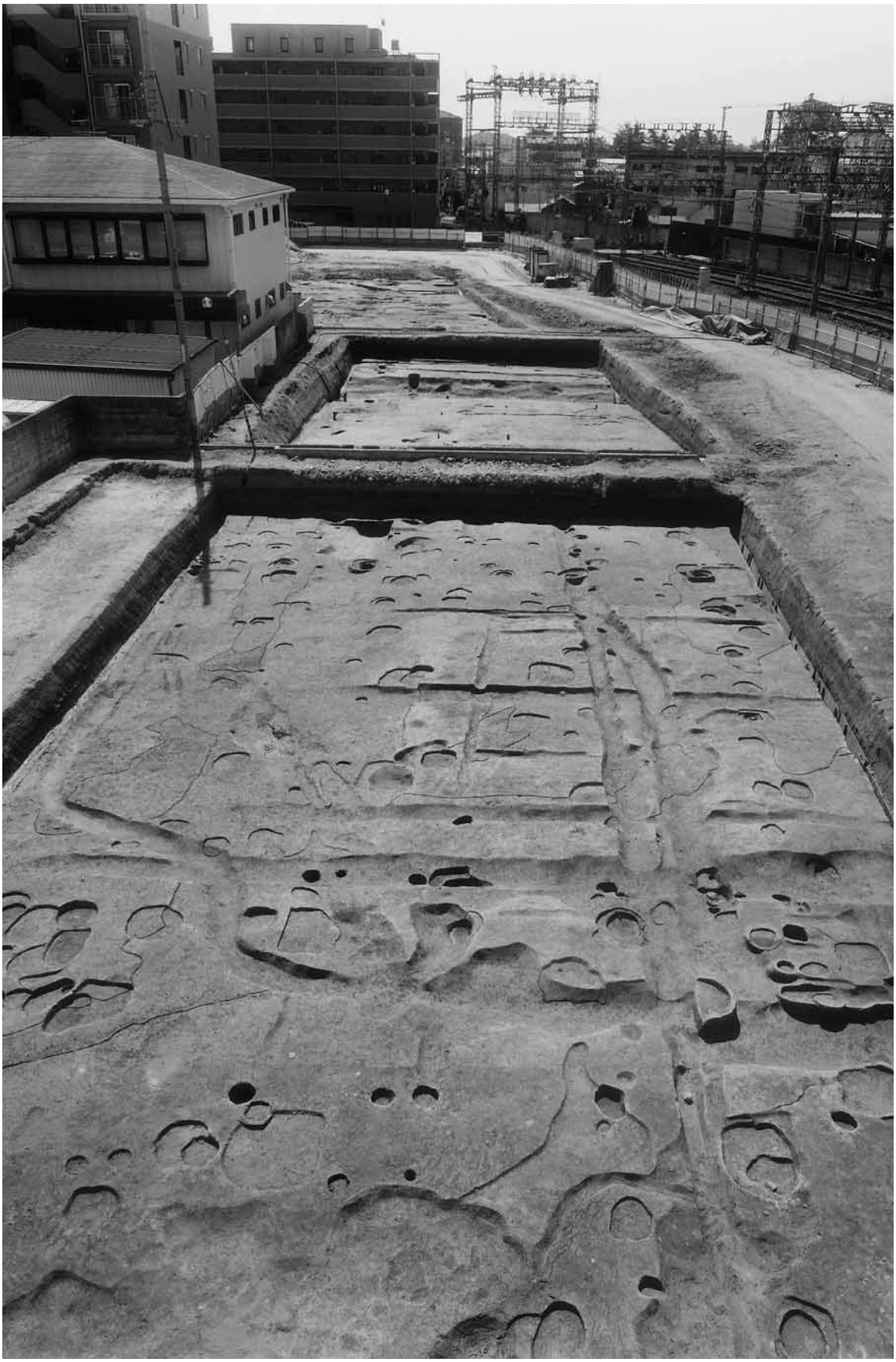
図47　甲双倉の検出遺構と「資財帳」の記載規模の対照
単位：１≒1尺

１）奈文研1993『西隆寺発掘調査報告書』。

２）㈶元興寺文化財研究所2005『平城京右京北辺』。

３）村田健一2000「奈良時代仏堂建築の平面（柱配置）と屋根形式」（『奈良国立文化財研究所年報2000－Ⅰ』）。

図　版



北区・中区全景　北から（第410次調査）

中区・南区北部全景　北から（第410次調査）

SD985検出状況　北東から（第410次調査）

南区北部全景　北西から（第410次調査）

SB970検出状況　北西から（第410次調査）

南区西南部全景　北西から（第404次調査）

南区西南部　北から（第404次調査）

SE950・SB951検出状況
北西から
（第404次調査）

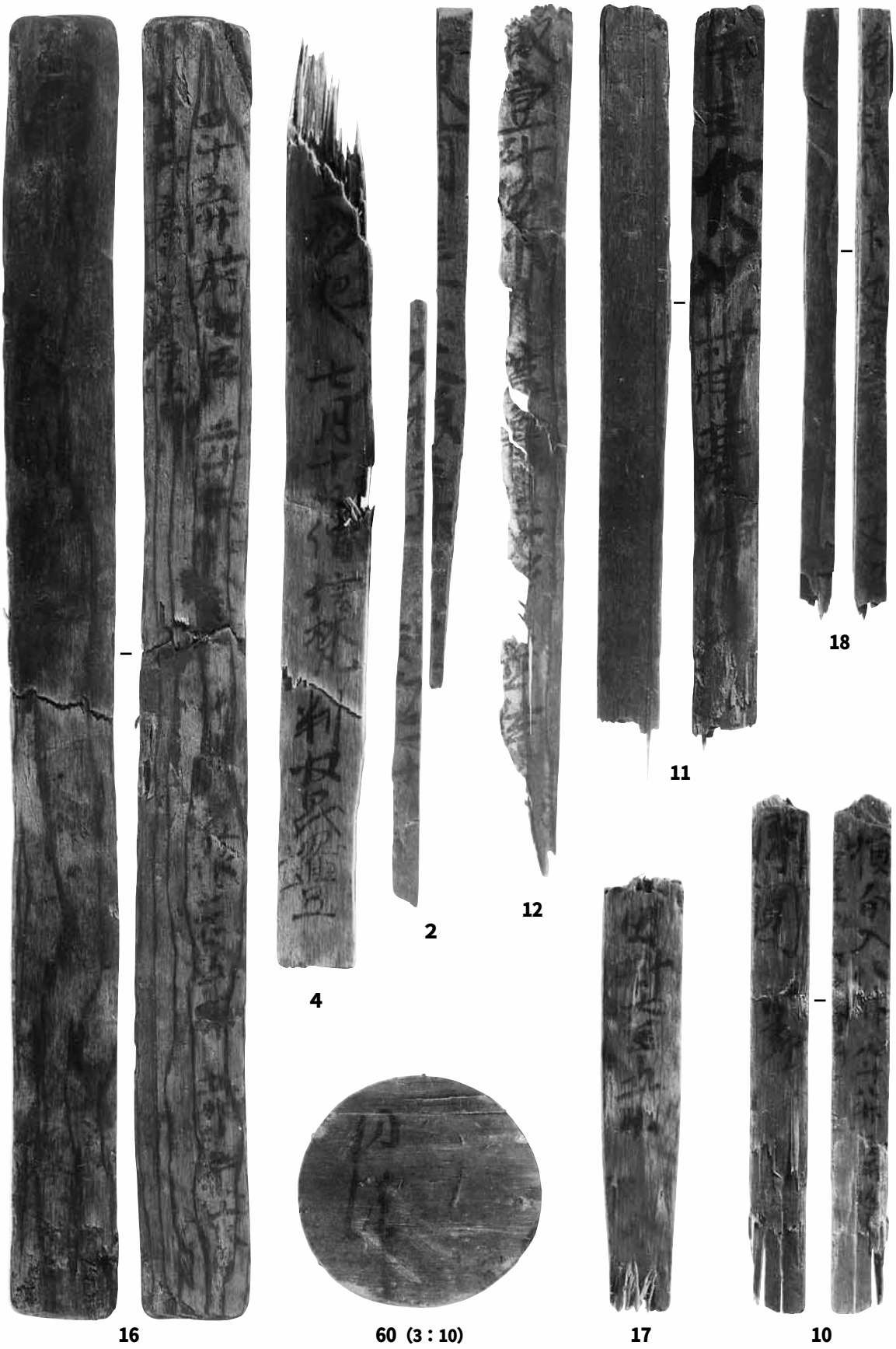
南区南部　東から（第404次調査）

SX930検出状況　西から（第404次調査）

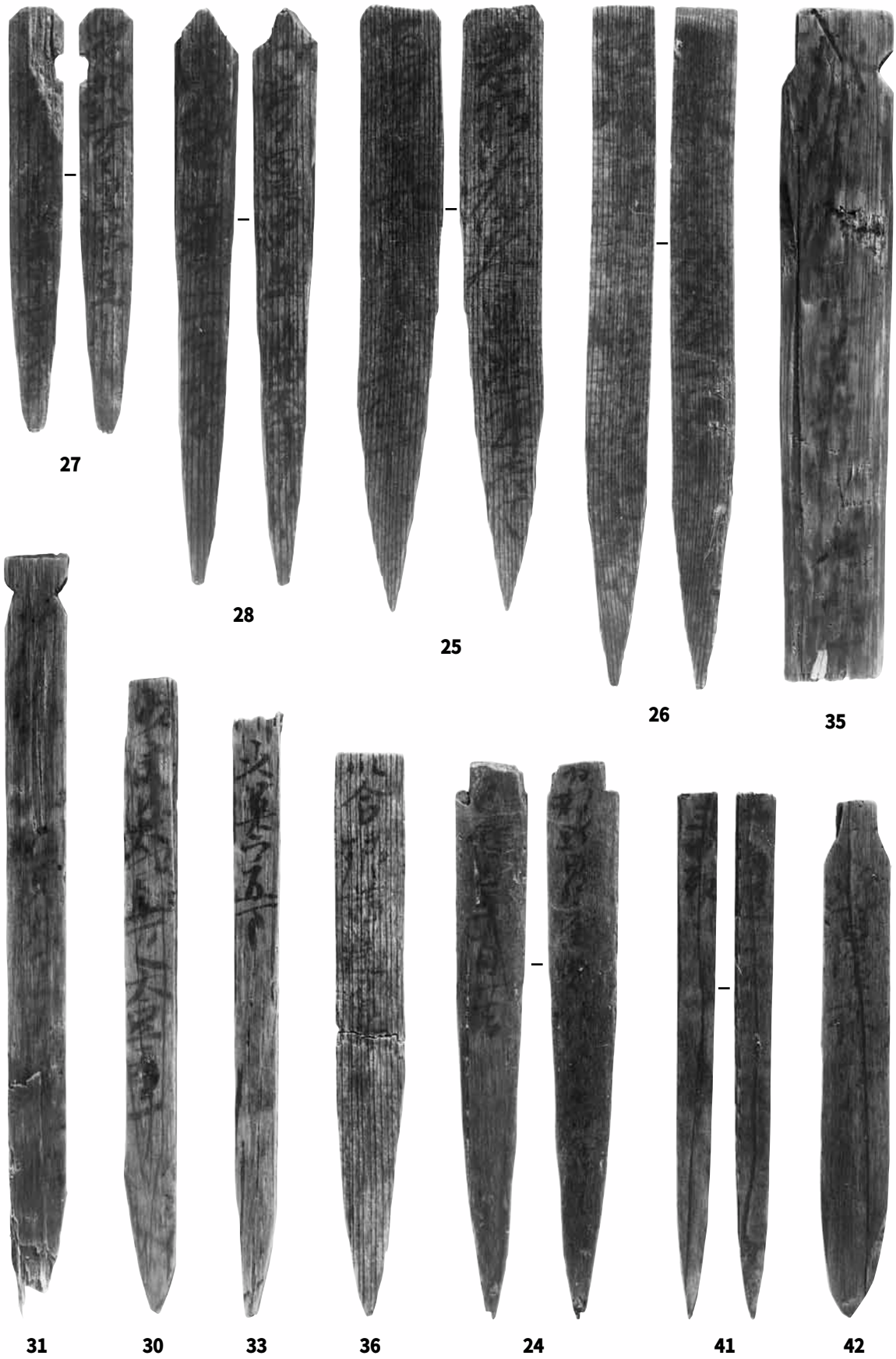
南東区　北から（第415次調査）

東区　東から（第415次調査）

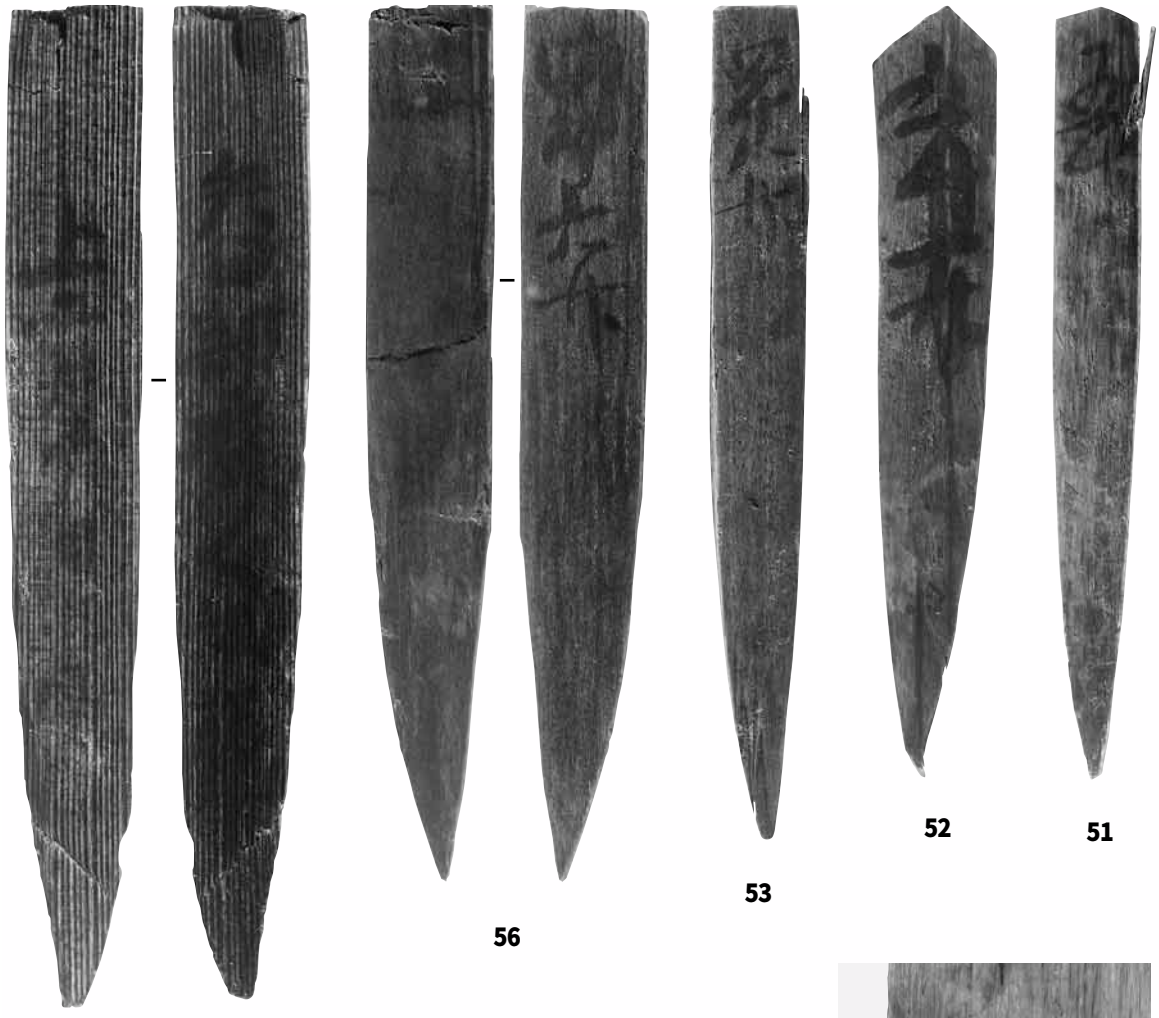
(3：5)



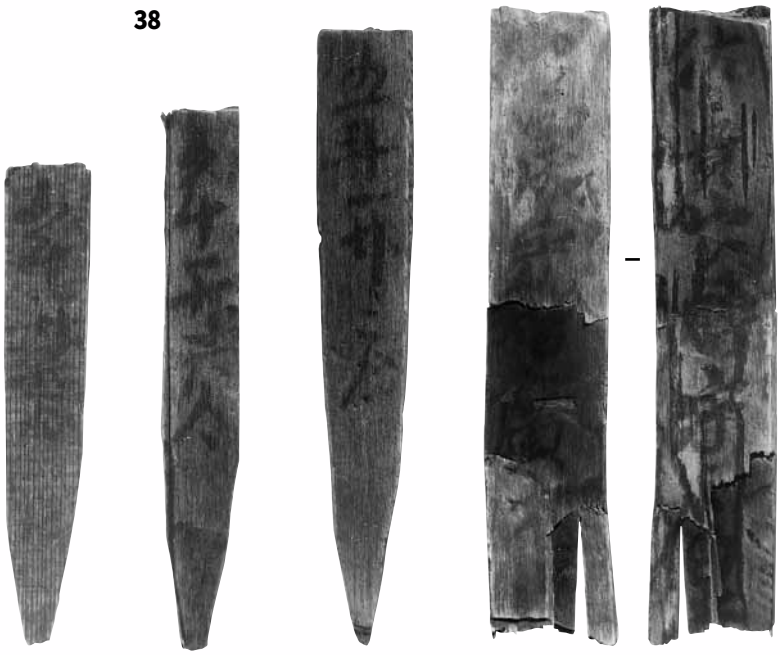
（2：3）



(2：3)



38　56　53　52　51



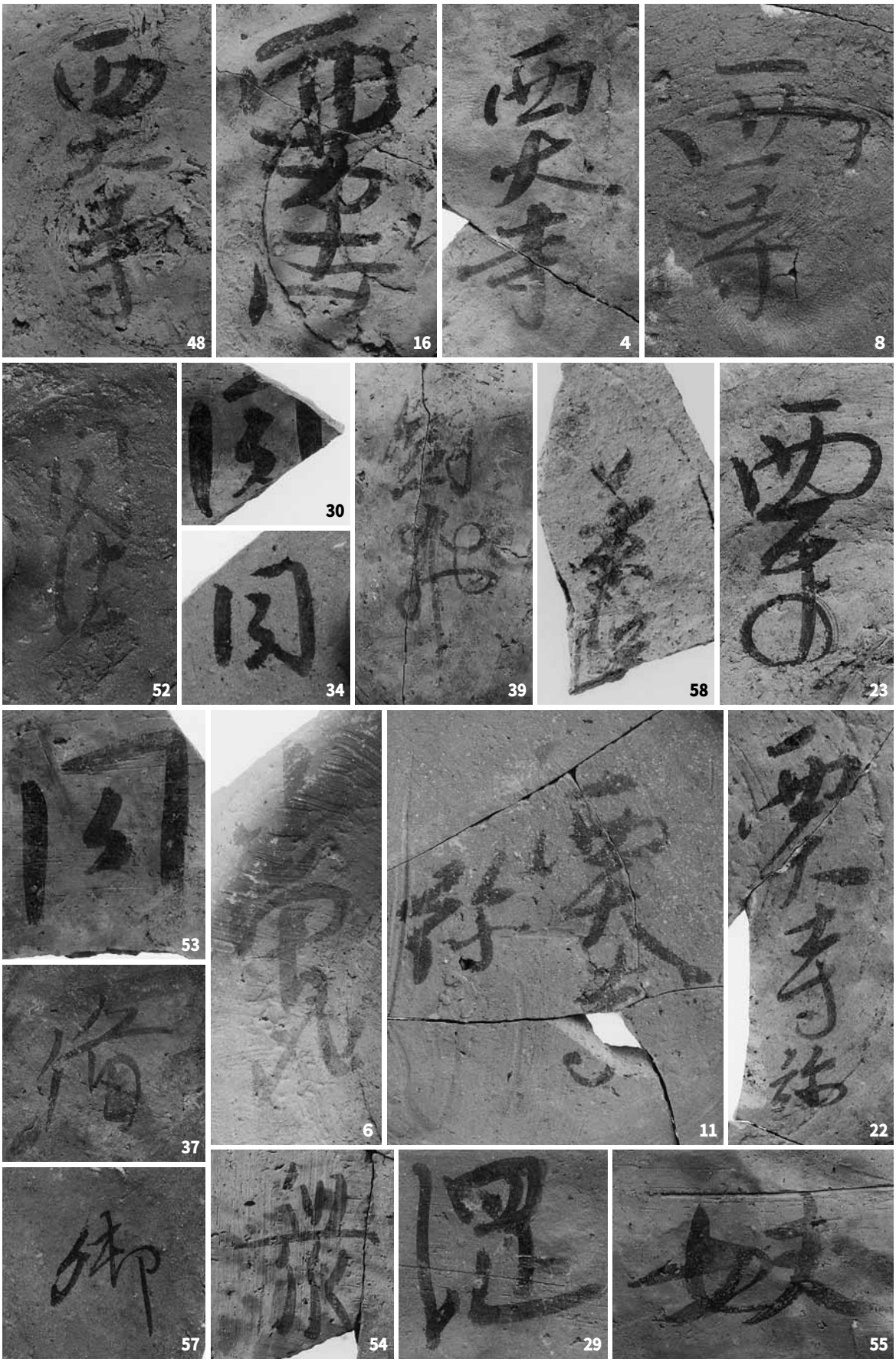
45　46　49　37

(2：3)

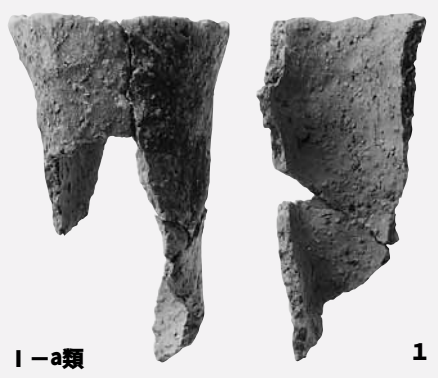
61（1：4）

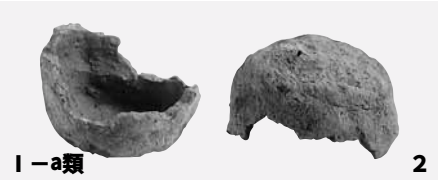
SE950出土土師器・黒色土器

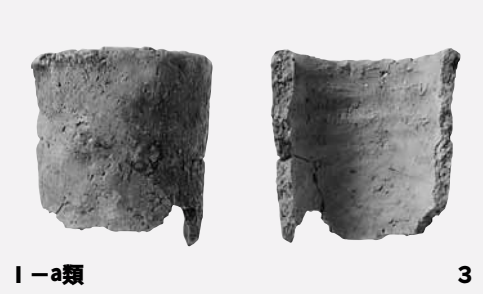
SE950出土須恵器



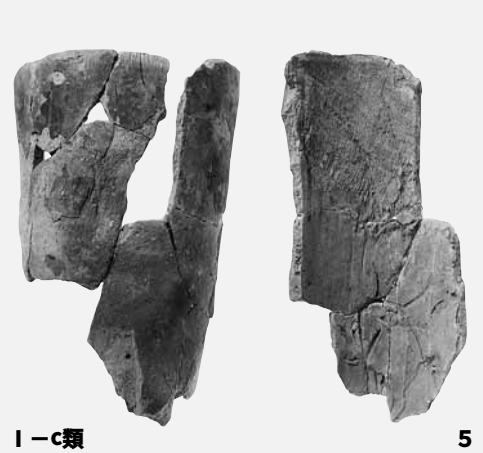
SE950出土墨書土器


Ⅰ－a類 1


Ⅰ－a類 2


Ⅰ－a類 3

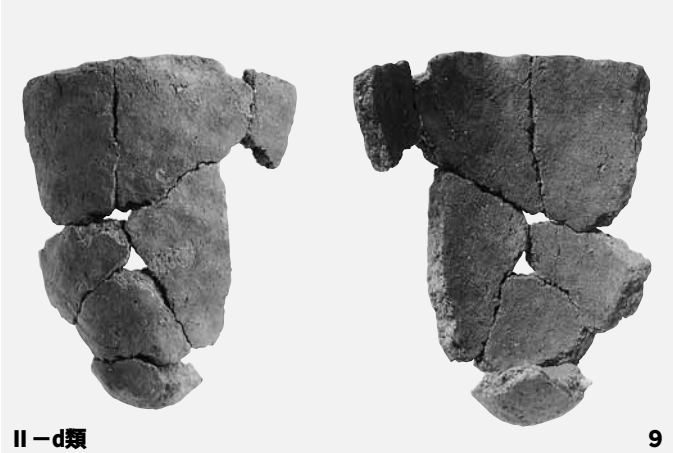
Ⅰ－b類 4


Ⅰ－c類 5

Ⅱ－c類 6

Ⅱ－a類 7

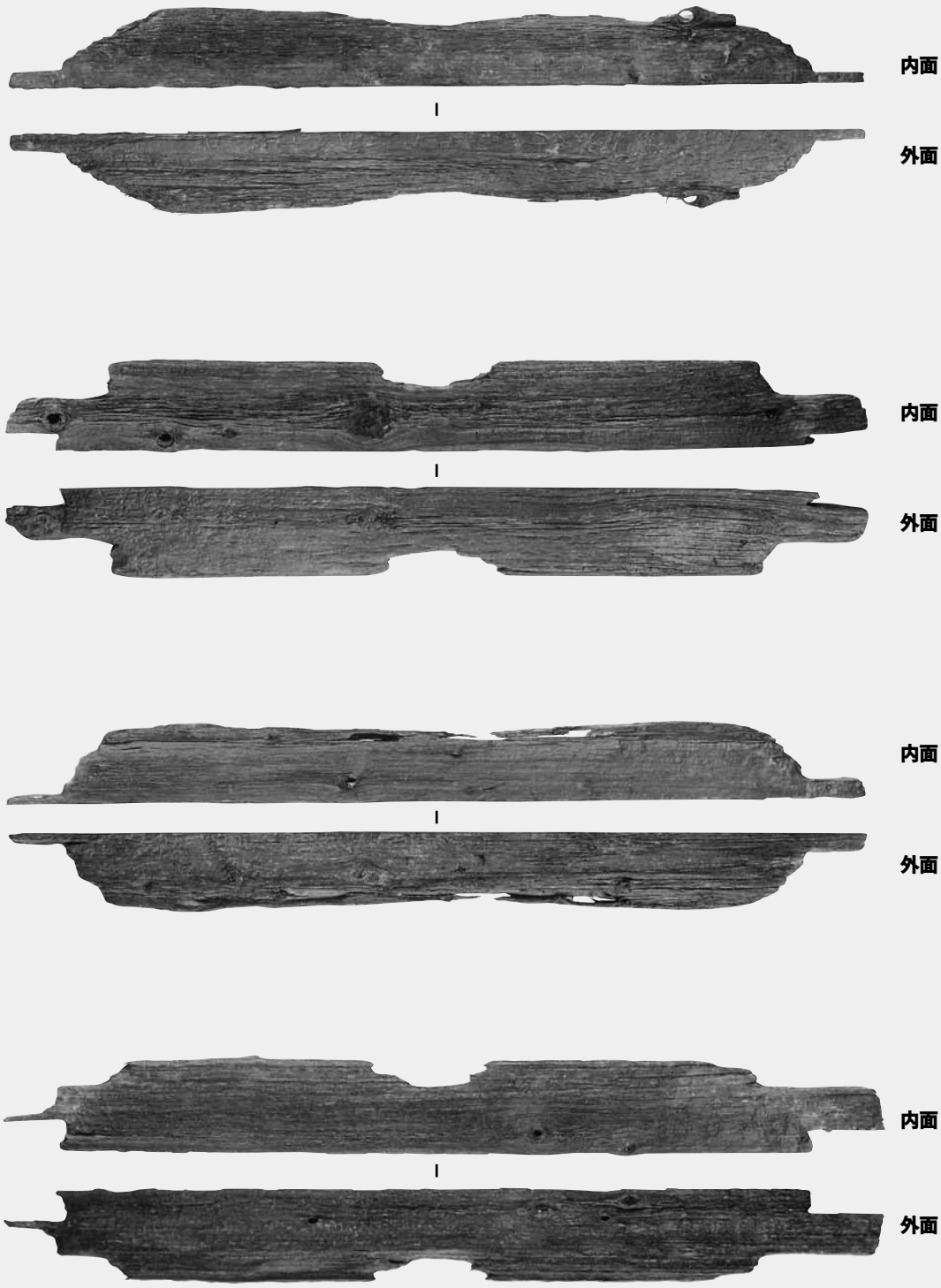
Ⅱ－b類 8


Ⅱ－d類 9

SE950出土製塩土器

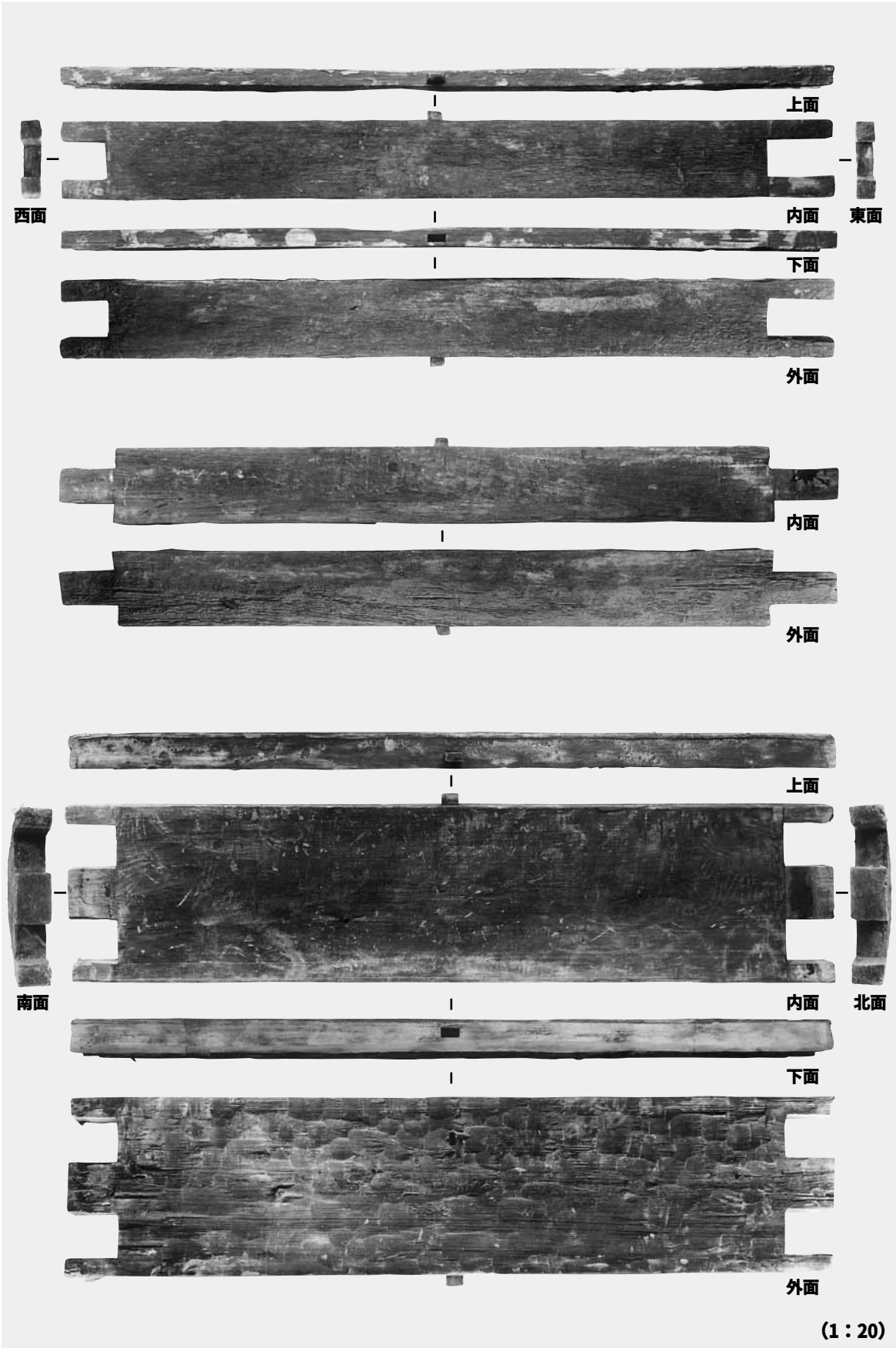
SD941・SD942・SE950・SB951出土金属製品

SE950出土木製品



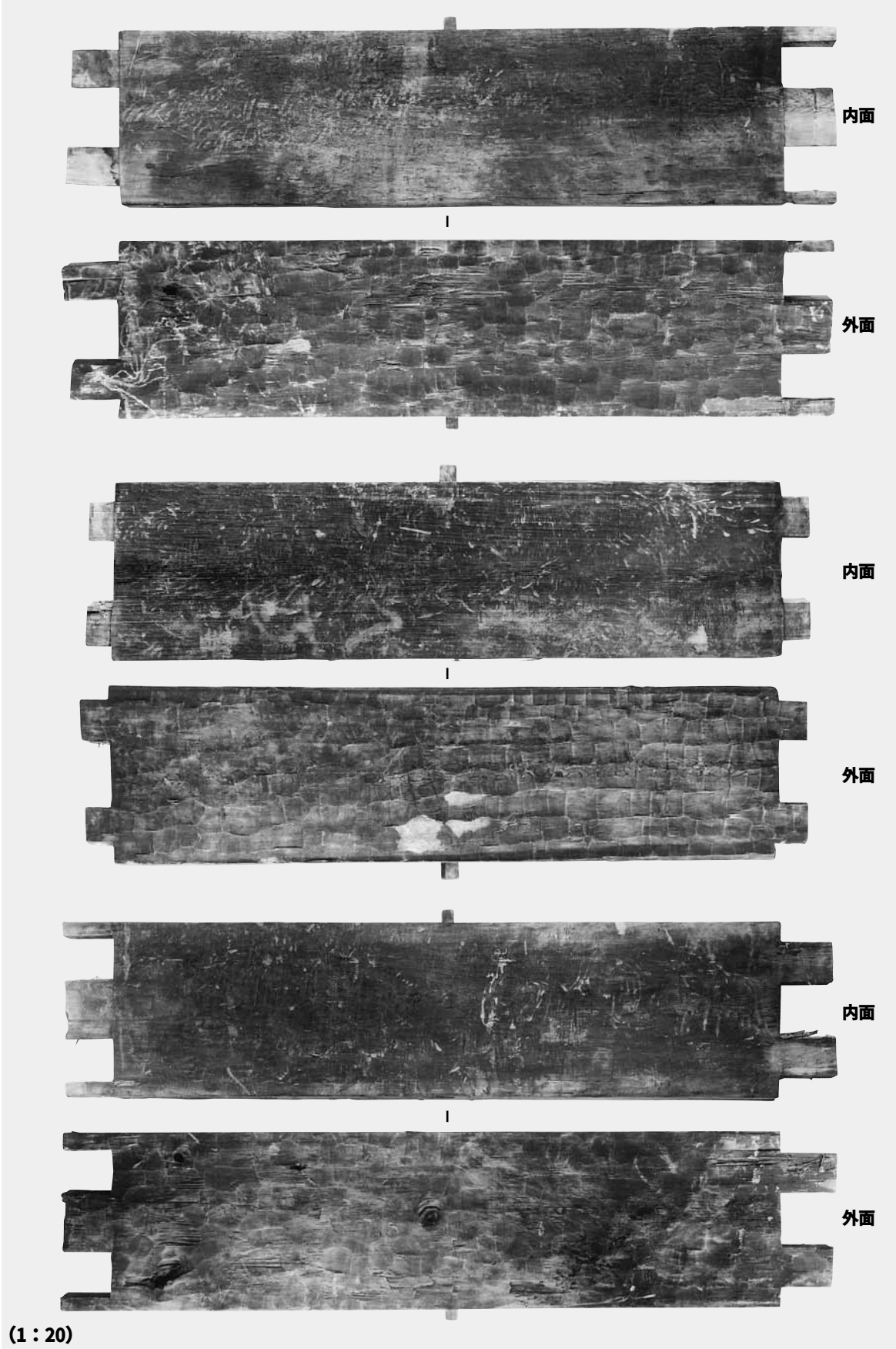
（1：20）

５段目北・東・南・西



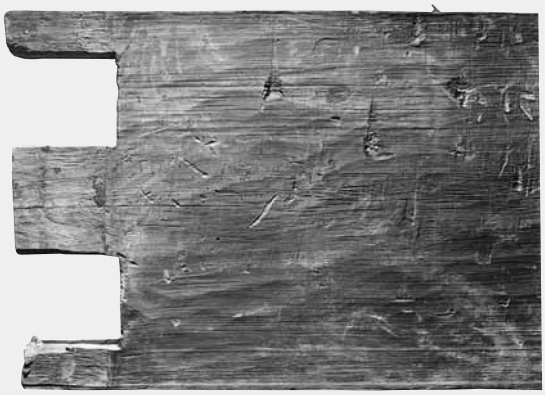
（1：20）

４段目北・東・２段目西



（1：20）

２段目北・東・南



内面

外面

1

2

上面

下面

3

北面

南面

4

5

１：表面加工痕跡（２段目西）

２：桟穴（１段目北）

３：太枘と枘穴（２段目西）

４：木口面の心墨（１段目東）

５：全体（２段目西）

著作権の関係で公開出来ません

西大寺伽藍絵図（部分）西大寺蔵

著作権の関係で公開出来ません

西大寺敷地之図（部分）東京大学文学部蔵

報告書抄録

ふりがな	さいだいじじきどういん・うきょうほくへんはっくつちょうさほうこく
書名	西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	川越俊一・大林　潤・今井晃樹・大河内隆之・金井　健・金原正子・小池伸彦・神野　恵・馬場　基・林　正憲・山本　崇・渡辺晃宏
編集機関	独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
所在地	〒630－8577　奈良県奈良市二条町２丁目９－１ Tel 0742－30－6832（都城発掘調査部・平城地区）
発行者	独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
所在地	〒630－8577　奈良県奈良市二条町２丁目９－１ Tel 0742－30－6832（都城発掘調査部・平城地区）
発行年月日	西暦　2007年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西大寺 平城京	奈良県奈良市 西大寺本町	29201		34度 41分 46秒	135度 46分 51秒	2006.5.24 ～10.16 2006.10.24 ～10.31	1,826	マンション 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西大寺 平城京	寺院 都城	奈良時代 奈良時代	堂舎 井戸 道路 区画施設 埋甕	土器 瓦 木簡 木製品 金属製品 動植物遺体	西大寺食堂院中枢部の様相を明らかにした 一条北大路南側溝を検出した

2007年３月15日　印　刷
2007年３月30日　発　行

西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告

編集発行　独立行政法人 文化財研究所　奈良文化財研究所
〒630－8577　奈良県奈良市二条町２丁目９－１
印　　刷　株式会社　明新社

ISBN　978－4－902010－49－７

学

愛